

平城京朱雀大路
発掘調査報告

奈良市

1974

平城京朱雀大路

発掘調査報告

奈良市

1974

序　　言

「咲く花の匂うが如く」とうたわれた平城京は、唐の長安の都を4分の1に模して造営され、シルクロードの東の終点として、中国文化を導入し、平城京に偉大なる天平文化の華を咲かせたのであります。その歴史は、1260年の輪廻により繰返されて、本年2月1日には、日本民族の古都・奈良市と中国民族の古都・西安市とが友好都市締結をなし、昔の文化の交流、友好往来の復活がなされた意義深い年であります。

この時期に、平城京の発掘調査並びに復原整備計画の推進が文化庁の手で進められ、我が奈良市といたしましても、朱雀大路の復原を計画し、奈良国立文化財研究所のご協力によって、平城京の羅城門と朱雀門を結ぶ中心街路である延長3.7km幅員85mのこの大路の規模を確認する目的で発掘調査を実施し、その実態を確認することができました。

この平城京の中心街路である朱雀大路確認により、従来、推定から平城京の条坊地割等について研究されていたものが、現地に合った復原計画の研究が進められることとなり、この調査報告書は平城京の保存に対する貴重な基礎資料として、又、本市の都市計画を推進する上にも重要な資料として活用できるものと信じ、よろこびにたえません。

今後は、この調査結果に基づき、政府各関係省庁の一層のご理解とご協力を得まして、我々が奈良市100年の大計として、その実現を念願いたしております。平城京朱雀大路復原計画が国家的事業として積極的に推進されんことを心から念じますと共に、私も今後一層、これが具体化に努力いたします所存でございます。

最後に、本調査にご協力いただきました関係各位のご労苦に対し感謝申し上げ、朱雀大路発掘調査報告書刊行のご挨拶といたします。

昭和49年3月

奈良市長　鍵田忠三郎

例　　言

1. 本書は、奈良市が昭和48年度の国庫金を受託して実施した平城京朱雀大路発掘調査の報告書である。
2. 本書には、朱雀大路発掘調査と関連して実施した予備調査一「遺存地割・地名による平城京の復原調査」の報告と、「航空写真による朱雀大路の調査」の結果もあわせて収録した。さらに朱雀大路関連遺跡として奈良市東九条町所在前川遺跡の発掘調査結果も併記した。
3. 発掘調査については、奈良県立文化財研究所があたり、遺存地割・地名による平城京の復原調査については、京都大学文学部教授岸俊男が主としてこれにあたった。
4. 遺構の実測はヘリコプターによる空中撮影でおこない、発掘区全域にわたり50分の1の実測図を作成した。PLAN-2の遺構実測図は、これをもとにしで作成したものである。
5. 報告書の作成には、調査員全員があたり、全体の討議をもとにそれぞれ分担執筆した。なお、文末に執筆者名を記し分担を明らかにした。
6. 遺構・遺物の写真是佃幹雄が撮影し、図版の作成には渡辺衆芳・藤村礼子の助力があった。航空写真についてはアジア航測株式会社の協力を得た。
7. 本書では、写真・実測図・拓本に共通する遺物番号をつけ、本文中もこの番号をもちいた。
8. 本書の編集には、黒崎直があたった。

目 次

序 文
例 言

I. 平城京朱雀大路発掘調査	1
1. 調査の経過———	2
2. 発掘区の位置———	2
3. 遺構———	4
A. 朱雀大路 B. 朱雀大路東側溝	
C. 朱雀大路西側溝 D. 左京六条一坊	
E. 右京六条一坊 F. 下ノ道東西側溝	
G. 小結	
4. 遺物———	11
A. 瓦類 B. 土器類 C. 木製品	
D. その他の遺物 E. 小結	
5. 考察———	21
A. 朱雀大路の方位 B. 朱雀大路の復原	
C. 文献からみた朱雀大路	
II. 前川遺跡発掘調査	27
1. 調査の契機と経過———	27
2. 遺跡の調査———	27
3. 遺物———	28
A. 井戸出土土器 B. 土壙出土土器	
4. まとめ———	33
III. 遺存地割・地名による平城京の復原調査	34
1. 目的———	34
2. 方法と経過———	34
3. 成果と考察———	35
4. 課題———	43
付 航空写真による朱雀大路の調査	45

図 版

PL.		本文対応頁
1	平城京朱雀大路航空写真-1	朱雀門跡—三条大路 34
2	平城京朱雀大路航空写真-2	三条大路—五条大路 34
3	平城京朱雀大路航空写真-3	五条大路—七条大路 34
4	平城京朱雀大路航空写真-4	七条大路—羅城門跡 34
5	発掘区上空から平城宮跡を望む	2
6	朱雀大路面と東側溝	4
7	朱雀大路東発掘区 1. 全景 2. 東側溝	4
8	同上 1. 東側溝 2. 左京六条一坊 3. 同 東端	7
9	朱雀大路西側溝	6
10	同上 1. 北壁 2. 護岸状況 3. 玉石の散乱	6
11	朱雀大路西発掘区 1. 右京六条一坊 2. 大路路面	8
12	下ッ道側溝 1. 西側溝 2. 東側溝 3. 同 断面	9
13	軒瓦	11
14	土器	12
15	土器・銅錢	14
16	木製品	17
17	奈良市柏木町付近 パンクロ写真と赤外写真	42
18	前川遺跡 1. 全景 2. 井戸 3. 発掘状況	27
19	前川遺跡 1. 井戸細部 2. 土器出土状況	28
20	前川遺跡 井戸出土土器	28
21	前川遺跡 井戸出土土器	29
22	前川遺跡 井戸出土土器	30
23	前川遺跡 井戸出土土器	31
24	前川遺跡 士壇出土土器	31

図 面

PLAN

	本文対応頁
1 朱雀大路発掘区位置図	4
2 朱雀大路発掘調査遺構図	4
3 前川遺跡遺構配置図・井戸実測図	27

図版対応図面

	対応図版
○ 土器実測図	14
○ 土器実測図	15
○ 木製品実測図	16
○ 前川遺跡 土器実測図	20
○ 前川遺跡 土器実測図	21
○ 前川遺跡 土器実測図	22
○ 前川遺跡 土器実測図	23
○ 前川遺跡 土器実測図	24

付 図

遺存地割・地名による平城京復原図

挿 図 ・ 表

Fig.

1 発掘調査地位置図.....	3
2 大路・東側溝土層図.....	5
3 大路西側溝土層図.....	6
4 大路・西側溝土層図.....	6
5 左京六条一坊西半土層図.....	7
6 左京六条一坊東半土層図.....	8
7 右京六条一坊土層図.....	8
8 軒瓦拓本・実測図.....	13
9 銅錢拓本.....	18
10 平城京内出土軒瓦.....	20

Fig.

11 方位概念図.....	22
12 朱雀大路横断面模式図	23
13 前川遺跡土簡器法量図	24
14 条・坊間距離の概測値	38
Tab.	
1 銅錢計測表.....	19
2 方位計測座標表.....	22
3 朱雀大路利用事例一覧表	25
4 バンロク・赤外線写真比較表	42

I 平城京朱雀大路発掘調査

朱雀大路は、奈良盆地を南北に縦貫する下ノ道の北方部にあたり、平城京の羅城門と朱雀門とを結ぶ京の中心街路である。近年、京に関する調査研究も次第に進み、多くの興味ある事実が明らかになってきている。朱雀大路についても、遺存地割による朱雀大路幅員の復原や、羅城門跡発掘調査による朱雀大路西側溝と西築堤の検出など、調査研究が蓄積されてきている。現在では、朱雀大路周辺にお水田もかなり残っているが、開発は急速に進み、今後無秩序に開発される恐れが大きい。このため、奈良市では、遺跡の保存と、朱雀大路を生かした潤和ある都市計画構想を立案する必要にからんがみ、その基礎資料を得るため今回の朱雀大路発掘調査を計画実施した。発掘調査は、奈良市の依頼により奈良国立文化財研究所がおこなった。

平城京朱雀大路それ自体を調査対象とした発掘調査は、これまでおこなわれたことがなかった。ただ朱雀大路の両端に位置する朱雀門と羅城門については、既に発掘調査がおこなわれている。朱雀門の調査は、奈良国立文化財研究所が、昭和38年度に平城宮第16次調査として実施し、朱雀門の規模を確認している。^{註1}また羅城門の調査は、昭和44・45・46年の三年にわたり、奈良市・大和郡山市の依頼をうけた同研究所が調査を実施している。^{註2}この調査では、平城京の正面玄関にあたる羅城門およびその周辺の遺構を検出している。羅城門は、近世郡山城築城の際、佐保川の河道を同門の中心部分につけかえたため、遺構は殆んど破壊されていたが、羅城門の規模・構造を推定できる資料を得ている。この両門の調査によって、朱雀大路の始点と終点の位置はすでに判明しているのである。

また昭和44・45年の両年度に、奈良市の依頼で、平城京保存調査会(会長権本杜人氏)は「遺存地割による平城京の復原調査」をおこない、現在ある水田畔・水田・里道などの地割を通して平城京の条坊を復原した。これによると、朱雀大路も今日の水田畔や水路などで、地面上に鮮明に追跡できることが判明した。この調査によって平城京朱雀大路も、平安京朱雀大路の路幅が築地心々で28丈と延喜式に記録されているものに近い規模をもつことが推測できた。しかし、平城京朱雀大路については、その規模などを示す文献史料がないため、地割によって知られる路幅が、どこからどこまでの距離を示しているか不明であり、まして路面の状況、側溝の様子などがいかなるものであるかなど、発掘調査によらなければ判らないことであった。

今回の発掘調査は、朱雀大路に関する上記の点を明らかにし、あわせて同大路の保存修景にも役立てる目的で実施したものである。発掘地点としては、朱雀大路のほぼ中間にあたる六条条間路の北側に設定した。以下、朱雀大路発掘調査の結果を報告したい。

(狩野 久)

註1 「昭和39年度平城宮跡発掘調査概要」(『奈良国立文化財研究所年報 1965年』)

註2 大和郡山市教育委員会『平城京羅城門跡発掘調査報告』1972年

註3 岸 俊男「平城京の復原的調査研究」(『平城京の復原保存計画に関する調査研究』奈良市
1972年)

1. 調査の経過

平城京朱雀大路の発掘調査は、昭和49年2月15日に開始し、同年3月30日に終了した。その調査期間は44日間である。発掘作業開始に先だって、2月15日から19日かけて、まず準備作業をおこなった。発掘調査の準備として、ベルトコンベア用の動力線引込み電柱設置と地下ケーブル線の埋設をおこない、あわせて現場小屋などの建設をおこなった。2月16日からは発掘対象地において、機械による表土排除をおこない、19日には遺構と直後関連しない地表下約1mまでの上を除去し終り、調査の前準備を終了した。

2月21日からは、本格的に発掘調査を開始した。調査は東側に設定した発掘区から始め、遺構上面をおおう茶褐色砂質土を下げるに大路路面があらわれ、3月1日には朱雀大路東側溝の存在と位置を確認した。3月4日からは西側に設定した発掘区の調査に移り、3月8日には、西側溝とそれに設けられた堰を検出した。しかし最初設定した発掘区では、西側溝幅を確認できないので一部発掘区を拡張した。この結果西側溝の全幅が検出でき、朱雀大路路幅を知る手掛りを得ることとなった。これと平行して検出遺構の写真撮影を順次おこなった。

計画した発掘区全域の調査がほぼ終了した3月22日には、ヘリコプターによる空中からの遺構写真測量を実施した。その後、発掘区全域にわたり補足確認調査をおこない、壁面の上層図などを作成した。これとともに、朱雀大路路面内で、下ヶ道東西両側溝の確認や、西側発掘区での古墳時代の溝の掘り下げを一部おこない3月28日には、発掘調査を終了した。埋戻しは3月26日から開始し、調査を終了した地域から順次進めた。埋戻しは、表土除土と同様に機械によっておこない、あわせて境界溝の補修なども実施して3月30日に全作業を終了した。

(工業普通)

2. 発掘区の位置

今回の発掘調査対象地は、奈良市柏木町カケコシ182・183・185～189番地、及び同市六条町六条183～185番地である。この位置は、朱雀大路が五条・六条の条間路と交叉する部分の北側にあたり、朱雀門と羅城門とを結ぶ朱雀大路のほぼ中間点に近いところである。現在県道「京終停車場・薬師寺線」が発掘区の南側を東西に走っており、この道路が、平城京の条間路の位置をほぼ踏襲しているものであることがわかる。

発掘地周辺は、標高57～58mをはかり、北から南へとゆるやかな下り勾配となっている。ちなみに平城宮の中心部との標高差をはかると15m以上にもなる。また東西両側へはしだいに上り勾配となるため、この付近は北と東西方からの水が集まり、湿地帯となっている。

発掘地周辺には、まだ水田が多く残り、水田地帯の様相をとどめている。発掘地に立てば、西南には薬師寺東塔が、北方には遠く奈良山丘陵の高所が望まれる。しかしこの景観も最近の都市化の波によりしだいに失われつつある。現在発掘地の南東には県立奈良商業高等学校の校舎が、北には奈良県立工業試験場の建物が建ち、大きく変貌しようとしている。

朱雀大路については、南北に走る畦畔・水路などによる条坊復原調査から、ほぼその位置と

規模が判明している。この成果を参考にして、今回の発掘調査区を設定した。この調査では、朱雀大路とその東西両側溝の検出を目的としているが、更にこれに加えて朱雀大路に接する築地とその内方の街区の確認をも目的として計画した。このため、朱雀大路全幅を検出するだけでも全長90mに近い発掘区が必要となり、街区まで合めると100mをはるかに超える発掘区を東西に設定しなければならない。これは用地確保などの制約があり困難な問題である。

このため今回の調査では、北と南に約70m離れて東西の発掘区を設定せざるをえなかった。

東に設定した発掘区は3ヶ所にわかれ、朱雀大路東半部とその東側溝・東築地、および左京六条一坊の街区の検出を目的としている。発掘区は、東西全長70mとし、ほぼ一直線に設定した。西に設定した発掘区は、2ヶ所にわかれ、朱雀大路西半部とその西側溝・西築地、および右京六条一坊の街区の検出を目的とした。発掘区はL字形とし、西側溝を南北24mにわたって検出できるように考慮した。この発掘区は、後述するように西側溝全幅を検出するに至らず北端で一部拡張することとなった。今回の発掘面積は、東側発掘区3ヶ所で約560m²、西側発掘区2ヶ所で約420m²をはかり、東西両発掘区の合計980m²(約300坪)である。

(黒崎 直)



Fig. 1 発掘調査位置図

3. 遺構

まず発掘区の土層について概観しておきたい。今回発掘調査をおこなったところは、すでに水田ではなく、耕作土の上に平均50cm前後の山上が盛土されていた。このため発掘前の地表高は周辺の水田面よりも高く、県道の路面とほぼ等しい高さとなっている。盛上した山土の下には厚さ10~20cmの黒色粘質土（水田耕土）があり、その底下に厚さ10cm前後の灰褐色砂質土（水田底土）が存在する。次に、東側発掘区では暗灰色あるいは暗茶褐色砂質土があり、西側発掘区では灰褐色粘質土が堆積している。これらの土層はともに20cm前後の厚さを持つ。東側発掘区では、この土層の下面にはほぼ水平にマンガンの沈着がみられ、発掘区西端すなわち朱雀大路中央部付近ではそれが大路面に接している。西側発掘区ではマンガンの沈着面より更に下層にもう一層灰色粘土層の堆積がみられ、その下層が朱雀大路面となる。東側発掘区では耕作土以下3層まで近世の遺物を含み、西側発掘区では耕作土以下2層までが近世のものを含む、遺構面上の2層からは平安時代から鎌倉時代初め頃までの遺物を出土する。

A. 朱雀大路

今回の調査で確認した朱雀大路の路面敷幅は、67.3mをはかり、東側発掘区でその東半分34.6mを、また西側発掘区で西半分25.3mを検出した。この成果からすると朱雀大路の推定心は、東側発掘区西端から約40cm東へ寄ったところにある。検出した朱雀大路面は、上盛した現地表面から、東側発掘区で約90cm、西側発掘区で約1.5mの深さに存在し、標高では、東側で56.8m、西側で56.1mをはかる。路面は全体を通じて黄色または青灰色の砂質土からなっており、現状ではその表面に疊敷き、瓦敷きなどの造作は認められなかった。大路の東西両側には後述する溝が設けられており、大路面はその側溝に近づくにつれて、次第に傾斜して下り、約40~50cmの差がついて路肩をなしている。この路肩には何らの保護施設も認められなかつた。路面上の造作あるいは路肩の旋設の有無については、調査によって検出した面が、奈良時代の路面そのものであるか否かについては、にわかに結論を下すことはできない。しかし、検出した路面両端がゆるやかに傾斜している状況からみて、後世に削平をうけているとしてもごくわずかで、奈良時代路面とさほど差のない状態をとどめていたと考えて誤りではないだろう。そうすると、路面上には何らの造作も施されなかつたものと考えられよう。

朱雀大路面は自然堆積土とみられる厚さ約20cmの砂質土で形成されていた。大路面上には極めて少量奈良時代の瓦片が認められた程度で、その他の遺物は全く認められなかつた。西側発掘区の大路面上には、大路西側溝からほぼ東に流れ、そののち南へ折れまがる素掘りの溝一条を検出した。この溝は、最大幅1.5m、深さ0.3mをはかり、機能については、位置的にみて後述する西側溝上層に設けられた堰と閑漑するものと考えられよう。

B. 朱雀大路東側溝

朱雀大路東縁に沿って南北に走る溝を検出した。この南北溝は朱雀大路の東側溝であり、今回の調査では南北約10mにわたって検出した。側溝の規模については溝岸に出入りがあり、また底にも大小の溜りがみられ一様ではないが、本來の溝幅は4.5m、深さ1.1m前後であること

が復原できる。側溝の西岸すなわち大路側の岸は、とくに出入りが激しく、最大1.5m前後えぐり取られ、それだけ磧幅が拡がる。東岸は西岸に比べて直線的で大きな浸食はうけていないようである。東岸には、西岸の肩部の高さとみあう位置に幅約2mの平坦面—中段がみられる。ここには柱穴らしき遺構もみられるが、この中段がどのような性格のものであるか判らない。側溝東岸と西岸では約20cmの標高差があるが、これは大路路肩が傾斜していることによる。側溝両岸ともに杭や石積みなどの護岸施設はみられない。側溝底には3ヶ所の滝りがみとめられた。南で検出した滝りは、長径7mを超える橢円形の大きなもので深さは45cmある。溝底の標高は発掘区北端で55.6m、南端で55.5mであり、約9mの間でわずか10cmの差しかなく、傾斜はきわめて緩い。

溝内の堆積土の状況を断面で観察すると下部は砂と粘土が互層になっており、水がよく流れていたことがわかる。溝底には暗灰色粘土層が約10cmの厚さで堆積し、その上に厚さ30cm前後の青灰色の砂層がある。この砂層には厚さ1~2cmの粘土層が幾層もみられ、この時期に最も水がよく流れていったことがわかる。砂層の上面は凹凸があり一様ではなく、その上に厚さ20cmの暗灰色粘土層が堆積している。この粘土層の上には厚さ30cm前後の砂質土があり、大路側溝を埋めている。砂質土は色調の差で上下2層に区別できる。東岸では溝層に接して粘土層がはりついているのが注意される。この粘土層は東岸にみとめられた中段と関連し、後に段をなくす目的で粘土をはりつけたものとみられる。

溝中から出土した遺物については、瓦片が正例的に多く土器類の出土は少なかった。遺物は上部暗灰色粘土層から最も多く出土した。これに次いで、この粘土層の上下に接する土層中からも少なからず遺物が出土した。瓦片についてみれば、側溝東寄りに多くみられ西岸に近づくにつれて少なくなっていた。このことは、溝の東側に瓦を葺いた遺構が存在していたことを暗示しているとみられる。また砂質土中からは獸骨が出土している。

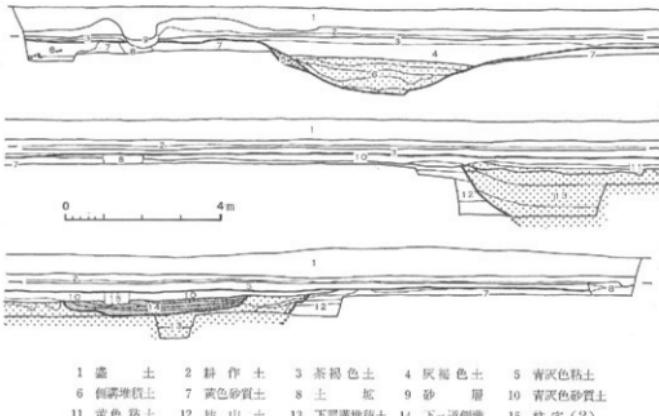


Fig. 2 大路・東側溝土層図

C. 朱雀大路西側溝

朱雀大路西側に沿って南北に走る溝を検出した。この南北溝は、朱雀大路の西側溝であり、今回の調査では、南北約22mにわたって検出した。側溝の規模については、検出最大幅をとれば7.5m前後、深さ1m余りあり、東側溝とはほぼ似た規模をもつ溝であることがわかる。しかし、溝幅については、溝岸が3回以上の流水による変形あるいはそれに対する修復がみられ、本來の溝岸を明確に指摘することはできない。

西側溝の変遷については、発掘区北端の断面にみえる土層の観察から、次のように考えられる。断面の土層では2つの安定した溝底と両者に先行する溝の西岸がみとめられ、最低3回の変形修復という変遷がたどれる。最も古い時期の溝底は中位の溝によってきられて確認できないうが、西岸はみとめられる。この下位溝は粗砂層を西岸とするものでこれに伴うとみられる杭も数列検出している。粗砂が溝岸をなしていることから、本來の下位溝幅は上層でみられるものよりも狭く、後に流水によって西方へ大きく侵蝕されたものであろう。杭列については、西岸の侵蝕につれて、護岸の目的で打ち込まれたものであろう。

中位溝は明確な底をとどめているが、その上部は上位溝で削り取られ、両岸を明確にできな

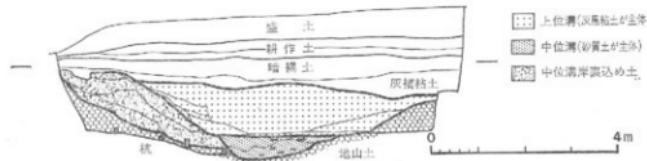


Fig. 3 大路西側溝北端土層図

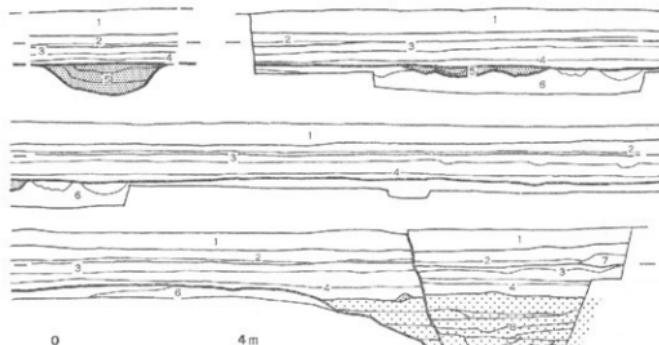


Fig. 4 大路・西側溝土層図

い。溝底には遺物を多く含む砂層が30cm前後の厚さに堆積し、その上に黒灰色砂質土層が厚さ20cm前後で、覆っている。黒灰色砂質土の上面は上位溝の底にあたる。中位溝にともなう岸については西岸にその痕跡がみられる。大きくえぐられた下位溝の西岸に砂あるいは砂質土などをはりつけて修復し、中位溝の西岸としている。しかしこの岸も上位溝の浸蝕によって変形しており、中位溝の幅を知ることはできない。

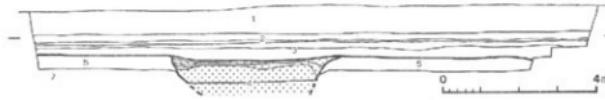
上位溝は幅3.5mの平道な底をもち深さ約60cmをはかる。溝底には黒褐色粗砂層が10cmの厚さで堆積し、その上には灰黒色粘土層が50cmと厚く地盤している。西岸付近には岸から流れ込んだとみられる砂が堆積している。上位溝の両岸はいざれも粗砂層で形成されており、流水による変形をうけて溝幅が拡がっていたことがわかる。以上のべたように溝岸の変遷が激しく、本来の溝幅を明確にできない。一応、下位溝が示す溝の最大幅7.60m、上位溝が示す最小幅6.40mという2通りの数値を呈示しておきたい。

西側溝中央やや南寄りの位置に、溝を横切る幅約5mの堰遺構を認めた。堰は約8列の杭列とそれにからめた粗枝の横木で構成している。堰は溝の主軸と直交せずやや東に偏る主軸を持っている。おそらくせき止めた流水を東南方へ流す機能をもっていたものであり、大路上で検出した斜行溝と関連するのであろう。この堰は上位溝を埋める灰黒色粘土層を基盤として構築されていることからみて、溝の最終段階に作られたものである。

西側溝南端では、西岸の下方に径30cm程度の玉石を数個検出した。この地点は六条通間路に接する位置と推定されることから、おそらく朱雀大路と条間路との交叉点における施設、例えば、橋などと関係するものかも知れない。発掘区南端における溝底の標高は54.50mであり、北端の溝底の標高54.48mと大きな差はみとめられない。

D. 左京六条一坊

大路側溝東側に設けた発掘区は、左京六条一坊二坪に該当する。側溝東側の奈良時代遺構面は、朱雀大路面と同じ黄褐色砂質土である。この遺構面を覆う黄褐色粘土層中には、瓦、土器などの遺物を認める。側溝東岸から東4m以内には、ほとんど遺構はみられず平坦である。この付近に南北に走る狭地の存在が想定されるが、今回の調査ではその痕跡さえもみとめ得なかった。その東には径1m以内の浅い土塹が点在し、中に鉄滓や焼土・炭化物がつまっていた。現水路をはさんでさらに東の発掘区でも、その西半は同じ様相を示している。この付近から、るっぽ片や粘土製らしい鉢型の断片が出土し、ここに鍛冶の工房があったことが知られる。この東には再び顯著な遺構がみられない平坦面がつづく、ここには径20~30cmの穴や幅40~50cmの小溝がみられるが性格は不明である。おそらく時期的には平安時代以降に属する遺構であろう。この部分の下層には、幅約3.8mの溝がみられる。溝は、ほぼ北から南へ流れしており、深



1 砂 土 2 树 防 土 3 茶 酱 土 4 下层溝・地盤土 5 黑褐色砂質土

Fig. 5 左京六条一坊四半土層図

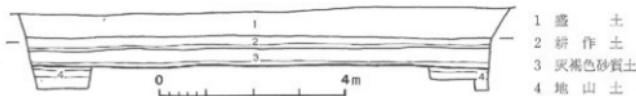


Fig. 6 左京六条一坊東半土層図

さは1m以上ある。溝内からは遺物を検出できなかったため時期は不明である。

また今回の調査では、左京六条一切二坪と七坪との坪境を確認するため、その推定位置を5m×10mにわたって発掘調査した。しかし、顯著な遺構はみとめられず、坪境も確認できなかった。しかしここからも軒丸・軒平瓦が出土し、近くに建物の在存が想定できよう。

E. 右京六条一坊

大路側溝西側に設けた発掘区は右京六条一坊二坪に該当する。確認できた奈良時代の遺構面は、青灰色砂質土である。遺構面は東端が低く西方へしだいに高くなり、西端では約30cmほど高くなっている。この遺構面を覆う褐色土中には瓦・土器などの遺物を認める。大路側溝西岸は現畦畔に相当し、その西側に存在するとみられる築地も同じく現水路と畦畔下を走るものと考えられる。このため発掘区を可能なかぎり東まで設定して調査をおこなったが、築地はその痕跡すら検出できなかった。おそらく推定のように、幅5.5mをはかる現水路と畦畔下に築地が存在するのであろう。検出した奈良時代の遺構は、発掘区西北隅付近の掘立柱穴1である。この柱穴掘形は東西約1.1m、深さ40cmをはかり、南北辺は未確認だがおそらく四角形の平面をもつものであろう。掘立柱は掘形の東壁に接して配され、径約15cm、長さ40cmが残存していた。この柱穴に組みあう柱穴は今回検出できず、どのような性格の遺構であるのか不明である。

奈良時代遺構面の下に溝状の遺構が存在する。この溝は北西から南東に向い、幅約3~4mの規模をもち、深さについては約1.5mと推定できる。溝を埋める土層は砂層と暗灰色粘土層の入り混じる土層であり、全体に多量の遺物を包含していた。溝の堆積上は大きく3層に区別できた。下層は砂ないしは砂質土層であり木質遺物が多く残存している。中層は、黒灰色粘土

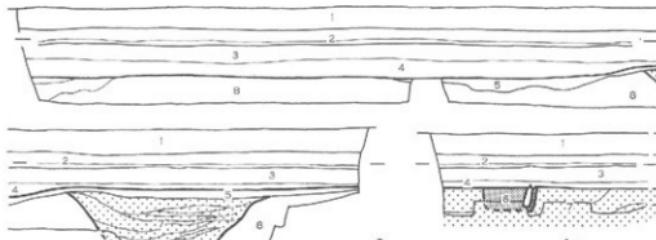


Fig. 7 右京六条一坊土層図

層と砂層との互層であり、木質遺物は少なく上部器を多量に包含していた。上層は灰色粘土層で土筋器を多く包含し、須恵器も若干含んでいる。発掘範囲が極めて小部分であるため、この溝状遺構の性格は決しがたい。しかし砂層の堆積状況からみて、土壤とは違ひ水の流れる溝ないしは川に近い性格のものであろう。遺物が豊富なことから、上流の近くに聚落など古墳時代の遺跡の存在が考えられよう。

F. 下ッ道側溝

朱雀大路路面をなす質色ないしは青灰色砂質土層の下から南北に走る2条の溝を検出した。2条の溝は、朱雀大路推定中心線をはさんでほぼ東西対称の位置に存在している。

東側発掘区では、発掘区西端から約7m東へ寄ったところから、幅約4.5m、深さ約40cmの南北溝を検出した。この溝の埋土中には、少量の土師器の細片を包含するが、年代を決定できるものではない。また西側発掘区では、その東端から約3m西へ寄った箇所に、幅約4m、深さ20~70cmの南北溝を検出した。溝内には粘土と砂が堆積し、この中に遺物が含まれている。遺物は上器片であり、7世紀後半を下限とする土師器、須恵器が出土している。この平行する2つの溝は、朱雀大路推定中心線をはさんで対称の位置にあり、その溝心々距離は約23mをはかる。現段階では、この東西両溝にはさまれた間を、朱雀大路設定以前の下ッ道路面と考え、両溝はその側溝と考えられる。

なお、下ッ道東側溝の下には、さらに大きな溝が存在する。この溝の西岸は、下ッ道側溝のそれとほぼ一致し、そこから約13mの幅をもつ。深さは1.5m以上あり、大規模な壌割り状の遺構である。溝の中には自然木が多量に埋没していた。この下層には厚く砂が堆積していたが、今回の調査では、発掘面積が狭少なため、底を確認できなかった。また時期を決定しうる遺物も出土せず、遺構の性格と年代については明らかでない。

(七条善通・松沢帯生)

G. 小 結

今回の朱雀大路確認調査は、大路面とその東西両側溝を検出することによって、一心当初の目的を達成することができた。朱雀大路の路面は、両側溝に接する部分——路肩にかなりの出入りがあって、いちがいに数値を示しえないが、およそ67mということができる。路面は全体を通じて自然堆積である砂質七からなっている。検出した面が、奈良時代の路面そのものではないが、前述したようにさほど大きく削平されてはいない。そうすると奈良時代路面の状況は、調査によって検出した状況と大差なく、路面には石敷きなどの造作がほどこされていかなかったことが判る。路面は東西両側溝に近づくにつれてゆるやかに傾斜して下がり、路肩では路面中央部より50cmの差がある。このことから大路の横断面は、中央の高いカマボコ覃を呈していたものといえよう。おそらく大路面の排水を考えての配慮であろう。

朱雀大路の東西両側溝は、いずれも素掘りのほぼ同じ規模のもので、幅6~7m、深さ1~1.5mをはかる。溝岸の補修については、西側溝でその痕跡をみとめた。流水によって岸が大きくなってしまったため、土を入れてそれを補修したり、あるいは溝を深く掘ったりして計3回にわたる溝の変遷があとづけられた。東側溝でも小規模ながら岸に粘土をはりつけているのが一

部にみられた。岸の補修は街区に接する側にのみ認められ、大路側にはみられない。これは、側溝岸に接して築地が存在しており、岸が大きくえぐられると築地自体まで崩壊する危険性があるため再三にわたって補修をおこなったのであろう。東側溝では砂と粘土の互層の堆積があり、かなりの流水があったことがわかる。西側溝でも中位溝には同様の状況を示しているが、上位の溝では砂質土と粘土が堆積し、大きな流れがなかったようである。とくに堰を設けた段階では、その上流に灰黑色粘土が堆積し、そこにニナのような巻貝や二枚貝が棲息していたらしい。東側溝東岸に柱穴状の土塊があったり、西側溝南端付近に大きな玉石が散乱していたりして、溝をまたぐ何らかの施設が考えられるが、今回の調査では面積的に狹少なため、これらの性格についてはさだかでない。

大路東西両側溝の東側および西側には、溝に平行して南北に走る築地が存在したと考えられるが、今回の発掘調査では検出することができなかつた。東側での築地想定位置には、焼土や鉄滓などが入った土塊群があるだけで築地の痕跡すらも認め得なかつた。また西側の築地は、西側溝の西に接してある現在の農道下に埋没しているとみられ、ここでも築地を認めるることはできなかつた。しかし築地の存在については、東西両側溝の堆積上層中に多くの瓦が含まれており、遺構の上からは存在をみとめることができない築地が、溝外方に平行して走っていたことを想定できよう。

左京六条一坊二坪では、その西寄りの部分に、鉄滓・焼土などを含む土塊を検出した。この位置に鍛冶の工房跡の存在が想定できるが、調査では遺物などそれに関連する明確な遺構を検出できなかつたため、これ以上積極的な考えを示すことは不可能である。ただ土塊が築地想定上にまで分布することから、土塊が奈良時代末以降のものである可能性が大きい。今回最も東に設けた発掘区は、二坪と七坪との境を確認する目的であったが、小路や側溝などの遺構を検出することはできなかつた。

右京六条二坪では、西側溝の中心線から西へ20mまで遺構面が低く、それより以西は約30cm高くなっている。発掘区西北隅付近で柱根をとどめる柱穴を検出した。柱穴が1箇所しか認めえなかつたため、遺構の性格と規模は不明である。しかしこの二坪では、この付近から地盤も高くなり、これ以西に坪内の主要な建物が拵がっていたものと考えられる。更に広く調査をおこなえば、これらの問題はより明確にならう。

朱雀大路路尚下には、下ッ道の東西両側溝と想定した2条の南北溝がある。この両溝は、心々距離が約23mあって、その間の中心線が朱雀大路の中心線と一致することを知り得た。両側溝に埋まれた下ッ道々幅は、かって平城宮朱雀門北側で確認したその道幅とほぼ一致する。このことから朱雀大路造成にあたって、下ッ道を基本的に踏襲し東西に路幅を拡げるという計画で朱雀大路が設定されていることが裏づけられよう。この両側溝出土の遺物は5世紀前半頃の須恵器片から7世紀末頃の土師器片であり、全体に出土量が少ないとあって、溝の上層を明確にすることはできなかつた。ただ下限については、先に述べた朱雀門北側で確認した下ッ道側溝（SD1900）の年代にはほぼ一致するのであろう。

西側発掘区西端で西北から東南へ流れる古墳時代の溝を検出した。この溝からは多量の土師器をはじめ木製品も出土した。発掘範囲が狭少なため、集落などとの関連は一切不明だが、遺物の埋没状況からみてさほど遠くない場所に同時代の集落が想定できる。平城京城内というこ

とで、それより古い時期の遺跡については充分に注意されていないのが現状である。平城宮城内の調査では、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡が多くみつかっている。今後これらについても充分注意していかなければならない。

(工楽普通・黒崎直)

4. 遺 物

遺物は大路両側溝・上塙や奈良時代以前の溝などから出土し、瓦・土器・木製品・金属製品など各種にわたる。とくに大路両側溝と西側免掘区の古墳時代溝からは良好な遺物を得た。一部には未整理の部分もあるが、大半は整理を終了している。以下これらについて報告する。

A. 瓦 類

丸類は主として朱雀大路両側溝から集中して出土した。軒瓦および丸・平瓦とも量的には少ない。軒瓦は、軒丸瓦5型式7個体、軒平瓦2型式9個体である。なお、軒瓦の型式番号は奈良国立文化財研究所で設定した番号を使用する。^{註1}

軒丸瓦 1は6225-A型式で、内区に複弁8弁蓮華文を配し、外区外縁に凸鋸歯文をめぐらす。1+6の蓮子をもつ中房は大きく作られる。外区内縁には間線をめぐらすが、内外区を隔する界線とともに、2重圓線にみえる。本型式は、平城宮式と呼ばれるものひとつで、^{註2}平城宮跡、とくに第2次朝堂院地城で使用されたものである。

2は6304-B型式で、内区に界線で押んだ複弁8弁蓮華文を配し、外区内縁に珠文、外縁に線鋸歯文をめぐらす。1+6の蓮子をもつ中房が突出することは本型式の大きな特徴である。類例は、平城宮跡、粟御寺で出土している。

3・4・5は6316型式で、いずれも内区の主文として開弁のない隠接した複弁8弁蓮華文を配する。この型式は、蓮子・珠文の数、中房の高まりなどによって、8種(A~F・H・I)に細分できる。今回の調査では、6316-D_bとさらに2種の新型式(G・J)が出土した。6316-D_b(3)は、1+4の蓮子をもつ6316-D_aに蓮子を彫り加え1+8の蓮子としたものである。本例がD_bであることは、蓮弁と界線の間にある鉢のキズによって確認できる。新型式6316-G(4)は1+7の蓮子をもち、中房は凸である。丸瓦の取付けは低く、接合部内外面ともに粘土を厚くあてる。接合線は台形を示す。また新型式6316-J(5)は1+7の蓮子をもち、中房は凸である。瓦当面は全体に細かな気孔が入って荒れている。丸瓦との接合部には、前者と同様に粘土を厚くあて、接合線は台形を示す。丸瓦部外面は経方向のヘラケズリで丹念に調整する。これら6316型式の類例は、平城宮跡、平城京羅城門周辺、西隆寺で出土している。

その他、外区文様のみの小片であるが、新型式が出土している。外区内縁には比較的大きく、突出した珠文を配している。外縁は斜線で、めぐらされた細かい線鋸歯文は外区内外縁を隔する圓線には接していない。外縁の外側0.8cmのところに範端を示す痕跡がみられる。

また、外区のみの小片であるが、巴文が出土している。内縁には珠文を配するが、通常みられるような等間隔には配置しない。外縁は直立線である。中世の所産である。

軒平瓦 7は6710-Ab型式で、山形の中心飾の左右に3回反転の均整唐草文を配し、

外区に珠文を疎にめぐらす。文様の線も太く、丁寧な彫刻ではない。頸は曲線類である。平瓦の凹面は、瓦当・側縁周辺を調整しているが、布目が全面に残る。凸面は縱方向にヘラミガキし、いぶし焼のような光沢をもつ。瓦当面から7.5cmの位置に丹土が付着しており、軒先からの瓦の出が明らかである。類例は、平城宮、羅城門、西隆寺跡などで出土している。

6は、6685-C型式で、花頭形の中心飾の左右に3回反転の均正唐草文を配し、外区に珠文をめぐらせた小型軒平瓦である。頸は欠失している。類例は、平城宮跡で出土している。

(森 邦大・岡本東三)

註1 軒瓦の型式番号標示については、『平城宮発掘調査報告』(1962年5月) 116・117頁を参照されたい。なお、この型式番号は年代の先后を示すものではないことを付記する。

註2 「(和43年度平城宮発掘調査概報)」(『奈良國立文化財研究所年報 1969』)

B. 土器類

今回の調査で多くの土器類が出土した。このうち、朱雀大路と関連する奈良・平安時代初頭の土器類には、上師器と須恵器が大多数を占め、他に綠釉陶器が1点、模壓カマド形土器1点がある。またこの他の古墳時代の土器も多く出土している。とくに西側発掘区で検出した講からは、古墳時代の上師器が多く出土しており器種も多様である。

奈良・平安時代の土器　　上器の多くは遺構上面の遺物包含層から出土したものであり、朱雀大路東西両側溝や路面など遺構と直接関連して出土したものは少ない。土器類はその大半が小さな破片となっており、原形をうかがい知ることのできるものは極めて少數である。

土師器　　朱雀大路側溝出土の上師器には、杯A、杯B、皿A、高杯、盤、壺、蓋がある。このうち杯B、壺、蓋は小片すぎて、との形を充分に復原できず、記述からはぶく。

a. 杯A　　全体のわかるものは1個体のみである。2は上り底の小さい底部と直に開くロ縁部からなるもの。内面および口縁部外側の上半まで横擦でし、他は不調整のいわゆるe手法によって調整し、口縁端部外面に1条の沈線が走る。他に、外向を笠で削り、内面に2重の螺旋暗文と放射暗文を施した底部の破片と、内面に放射暗文を施した口縁部破片がある。

b. 皿A　　3はわずかに屈曲する短いロ縁部と平底からなるもので、口縁端部は丸く内側に突出する。口縁部内外を横擦でし、底部外面は調整しない。

c. 高杯　　脚部の破片と杯口縁部破片が各1個体づつある。脚部は棒芯を用いて成形し、外向を笠で8角形に面取りしている。口縁部は浅い杯部のもので、端部内側が上方へ突出する。内面に螺旋暗文を施し、外面向を丁寧に笠磨きする。

d. 盤　　平らな底部と外反して開くロ縁部からなり、その外面2ヶ所に、粘土板で作った三角形の把手がつく。口縁部内面の端部寄りに放射暗文を施し、その下に螺旋ないしは連弧暗文を施す。外面には全体に笠磨きをおこなっている。

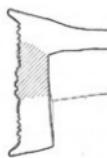
須恵器　　朱雀大路側溝出土の須恵器には、杯A・杯B・蓋・壺A・壺E・瓶・平瓶・甕がある。このうち杯A・蓋・平瓶・甕は小片であり、との形を充分に復原できず、記述からはぶくこととする。

a. 杯B　　との形を復原できるものは2個体である。5は外端部の突出した低い高台のつくるもので、口縁部はわずかながら外反する。口縁部外下半に笠削りを施している。

b. 蓋A　　4は口径20.5cm、高さ2.3cmで平坦な頂部とわずかに屈曲する口縁部からなり、



1. 複弁 8弁蓮華文 (6225A)
瓦当一復原径 16.7cm・厚 2.8cm、内区一中房径 6.8cm・蓮子 1+8・弁区
幅 2.7cm、外区一内緣幅 0.7cm・外
緣幅 1.3cm・凸鋸齒文 24、灰色、胎
土砂含む。



2. 複弁 8弁蓮華文 (6304B)
瓦当一復原径 16.7cm・厚 2.3cm、内区一中房径 3.7cm・蓮子 1+6・弁区
幅 3.2cm、外区一内緣幅 1.4cm・珠
文 20・外緣幅 1.6cm・線鋸齒文、黑
灰色、胎土鐵青。



3. 複弁 8弁蓮華文 (6316D)
瓦当一復原径 16.0cm・厚 4.7cm、内区一中房径 5.1cm・蓮子 1+8・弁区
幅 3.2cm、外区一内緣幅 1.0cm・珠
文 17・外緣幅 1.2cm・素文、灰黑
色、胎土砂含む。



4. 複弁 8弁蓮華文 (6316G)
瓦当一径 15.5cm・厚 4.9cm、内区一
中房径 4.0cm・蓮子 1+7・弁区幅 3.3
cm、外区一内緣幅 1.2cm・珠文・外
緣幅 1.7cm・線鋸齒文、灰色、胎
土砂・小石含む。



5. 複弁 8弁蓮華文 (6316J)
瓦当一径 15.2cm・厚 3.8cm、内区一
中房径 3.4cm・蓮子 1+7・弁区幅 3.4
cm、外区一内緣幅 1.1cm・珠文 16・
外緣幅 1.6cm・線鋸齒文、灰色、胎
土鐵青。



6. 均整唐草文 (6685)

瓦当厚 4.7cm、頭不明、珠文一上外
区・下外区不明・筋区 2、灰白色、胎
土砂多量に含む。



7. 均整唐草文 (6710Ab)

瓦当厚 5.7cm、曲線彫。珠文一上外
区 13・下外区 13・筋区 2、凹面一布
痕アリ、凸面一縱方向ヘラケズ、丹
付着、黒灰色、胎土鐵青。

Fig. 8 軒瓦拓本・実測図

偏平な宝珠つまみがつく。内面はロクロ上で撫で、頂部外面は挽削りのち撫でで調整する。

e. 壺A いわゆる茶壺である。8は直線的に張り出した肩部と直立する短い口縁部からなり、肩部外面には自然釉が付着している。胴部および底部は残存しない。

d. 壺E 7はロクロの上で器体を挽き出し、糸切りによって切離して成形したもので、体部外面にはロクロ目が、底部外面には糸切りの痕跡が明瞭にみとめられる。

e. 瓶 9は瓶の口縁部の破片である。直角に近く外反した口縁部の端部を内側に折り曲げたもので、頸部外面にしづびり目の痕跡がかすかながらもみられる。口径部径8.9cmをはかる。

錆釉陶器 朱雀大路西側溝上層から出土した錆釉陶器がある。1の皿がそれで、口径14.5cm、高さ2cmに復原できる。器体の全面に濃緑色の釉を施している。底部は糸切り高台であり、外面に「十」形の範刻線がみられる。胎土は微砂粒を含み、黄灰色でやや硬質である。

模型土器 蓋のミニチュアが1点出土している。筒形の体部の1箇所を方形に切り取って焚口に作り、焚口の周囲に低いひさしを取りつけて窯に似せたものである。

土馬 大路東側溝東方の遺物包含層から土馬1体が出七した。胴部・尾部・左後脚部をとどめるが、原形を充分に知ることはできない。胴部と尾部は一連を作り、脚部を接合したものである。奈良時代前半期に属するものと考えられる。 (吉田恵二)

下ッ道側溝の土器 東西両側溝から土器が出土したが、東側溝のものは磨滅した土師質の細片が少量あるのみで、ここでは西側溝出土のものについて述べる。十器には上部器と須恵器があり、いずれも溝堆積上部の褐色砂層から出土している。

土師器 蓋と高杯がある。いずれも磨滅の著しい破片である。

a. 壺 体部の小片が1個体あるのみで復原できない。内外面に粗い刷毛目を残し、6mm前後の厚さをもつ。砂粒を多く含む胎土で焼成は堅い。

b. 高杯 破片であるが5個体分ある。18は杯底部と脚部上端をとどめる。調査は不明だが茶褐色を呈し、細砂を若干含む緻密な胎土で焼成は堅い。

須恵器 杯・蓋・有蓋高杯・甕・碗などがある。

a. 杯 13は口径10cm前後と推定でき、内傾するたちあがりに外上方にのびる受部がつく。体部下半をロクロ削りする。淡青灰色を呈し堅敏な焼成である。

b. 蓋 杯蓋が2個体ある。11は口径13cm前後のもので、口縁部と天井部とをわける稜は細く丸味をもって突出する。天井部の3分の2ほどはロクロ削りする。12もほぼ同じもので、ともに青灰色を呈し堅敏な焼成である。12は13と胎土・焼成の特徴が共通する。

c. 有蓋高杯 破片を含めて3個体ある。14は口径9.6cm、高さ9.3cmで丸みをおびた杯部に三方透しを配した短い脚部がつく。透しは下方に抜がる長方形で配置は不均齊である。15・16は脚部の破片である。いずれも青灰色で、砂粒をほとんど含まず、焼成は堅い。

d. 甕 5個体分の破片がある。いずれも体部の小片で原形は知りえない。内外面の叩き目を消し去っているものが多い。

e. 瓢 17は大型の甕とみられるものである。明確な肩を有し、そこに浅い櫛描波状文がみられる。口縁部と底盤は現存しないが、突帯をめぐらす口縁とやや尖る底部に復原できる。

古墳時代溝出土の土器 四側発掘区で検出した古墳時代の溝からは多くの土器が出土した。この溝の堆積土は上・中・下の3層に区分できる。上層からは土師器と須恵器が出土した

が、中・下層からは上部器のみが出土し、須恵器を含まない。

下層出土の土器 土器類のみに限られる。器種には、壺・甕・高杯がある。

a. 壺 33は平底丸底をもつ大壺の壺である。体部全周に細かい刷毛目があり、上半ではそのうえに縦の施磨きがまばらにほどこされている。赤褐色を呈する。

b. 甕 体部の小片が8個体分ある。厚さ3~4mmで、外側に刷毛目をほどこし、内面を範削りするものが大部分である。灰褐色を呈し、外面に煤の付着するものが多い。

c. 高杯 3個体ある。胎上に砂粒を多量に含み、焼成は堅く遺存は良い。21は口径21cmをはかり杯部外側に棱をもつ。口縁部内外面と棱の部分を横撫でし、その他を撫でて仕上げる。内外面に調整前の刷毛目を残している。脚部は外側を継に範削りし、内面上端に棒状具の先端の圧痕がある。明褐色を呈する。22は同様の器形で、口径が17cmとひとまわり小さい。内面には欠車状に刷毛目を残す。茶褐色を呈す。

中層出土の土器 上部器のみに限られる。器種には、壺・甕・器台・把手付鉢・高杯がある。すべて胎上に砂粒を含み、焼成は堅く、遺存は概して良好である。

a. 壺 5個体ある。二重口縁をもつものと単純に外反する口縁のもの、それに小型のものがある。29は二重口縁をもつ壺で、口径12cm、高さ16cmをはかる完形品である。底部は上げ底で、下膨らみの体部をもつ。口縁部外側は鋭い棱をして外反する。口縁部内外面は横撫であるが、内面にはさらに縦の施磨きをほどこす。体部外側は上半を斜めに施磨きし、下半はとくに調整しない。底部は範削りしている。32も二重口縁をもつ壺であるが29と異なり、口縁部がほぼ垂直に立ちあがるものである。口縁端部は肥厚しており、口径19.6cmをはかる。口縁部内外面とも横撫で仕上げる。茶褐色で焼成はきわめて堅い。他に32と類似する破片が1点ある。31は単純に外反する口縁部をもつもので推定口径18cmである。口縁部は一旦立ちあがって外反する。外側は刷毛目のち横撫で仕上げている。内面が灰色、外側は灰白色を呈す。30はいわゆる小型丸底土器と呼ばれる壺である。口径8cm、高さ8.9cmをはかる。体部は最大径が中位よりやや上にある扁球形を呈す。口縁部は下端がくびれ、内外面を横撫で仕上げる。体部の内面は範削りしているが外側は不明である。

b. 甕 8個体ある。これらは口縁端部内面が肥厚するものが大半である。35は口径16.4cmをはかり、口縁部はゆるやかに屈折して球形の体部につづく。口縁部内外面は横撫でし、体部上端にも横撫がおおよぶ。以下は刷毛目がみられる。体部内面は上端にしづり目と指頭圧痕を残し、以下を機に範削りしている。明褐色を呈す。36は35と同様で明褐色を呈す。37は復原口径14.5cmをはかるが、上記の甕と異なり、口縁部は直線的である。内面は灰色、外側は灰白色を呈す。その他は器壁厚が4mm前後の体部の小片である。外側に刷毛目があり、内面を範削りしているものが多い。また外側には煤が付着している。

c. 器台 34は浅い受部と直線的にひらく脚部とからなり、脚部に丸い透し孔がある。脚部外側を横に範磨きし、内面は撫でて仕上げるが、上端にはしづり目が残る。茶褐色を呈する。

d. 把手付鉢 28は口径8.4cm、高さ10.2cmをはかり、小型の鉢に一対の把手をつけたもの。把手は断面円形で外側からはめ込んでとりつける。口縁部内外面は横撫でし、体部内外面は撫でて仕上げている。灰白色を呈す。

e. 高杯 16個体ある。杯部外側に棱をもつもの(25)と棱をもたないもの(23・24・26)があ

る。25は21とはほぼ同形・同大のものである。内面に太い筵削りが放射状にほどこされている。灰褐色を呈す。23は口径16.8cm、高さ13.6cmをはかる完形品である。脚部は内面で矮をなして握部に至る。杯部の内面と外面上半は横撫でし、下半は撫でている。脚部は内面を横に筵削りし、外面は底の筵削りのもの撫でで仕上げる。裡部は内外面とも撫でで仕上げ、横撫ではみられない。灰褐色を呈す。26は同様の器形であるが、外面に刷毛目がある。また脚部内面はしばり目の下半以下を筵削りする。茶褐色を呈す。24も23と同様のものであるが外面に縁が付着している。暗褐色を呈す。27は脚部に3個の丸い透し孔をもつ。裡端部内外面のみ横撫でで仕上げる。裡部内面上半は横に筵削りしている。この他に杯部や脚部のみをとどめる破片があるが、組みあうものはない。脚部のみをとどめるもの6例のうち4例は3個の透し孔をもつが、他の2例は透し孔をもたない。

上層出土の土器 上層からは中・下層と異なって土師器とともに須恵器が出上している。

土師器 壺・甕・鉢・高杯がある。すべて砂粒を含む胎土で焼成は堅い。

a. 壺 大型のもの1点、小型のもの2点の計3点ある。51は31に類似する大型の壺である。刷毛目は体部外面にもみられる。灰白色を呈す。49・50はいわゆる小型丸底の壺であり、ゆるく内寄する口縁部と扁球形の体部からなる。口縁部外面は横撫でで仕上げ、体部内面は上半にしばり目を残し以下を横に筵削りする。体部外面は刷毛目がみられる。49は口径8cmをはかる。50はやや頸部が細く、内面の筵削りは体部中位より下にみられ、器底を極めて薄くしている。ともに明褐色を呈す。

b. 甕 6個体ある。口縁部に変化がみられ、端部が内側へ肥厚するもの(53・56)のほか、端部が肥厚せず外反するもの(54)、内寄するもの(55)、直線的にひらくもの(52)がある。56は口径15.4cmをはかる。肩をもつ球形体部の外面は刷毛日のうえに筵描波状文がある。53は口径18.8cmをはかる。口縁部は外反し、端部が内側へ肥厚する。口縁部内面に横撫で前の横の刷毛目が残る。内面は漆黒色を呈す。54は口径14.5cmをはかる。口縁部は外反し、体部はゆるい肩をもつ球形である。内面は漆黒色、外面は灰白色を呈す。55は口径15.6cmをはかり、口縁部はゆるやかに内寄する。体部は明確な肩をもたない。52は口径14cmをはかり、口縁部は直線的にのびる。外面の調整は55と同様である。

c. 鉢 48は口径8.2cm、高さ6.8cmをはかる小型の鉢である。頸部がくびれる。口縁部内外面は横撫でで仕上げ、体部内外面と底面内面は撫でで、底部外面は筵削りで調整している。

d. 高杯 14個体ある。杯部外面の矮の有無によって2大別される。43は後をもつもので口径22.4cmをはかり、口縁部は直線的である。外面を横撫でで仕上げる。明褐色を呈し外面には縁が付着している。44もほぼ同様のもので、杯部外面の矮は立上りをもって屈曲し、外上方にのびる。内面には刷毛目がある。灰白色を呈す。杯部外面に矮をもたないものには、口縁端部が外反するもの(41)、ほとんど外反しないもの(38・39)、口縁端部が内寄するもの(42)などがある。これらの杯部の調整をみると、外面に刷毛目をもつものは39のみで、他は撫でで仕上げている。(40)は口縁端部に外傾する平面をもち、作りは丁寧である。脚部のみをとどめるものの器形は45で代表されるが、他に47のようにざんぐりしたもののが少數ある。透し孔をもつものは全体に少なく、とくに後者ではない。透し孔は円形で、3個の例が多いが、1個の例(45)もある。外面の調整は筵削りの上を撫でで仕上げているが、まれに筵削り前の刷毛目を残すもの

がある。蓋では裾部内面にまでおよぶ。内面の調整は横に箇削りするが、しづり目の残る位置に差がある。42・45は裾部に、47は上端に、46は裾部なかほどにそれぞれしづり目が残る。また裾部内面を刷毛目で調整するもの(46)もある。

須恵器 蓋・縁がある。いざれも胎土には微量の砂粒を含み焼成は堅緻である。

a. 蓋 58は杯蓋である。口径12.6cmをはかる薄手のもの。天井部と口縁部とをわける稜は突出し、先端は丸い。口縁端部は内傾して凹面をなす。縁の部分の径と口径は一致する。天井部の4分の3ほどをロクロ削りし、他はロクロ撫でとする。淡い紫色を呈す。

b. 縁 57は小型の縁である。口径8.4cm、高さ10cm前後に復原できる。体部は扁球形を呈し、最大径は体部の中位よりやや上にある。円孔が穿たれている。口縁部外側には断面が丸い稜が突出している。縁部から体部上半はロクロ撫で、体部下半は撫でで仕上げる。青味がかって黒色を呈す。

(千田剛道)

C. 木製品

今回の調査によって、朱雀大路東西両側溝と、西側発掘区で検出した古墳時代の溝から木製品が出土した。朱雀大路両側溝では、溝底に近い砂を多く含む粘質土中に木製品がみられた。しかし、いざれも加工痕を若干とどめる小木片にすぎず、原形なり用途なりを充分に明らかにできるものはない。両側溝出土の木製品に比して、西側発掘区の溝からは、多くの木片とともに農具をはじめとする木製品が10点余出土した。ここでは、朱雀大路両側溝出土の木製品は除外し、原形が推定できる古墳時代の木製品についてのみ記述することとした。

古墳時代の溝は、溝堆積土が上・中・下の3層にわかれ、木製品は中層から下層にかけてみとめられた。このうち原形をとどめる木製品は下層に集中し、粘質土を若干含む砂層中から出土したものである。木製品には、スキ3点、キネ1点、クワ形木製品1点、部材1点、えぐりのある木製品1点がある。

1はスコップ状を呈するスキである。鉄刃を着装するフロ部の約2分の1をとどめる。カシ材から作り、全長36.8cm、復原幅2.1cm、厚さ1.4cmをはかる。上部は幅2.1cm、高さ0.6cmの突帯を作る。中央部分には長さ7.4cmの長方形の孔の痕跡がみられるが、孔幅は不明である。先端は、幅・厚さとも狭く作り、側縁辺の削りも面取り風に丸味をもち、鉄刃を着装することがわかる。柄の状況は不明である。

2・3はナスピ形木製品と呼ばれているスキの破片である。いざれもカシの粗目材から作る。2は柄に近い部分をとどめるが、状況からみて未製品であることが判る。なお、下端は鉄刃で直線的に切削されており、製作を中止して後に手を加えたことがわかる。現存長29.4cm、現存幅1.8cm、厚さ1.4cmをはかる。3は柄部の小破片で、船底形の断面をもつ。破片が小さいため、ナスピ形木製品に復原できるものとは断定できない。現存長7.2cm、現存幅3.6cm、厚1.9cmをはかる。

4はクワ形木製品である。一側を尖らため全体の形状は不明であるが、頭部近くに筋円孔があり、中央側辺部にみられるえぐりなどからクワに非常に近い形態を示す。ただ、頭部筋円孔自体、柄を挿入するためにはやや不適なものであるとともに、先端部のえぐりの状況や材自

体が針葉樹であり、カシ材を使用していないことなど、クワとは若干様子が異なる。全長31.3cm、現存幅9.8cm、厚さ0.9cmをはかる。

5はV字形のえぐりのある木製品である。針葉樹の板目材から作る。板材の中央部一側邊から、上部幅11.5cm、深さ7.3cmのV字形のえぐりを入れる。両木口には径1.2cm前後をはかる孔がみられるが、両者とも深さは浅い。全長25.5cm、幅9.6cm、厚さ1.2cmをはかる。

6は柄穴を11孔もつ部材である。広葉樹の板目材から作る。全長78.2cm、幅5.5cm、厚さ1.7cmの板材の両端を円く作り、一面を平坦に削り、他面は面取り風に削る。このため横断面形は台形を呈する。柄穴は長さ2.3cm、幅1.1cmをはかる長方形で、ほぼ垂直に穿たれており、約7cm間隔で11孔をかぞえる。全体に腐蝕が著しく加工の細部は不明である。

7はキネである。カシの心持ち丸太材から作る。両端はほぼ等しい径を持つが、上端からはしだいに径を減じて削り込み、下端から約30cmの間はほぼ等しい径をもつが、そのち明確に稜をつけて径を減じて削り込む。このため上下対称形のキネとはならない。下方は樹皮をそのままとどめており、未製品であることがわかる。このことは両木口面ともに使用による磨滅がみられず、加工の痕跡をそのままとどめていることからもうなづけよう。全長133cm、最大径8.1cm、最小径3.6cmをはかる。

D. その他の遺物

前述した瓦類・土器類・木製品のはかに、銅鏡・鉄型・鐵洋などの遺物が出土している。

銅鏡 調査によって5点の銅鏡が出土した。内訳は萬年通寶3点、神功開寶2点である。1の萬年通寶は、朱雀大路西側溝の溝底に近く堆積した砂層中から出土したもの。2の萬年通寶と4・5の神功開寶の3点は、大路東側溝東方で検出した殿治工房跡周辺から出土したものである。また、3の萬年通寶は、ほぼ同地点の、上部の床土中から出土したものである。

鉄型 粘土を焼成して作った鉄型である。一面に内弯する曲面をとどめるが、他は破損しており、これから鋳造された製品が何であるかは不明である。現存長7cm、現存幅6.3cm、現存厚4.6cmである。大路東側溝東方の殿治工房跡から出土した。

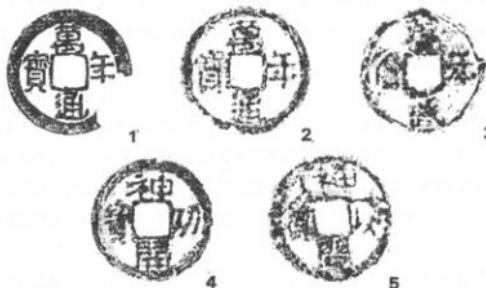


Fig. 9 銅 鏡 拓 本

銅貨名	外縁径	内縁径	内郭外径	内郭内径	外縁厚	文字面厚	重量	出土地区
1 福年通宝	25.6	20.0	7.9	5.8	1.6	0.8	4.35	6 AIA D56
2 "	26.5	22.2	8.3	6.3	2.0	1.1	3.65	6 AHD I24
3 "	—	—	—	6.1	—	—	3.34	"
4 神功開寶	25.4	20.7	8.6	6.4	1.8	0.7	3.39	6 AHD I24
5 "	26.2	22.2	8.0	6.0	2.1	0.7	5.07	6 AHD J26

Tab. 1 銅 貨 計 測 表

(単位:mm・g 平均値)

鉄津 朱雀大路東側溝の東方、東築地想定位置およびその両側から多くの焼上とともに鉄滓が出土している。いずれも純粹な鉄滓ではなく、土や小石を含んでいる。また、施けたスサ入り祐上に鉄滓が付着した破片もあり、タタラの床塗の破片とみることができる。(黒崎直)

E. 小結

瓦類 われわれが現在までに平城京内で行なった発掘調査地点は、30地点を越える。しかしながら条坊の状況、とりわけ坪の内部を広範囲に発掘する機会には、なかなか恵まれなかつた。したがって、平城京内で使用された瓦類についても、京の造営に伴なつて生産したものか、平城宮所用瓦と同じものを使用したのかという点についての明瞭な資料を得るには至らなかつた。1968年に在京三条一坊十四坪(日本電信電話公社建設予定地内)でおこなつた調査、1968・69年に4次にわたつておこなつた羅城門跡及び周辺の調査、1969・70年に5次にわたつて行なつた東三坊大路沿いの調査等では多少なりとも資料の増加をみたが、未だ充分とは言い難い。^{註1}

今般の発掘調査において出土した軒瓦類の個々については前に述べたとおりである。平城宮内で出土する軒瓦と大きく異なる点はみられないが、全く新出のものがあつたり、宮内よりもむしろ京内の調査の際に多く見受けられるものあることは注意を要する。

過去におこなつた京内の発掘調査において、諸若に認められるものを若干あげてみよう。たとえば在京三条一坊での調査では、軒丸瓦 6091-A型式と軒平瓦 6691-B型式が多く、他に多く出土したものには、いわゆる東大寺式とよばれる軒平瓦 6732型式がある。さきの 6091-A・6691 B の2型式は、宮内では全く出土していない。この両者はともにやや小型で、出土の比率からも組み合わせて用いられたと考えができるものである。また、羅城門地域においては軒丸瓦 6316型式と軒平瓦 6710型式の組み合せが考えられた。この両者は宮内での出土が微量である。こうした特徴的な面からすると、京の造営に関しては、宮所用瓦とは別個に生産がおこなわれた可能性を考えることができよう。

今回の調査で出土した奈良時代の軒瓦は、軒丸瓦が5型式7個体、軒平瓦は2型式9個体というようにきわめて少量である。しかし6316-6710両型式が含まれている事実は、この朱雀大路沿いの造営に際して、何らかの構築物にこれらの瓦が用いられたこと、そして羅城門地域と同様に、6316-6710の両者が組み合わされて使用された可能性を充分に窺わせるものである。といって、この両型式が造京の工事そのものに伴つて使用されたもの、たとえば築地構築の際に用いられたものであるか否かについては、にわかには決めがたい面もある。とくに邸宅への瓦葺きの実例が神龜元年(721)11月におこなわれており、京内居住の貴族階層が瓦葺きの建物を



1. 朱雀大路

2. 駁城門

3. 左京三条一坊

Fig. 10 平城京内出土軒瓦

留んだことも当然のことながら考慮にいれなければならない。その際に用いた瓦の供給源についてはさらに検討すべきであり、軽々しく論じられる性格のものではない。ただ、今回の軒丸瓦の同范品が宮内で出土していること、出土した他の諸型式同范品がすべて平城宮所用瓦の中で主要なものであることから、今回の出土瓦に対しては宮による生産品であると考えよう。さらに、この2型式が東三坊大路沿いの調査、あるいは官の造営になる西隆守跡の調査に際しても出土している点から、主として造京に関して用いられた瓦である可能性を指摘しておこう。そして、左京三条一坊十四坪でのあり方は、発掘終了範囲が約20%にすぎないとはいえ、平城宮内では全く見られない軒瓦が同坪内で主要な瓦として用いられている。このように、宮と京との様相が若干異なっていることも造京に関して製作された瓦が存在する可能性を充分に窺わせるものである。

(森 郁夫・岡本東三)

註1 「奈良國立文化財研究所要項」(『奈良國立文化財研究所年報 1968』)

註2 「1969年度平城宮跡発掘調査」(『奈良國文化財研究所年報 1970』)

土器類 今回の調査で多くの土器が出土したが、朱雀大路に関連した奈良・平安時代の土器は比較的少なく、大路側溝などの変遷を知るにはやや不充分である。しかし、これに比して調査前予想もしなかった古墳時代の土器が一括出土し、当時の土器の様相を知る好資料がえられた。ここでは、古墳時代の土器を中心としてまとめておきたい。

古墳時代溝の堆積土は3層に区別できたが、遺物の上層からは、中層と下層の差は明確でなく、上層と中・下層の2つに区別した方が良い。中・下層の土器は、おおむね畿内で一般に「布留式土器」と呼ばれている土器形に該当する。ただ、細かく観察するとこれらは、古い要素をもつもの(32~34など)と、新しい要素をもつもの(30・31・35など)とがある。なお、前者に属する壺(29)は、器形や製作技術のほか胎土・焼成などの特徴が他の土器と異質であり、東海地方の土器との類似点がみられる。また後者に属する把手付鉢(28)は、特異な器形を呈し他に類例を知らない。上層からは土師器と共に須恵器も出土している。

これらによって、中・下層の土器は4世紀後半から5世紀にかけて、また上層の土器は5世紀から6世紀初め頃の年代を中心とすることが考えられる。中・下層の七器は、天理市布留跡・桜井市櫛向遺跡・平城宮6AAW・6AAZ区遺跡などから出土した土器と共に、4~5世紀の土器の様相を知る好資料であり意義は大きい。

(千田剛道)

5. 考 察

A. 朱雀大路の方位

今回の調査で朱雀大路東西両側溝を確認し、六条条間路付近での朱雀大路の位置を知ることができた。ここでは、今回の調査結果とこれまでおこなわれた朱雀大路に関する調査成果とをあわせて検討し、大路の方位や規模などについて2・3の問題をまとめておきたい。

朱雀大路に関連する発掘調査としては、朱雀門と羅城門の調査がある。朱雀門の測量では門の基礎規格が確認され、大路北端での中心線位置が判明している。羅城門の調査では、門基壇の北縁・西縁および大路西側溝と西築地を確認している。しかし朱雀大路の中心線の位置については、正確な数値を知ることができず、その位置を推定したにとどまった。今回の調査では朱雀大路両側溝を検出し、大路中心線の位置が判明した。ただ、西側溝では遺存が悪く、溝肩がもっとも西へ抜かれた時点と、これを修復した時点での溝肩とは1.2mの差がみられる。このため、両側溝心々距離に73.4~74.0mという幅が生じ、断定的な数値を得られないという欠点は残る。

以上の諸成果から朱雀大路の方位復原をしてみよう。発掘によって検出した遺構のみで方位を求めるところ次の2例の数値がえられる。まず今回の調査で判明した大路中心線と、朱雀門の中心とを結ぶ線は、国土調査法による第6座標系の方眼北（以下、方眼北という）に対し、西へ $0^{\circ}15'50''$ ~ $0^{\circ}16'24''$ の振れをもつ。次いで、今回の調査で判明した大路西側溝心と羅城門の調査で判明した大路西側溝心とを結ぶ線は、方眼北に対し西へ $0^{\circ}14'42''$ ~ $0^{\circ}15'49''$ の振れをもつ。この2例の振れから平均値を求めると $0^{\circ}15'41''$ であり、これが今回の調査で明らかにできた朱雀大路の方位といふことができる。朱雀大路の方位については、先に羅城門の調査報告

吾の中で、方眼北に対し西へ $0^{\circ}12'40''$ の振れをもつと復原されており、今回の調査結果との間に約 $3'$ の差がみられる。現状では一方の数値が正で、他方が誤りであると結論づけられなれば、検出遺構から得られた数値($0^{\circ}15'41''$)がより大きな妥当性を持つものと思われる。

朱雀大路路幅については、延喜式記載の数値が築地心×距離で28丈であることは広く知られている。今回の調査では築地を検出することができず平城京での規模を遺構で認証することはできなかった。しかし、前述した方位と、羅城門での調査成果から、ある程度復原が可能である。まず朱雀門中心から南へ $0^{\circ}15'41''$ の方位で中軸線を延長し、羅城門位置での大路心を求め、ここから調査で検出した西築地心までの距



Fig. 11 方位概念図

離をはかると45.0mとなる。これを折り返した距離90mが朱雀大路築地心心間の距離ということになる。この復原方法については若干の疑問も残るが、同様な操作で求めた羅城門付近での大路側溝心距離が74.0mであり、今回の調査で判明した両間の距離(73.4~74.0)とはほぼ一致することから、あながち誤りではないだろう。今回の調査結果からみても、予想以上に溝幅が広く、築地心×距離28丈では築地に伴う大行を充分にとることができず、むしろ30丈という数値の方がより妥当だといふことができる。また、発掘区周辺に遺存する水田地割も、28丈で朱雀大路路幅を復原するより30丈の方が通りが良い。しかし反面には、大路幅30丈で復原すると羅城門基壇が東西約40mの規模を持つこととなり、先に報告書で復原されていた門基壇幅32.9mと比べてあまりに大きくなりすぎよう。いずれにせよ朱雀大路の調査については端緒的な段階であり、今後多くの調査がおこなわれ、一層この問題を深めることが必要である。

朱雀大路の方位と関連して下ヶ道の方位についても若干語れておきたい。下ヶ道については、平城宮跡第16・17次調査でその遺構が確認され、その位置と両側溝心心間の距離23.3mが判明している。今回の調査で検出したドッ道では22.7mをはかり、また、その中心線は朱雀大路のそれと最大30cm以内のずれで一致している。平城宮跡の調査で検出した下ヶ道側溝心心間の中点と、今回調査した下ヶ道のそれを結ぶ線は方眼北に対し西へ $0^{\circ}17'46''$ の振れをもつ。

地点名	X	Y	Z	地点名	X	Y	Z
朱雀大路調査 大路心	-147,833.00	-18,577.55	56.85	朱雀門心	-145,994.50	-18,586.32	64.84
同 調査 大路西側溝心	-147,869.30	-18,614.25	54.40	羅城門調査 大路西側溝心	-149,719.20	-18,606.34	50.00
同 調査 大路東側溝心	-147,796.70	-18,540.85	55.57	同 調査 大路西築地心	-149,719.20	-18,614.34	—
同 調査 下ヶ道心	-147,830.70	-18,577.51	56.85	朱雀門調査 下ヶ道心	-145,903.72	-18,587.47	64.84

Tab. 2 方位計測座標表

この方位で下ッ道の中軸線を南へ延長すると、横大路と下ッ道の交点と考えられている札ノ辻交叉点を通り、さらに南へ延びる現在の道路ともほぼ一致する。この線はまた発掘調査で明らかな藤原宮南門（大伴門）の中心位置から西へ計画寸法（2里、1,060m）を移動させた点（推定下ッ道中心線）ともほぼ合致している。このように下ッ道の方位は、方眼北に対して17'台の振れをもつことが判り、朱雀大路のそれよりも若干大きな数値となる。

また参考までに、平城宮南面大垣の方位など数箇所から復原した平城京の東西方向の条坊の方位は、方眼東に対し北へ約4'～11'台の振れをもっており、朱雀大路に代表される南北方向の振れよりも小さ目の数値であることがわかる。

なお、上記の計測値は、Tab.2の座標値をもとにしたものである。今後の調査によって更に資料が増加することが望まれる。
(高瀬要一)

B. 朱雀大路の復原

今回の調査で朱雀大路東西両側溝間の心々距離を知ることができ、さらに方位の問題から大路東西両築地心々距離が30丈であると復原できた。ここでは、溝や築地あるいは路面の幅など朱雀大路の細部について、平安京朱雀大路と対比しながら大路を復原してみよう。

大路側溝幅については、今回の調査で東側溝幅5.90m、西側溝幅6.40～7.60mが判明した。検出した溝はかなり浸食されており、旧状の幅をとどめていない。平城京羅城門跡の調査の際検出した右京九条一坊境の朱雀大路西側溝幅は4mである。これは東岸に土留めの杭列などの施設があり、ほぼ旧状の溝幅をとどめているものとみられる。平安京の場合、側溝幅は5尺(1.5m)であり、平城京の側溝を4m程と考えると、両者にかなりの差が生じる。

築地については、今回の調査で検出することができなかったが、前述した平城京右京九条一坊で検出した遺構で考えてみよう。ここでは築地心と側溝心の距離は8mである。溝幅を4mとして築地幅を2.1m（あるいは2.4m程度であったかも知れない）とすれば、溝肩から築地際までの犬行は4.95mとなる。これは平安京の15尺(4.5m)より大きな数値となり、また築地幅も平安京では6尺(1.8m)であったから、いずれも平城京の方が大きく述べられる。

路面幅については、今回の調査でおおよそ67mであることが判った。ただこの数値は、溝幅が抵がった後のものであるため、旧状の溝幅4mにもどして考えると、路面幅は約70mに復原できよう。平安京では路面幅23丈4尺(約70m)であり、ここでは両者がほぼ一致している。

以上の結果をまとめると、朱雀大路築地心々距離平城京30丈、平安京28丈となる。路面幅は

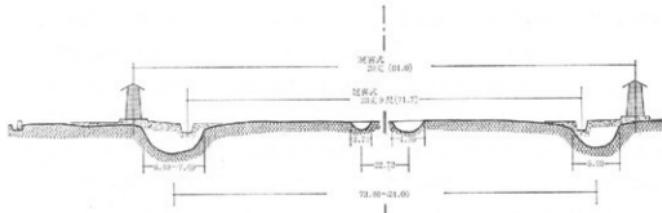


Fig. 12 朱雀大路横断面模式図

各70mであるが、溝幅は平城京約4m、平安京1.5m、築地幅は平城京7~8尺、平安京6尺と平城京の方が大きく、大行も平城京がやや広くなる。このように、両者を比較すると、溝幅において両者の差がもっとも著しいことが知られ、これが結果的に2丈の差を生じさせているのであろう。更に今後の調査資料の増加によって平城京朱雀大路の詳細も逐次明らかになるであろう。

(岡田英男)

C. 文献からみた朱雀大路

ここでは文献史料を中心として、朱雀大路の景観、その維持・管理、その性格、下ッ道との関係などについて考えたい。平城京朱雀大路については史料が殆んどないので、平安京を参考に考察することとする。

まず景観についてのべる。平安京朱雀大路では、両側に幅5尺の溝、基底幅6尺、高さ13尺の築地が走っていた(『奈良式』)。築地には各条毎に坊門が開かれ、また坊門ごとに門衛のための兵士の詰所がおかれていた(『第三代後奈良式』)。朱雀大路をも含めて大路には、三位以上・四位参議以外は家門を開くことは禁ぜられており(『日本後奈良式』)、朱雀大路の築地にはあまり家門は開かれていないかったらしい。朱雀大路に面していた左京三条一坊一・二・七・八坪の大学寮では、西門を開いてはいたが、東門が正面であり、左京三条一坊四坪にあった、源氏の学館延学院でも東門が正門であり、また左・右京七条一坊三坪の東・西鴻臚館では、東鴻臚館は東門が、西鴻臚館は南門が正門であったらしく(『奈良式』)、いずれも朱雀大路に面して正門を開いていなかったらしい。朱雀大路をも含めて京内の道路には、街路樹として柳樹が植えられていた(『日本後奈良式』)。このような平安京朱雀大路の景観は、平城京でもあまり変わらなかったと考えられる。大路に面する家門建設の規制の法令は、すでに天平3年(731)以前に出されており(『大宝令』)、街路樹の柳樹の存在も万葉集の大伴家持の歌から推測される(『万葉集』)。

次に朱雀大路をも含めて京内の道路の維持・管理についてのべる。京内の道路の維持・管理は、原則として左右京職が最終責任を負っていたらしいが、実際にはその修営は、官が行なう場合と道路に向している家あるいは官司(宮外官司)が行なう場合があった。官が行なうのは、京内の橋、坊城(築地)の修営である。營膳令に、京内の橋は、人橋・宮城門前の橋は木工寮が、その他の橋は京職が修営すると定められており(『奈良式』)、坊城については、天長4年(827)6月23日官符で、理由のある損壊は修理左右坊城使(『もじよし』)が、理由なき損壊は左右京職が修営することに定められた(『奈良式』)。道路に面している家あるいは官司が行なうのは、道路の清掃(『第三代後奈良式』)、水流の流れをよくするための溝渠の掘作(『第三代後奈良式』)など比較的の負担の軽いものである。しかし官が行なうべきことの一部を居住の家の負担とするという傾向もみられた。齊衡2年(855)9月19日官符で、坊城の修営に関して、京職が行なうべきであった理由のない損壊の修理には、その居住の家のが祈物を輸すことが定められた(『奈良式』)。このような京内の道路一般の維持・管理のあり方に対して、朱雀大路は特に官の手で行なわれることになっていた。朱雀大路の溝渠の掘作は左右京職が行なうことになっていたらしく(『奈良式』)、掃除のためには宮城辺とともに清掃丁(雇夫)がおかれたり(『奈良式』)、街路樹の手入れのためには左右京職

に守朱雀樹各4人がおかれていた(後漢)。また朱雀大路には治安維持のために特に坊門ごとに兵士12人が配置されていた(貞觀4年)。このような管理・維持における朱雀大路の特別扱いは、もちろん朱雀大路が京内における最も重要な大路であることに關係するものであろう。

次に朱雀大路の性格についてのべる。朱雀大路は、京内で最大の広さをもち、かつ京城正門羅城門と宮城正門朱雀門を結ぶ最も重要な大路である。平安京では大路8丈、小路4丈で、朱雀大路の30丈(平城)あるいは28丈(平安京)の広さは、それにくらべて格段の広さであった。府の都長安においても、京城正門明徳門と皇城正門朱雀門を結ぶ朱雀街は、150~155mという最大の広さをもつ大街であり、日本都城における朱雀大路の設定は、このような中國都城制の模倣であることはいうまでもない。ところで、朱雀大路の本質はこの道路の広さを手がかりとして考えられよう。朱雀大路の30丈あるいは28丈という広さは、道路の実用性からかけはなれた広さであり、朱雀大路の本質とは道路としての実用性をこえたところにあるのである。すなわち、朱雀大路とは、羅城門と朱雀門を結ぶ京の正面大路として、都城の威儀を示すために設定されたものである。朱雀大路の広さはそのために必要であった。このことは、古代都城が、一面では律令国家の國家としての威容を戴るために、政治の力で造られた都市であったことと関わっていよう。ところでTab.3は、朱雀大路がどのように使われていたのかを、関連する羅城門・朱雀門の例をもあわせて調べたものである。この表からは、朱雀大路が種々の儀式、祭事、仏事に使われていたことが知られる。これは朱雀大路が最も重要な大路であることによるのであるが、このように道路の本来の機能と関係のないことに利用されていることは、朱雀大路の道路としての非実用的性格との関係で注意される。また新羅使、唐使などの外國使節・来朝僧が羅城門に迎接をうけ、朱雀大路を利用したらしいことは、朱雀大路が都城の威儀を示すためのものであったことに関連して注目される。ところで、以上のような朱雀大路の性格をよく示すのが、朱雀大路の次のような状況である。すなわち、平安京に関してではあるが、貞觀4年(862)3月8日官符に、朱雀道は左右に築垣を帯し、またあまりに広すぎて東西の人家が離れているので、昼は馬牛の放飼をする処となり、夜は盜賊の横行する処となっているとあり(後漢),また日本紀略延暦21年(802)7月12日条には、朱雀道を狼が走ったとある。前述の如く、朱雀大路は時には儀式・祭事・仏事で賑わうこともあったが、これらの史料から

内 容	出 典
朱雀門前の朱雀路を將軍が騎兵・隼人・輶夷を率いて列、行進する(元日の大儀)	和銅3年正月1日、靈龜元年正月1日紀 左右衛門式
外國使節・來朝僧を三橋・羅城門に迎接する	和銅7年12月26日、寶龟10年4月30日紀 唐大和上東征法
朱雀門前で築垣をする	天平6年2月1日紀
羅城門で雨乞いする	天平19年6月15日紀
朱雀門前で新羅式の弓の試射を行なう	承和2年9月13日紀
東西市入ら朱雀路に臨みて雨乞いする	承和6年6月6日紀
災疫を防ぐために神泉苑・七条大路・朱雀道東西で般若心経を誦誦する	貞觀7年5月13日紀
朱雀門前で京邑の貧人に物を賜る	貞觀10年12月7日紀
太皇太后の六十才の賀に朱雀大路で京師の貧弱者に物を賜る	貞觀10年2月22日紀

Tab. 3 朱雀大路 利用事例一覧表

想像される通常の朱雀大路とは、左右に策垣を帯し、幅30丈あるいは28丈で延々と続く大空間地帯とでもいべきものであった。このような状況は、前述した朱雀大路のもつ性格から必然的に生じてくるものである。前述した維持・管理における朱雀大路のもつ特別扱いは、それが最も重要な大路であることによるのであろうが、またその実用性からかげはなれた広さとも関わるものであった。朱雀大路に特に兵士が設置されなければならなかつたのは、その広さからくる、前述のような治安の悪化によるものであったのである。

最後に、朱雀大路と下ッ道について述べる。朱雀大路が、隋代に設定された下ッ道を踏襲して設定されたものであることは、周知のことである。前述の如く、本調査では、朱雀大路が下ッ道の中心線をほぼ踏襲し、両側に拡幅して設定されたものであることを確認した。ところで、下ッ道は7世紀代に上ッ道・中ッ道・横大路・竜田道などとともに大和平野に設定された官道である。平城京の時代にも、下ッ道・竜田道はよく利用されていた。神龟元年(724)10月の聖武天皇の紀伊行幸には、ドッ道とそれに連なる巨勢路・紀路が利用された(註1). 竜田道には平群駅がおかれ、万葉集には竜田越の歌がいくつか残されており(註2), 新羅使・唐使などの外国使節の入京(Tab. 3), 勝宝元年(749)の宇佐八幡大神の入京(註3), 同6年(751)の鑑真の入京(註4)の際には竜田道、ドッ道が利用されていた。また聖龜元年(715)には竜田道の東方への延長である都祁山道が整備され(註5), この道は天平12年(740)藤原廣嗣の乱の時の聖武天皇の東国行に利用された(註6). ところで、前述した朱雀大路の本質との関連で考えると、これらの朱雀大路につながる道路のうち、難波に至る下ッ道・竜田道のルートが特に重要な意味をもつていたと考えられる。前述の如く、この道路は外国使節などの往来に利用されたが、そのような公式に羅城門で迎接しなければならない者の難波から羅城門へ至る道路として、重要な意味をもつていたと考えられる。竜田道は山陽道へ、都祁山道は東海道へ連絡できたと考えられるが、これらの道路は、山陽道・東海道諸国を繋ねる駅路としての意味は、稀薄であったようである。そのような道路としては、平城遷都とともに和銅4年(711)正月都亭駅といわれる6駅が設置され、平城京の奥側(北部)に起点をもち、山陽・東海道へ連なる二道が、新たに開かれていたのである(註7).

(今泉隆雄)

註1 坂本太郎「大和の古駅」(『木永先生古稀記念古代学論叢』所収)

註2 岸俊男「大和の古道」(『日本古文化論弘』所収)

註3 直木孝次郎「平城遷都と駅の新設」(『続日本紀研究』158)

II 前川遺跡発掘調査

1. 調査の契機と経過

前川遺跡は、昭和47年3月財団法人奈良県開発公社がおこなった前川筋河川局部改良工事に伴って発見されたものである。前川は、春日山麓に源を發する岩井川から分水した農業灌溉用の水路であり、奈良市杏町・大和郡山市三橋町から地蔵院川を経て佐保川に流れ込む流路をもつ。改良工事は、奈良市郊外の都市化現象や工場用地建設の影響をうけ、前川が下水道化したため、大和郡山市側を経由せず奈良市側で直接佐保川に流す水路変更を目的としていた。このため、奈良市杏町からかっての平城京東一坊大路沿いに南下する前川を、平城京九条大路付近で西折・西流させ佐保川に流す目的で、東西約500m、幅13m、深さ4mの用水路を新たに掘鑿した。

前川筋河川改良工事がおこなわれていた頃、西方約500mの地点にある平城京羅城門跡では、大和郡山市教育委員会の依頼をうけた奈良國立文化財研究所が発掘調査をおこなっていた。このことに連絡してたまたま工事現場に立ち寄った岸俊男氏や発掘調査関係者によって前川遺跡の存在が明らかになった。遺跡発見時においては、河川の掘鑿はほぼ終了しており、土壌中に多量の遺物が含まれていることが注意された。奈良國立文化財研究所では、遺跡遺物発見届を提出するとともに奈良県教育委員会と連絡をとり、応急の調査を実施した。調査は、3月11日から4月12日まで実施し、揚上中に含まれる遺物の採集と工事用法面や川底に残存する上塙および井戸などの遺構についておこなった。調査は工事と平行して実施し、そのうえ遺構の大半が破壊されていたため充分なものといえず、遺構の実測についても、一部を除いては地点を記録したにとどまった。

2. 遺跡の状況

前川遺跡は、大和盆地の北半部ほぼ中央、奈良市西九条町スゲハラ付近に所在する。遺跡周辺の現地表面標高は51mである。遺跡の西側には、秋篠川と合流した佐保川がほぼ北から南へ流れている。佐保川の両岸には10年前までは水田地帯がひろがっていたが、ここ数年来、北からは工場が、南からは住宅がだいぶ押しませてきて、付近の景観は変貌しつつある。

遺跡は平城京羅城門跡の東約500mのところにあり、その位置は、ほぼ九条大路上にある。多くの遺物と遺構を認めたところは、九条大路が東一坊大路と交わる所から西へ約50mの地点であり、また九条大路と東一坊大路との交叉点付近から多くの瓦が出土している。以下確認した遺構について概略を説明しておきたい。

遺構は、東西方向に掘られた用水路の側壁と基底部において確認した。側壁の上層の觀察によって南側で3箇所、北側で5箇所の計8箇所で、遺物を多量に含む黒色土の落ちこみを認めた(PLAN 3, P1~P8)。工事の関係上、遺構の性格を確かめるまでには至らなかったが、

遺物の出土状況から土壙と考えられよう。またこれ以外に基底部では、2基の井戸を確認した(PLAN 3, E1-E2)。しかし、すでに一部で導水がはじめられ、調査期間中再三の降雨があったため、遺物を取りあげた直後に、井戸枠は崩壊し、井戸遺構については充分な記録をとることができなかつた。なお遺構の番号は発見順位につけた。

土壙1 地表面下約50cmから掘りこまれた袋状の土壙(口径0.7m、底径1.0m、深さ0.5m)である。覆土には炭化物を含み、土師器の杯が重なった状態で多量に出土した。

土壙2 地表面下約30cmから掘りこまれたほぼ円形の上壙(径約1.0m、深さ0.5m)である。上師器の皿・杯、須恵器杯などが出土している。

土壙3 地表面下約30cmから掘りこまれた土壙(径1.0m、深さ1.2m)である。遺物の出土量も少なく、柱穴かとも考えられるが、柱および柱痕跡などは発見できなかつた。

土壙4 地表面下約30cmから掘りこまれた円形を呈する土壙(径約2.0m、深さ0.3m)である。土器の出土は少なく、土馬が約20個体分出土した。原形を完全にとどめるものはない。

土壙5 地表面下約30cmから掘りこまれた土壙(径約0.5m、深さ0.3m)である。土師器の杯や皿が多量に出土した。

土壙6 地表面下約15cmから掘りこまれた土壙(径約0.5m、深さ0.3m)である。土師器杯や須恵器皿などが出土しているが、全体に遺物の量は少ない。

土壙7 地表面下約1mから掘りこまれた土壙(径約0.5m、深さ0.3)である。土馬、土師器皿と杯が出土している。

土壙8 地表面下約1mから掘りこまれた土壙(径約0.5m、深さ不明)である。土師器皿・杯などの遺物が出土している。

井戸1 一边に各2枚の板を縦に通ね、四隅に丸木の支柱を配し、その支柱を横柱で固定した方形の井戸である。一辺約80cm、深さ現存1.7mをはかる。井戸底には砂を敷き、曲物を据える。縦板は幅約40cm、厚さ3cmであり、支柱と横柱には径10cm前後の丸太材を用いる。

井戸2 井戸1と同様の構造をもつて一辺約80cmの方形の井戸である。縦板には幅50~約60cm、厚さ5cmの板と幅30~20cm、厚さ2cm前後の板との2種類があり、一边に各1枚づつを組合せて井戸枠としている。底には砂が敷かれている。現存の深さは2.2mをはかる。

(岡本東三)

3. 遺 物

前川遺跡の2基の井戸、8ヶ所の土壙から総数約80箱の上器類を得た。井戸出土土器・土壙出土土器はともに天平末年頃の良好な一括資料である。

ここでは瓦は出土していないが、調査地の西方約200mの工事現場揚土中から若干の瓦を採集している。

A. 井戸出土土器

井戸は2基あるが、いずれも土器群の示す器種・手法を同じくしているため、ここでは一括して報告する。井戸出土土器には土師器・須恵器がある。他に墨書き器3点と土馬2点がある。出土のほとんどが土師器であり、須恵器は微量である。出土土器は全般に遺存状況が良好

である。とくに土師器類は真赤色硬質で、器面はまったくといつていいほど荒れていない。また、煤の付着することの通常な窯類など蒸沸形態の土器のほとんどには煤その他の使用痕跡は見られず、製作時の状況をとどめている。若干量を占める須恵器類を除いて、井戸出土土器は未使用のものであったと言えよう。

土師器 井戸出土の土師器には、杯A・皿A・皿B・皿C・碗A・椀C・蓋A・高杯A・盤A・鉢A・鉢C・鉢D・鉢X・壺D・壺A・壺がある。

a. 杯A I(1~5) 口径21.4cm~19.6cm、高さ4.1cm~3.7cm。平らな底部と外傾する口縁部からなる。口縁部は屈曲し、端部を内側に巻き込む。2・3・4・5は底部内面を撫で、口縁部内外面を横撫でで調整し、底部外面を調整しないa手法で作り、3の底部外面には木葉痕をとどめる。1は底部外面のみを窓で削って調整するb手法で作る。口縁部外面に施磨きを行なうものが1例ある。内面の底部に2重の螺旋暗文と口縁部に一段の放射暗文を施すものが多いが、底部内面に2重の螺旋暗文のみを施すものが1例ある。

b. 怀A III(8~11) 口径17.7cm~17.2cm、高さ3.4cm~2.8cm。法量の差のみで、形態・手法とも怀A IIと変わらない。8~10はa手法で作り、8~10の底部外面には木葉痕がつく。11はb手法による。

c. 杯A IV(14~22) 口径16.0cm~13.8cm、高さ3.2cm~2.5cm。口縁端部の巻き込むものがほとんどであるが、巻き込みのわずかなものや巻き込まず外反するものもある。すべてa手法で調整し、14の底部外面には木葉痕をとどめる。暗文は2重螺旋暗文+1段放射暗文である。22は須恵器杯Aと似た特殊な形態をもつ。口径13.8cm、高さ3.5cm。

d. 皿A I(24~28) 口径23.8cm~22.6cm、高さ3.0cm~2.5cm。平らな底部と短い口縁部からなる。口縁部は屈曲し、端部は巻き込む。25~28はa手法で作り、底部外面には木葉痕をとどめる。24はb手法で作る。暗文のないものが1例あるのみで、他はすべて螺旋暗文+1段放射暗文を施す。

e. 皿A II(6~7) 口径18.2cm~18.0cm、高さ3.2cm~2.8cm。端部が薄く外反するものと、わずかに屈曲し、端部内側の凹むものとがある。いずれもa手法で作り、内面に2重螺旋暗文+1段放射暗文を施す。

f. 皿A III(12~13) 口径16.9cm~16.1cm、高さ3.2cm~2.9cm。口縁端部が薄く外反するものとわずかに屈曲し、端部の巻き込むものとがある。いずれもa手法で作り、暗文はない。

g. 皿B(38~39) 口径33.2cm~32.2cm、高さ5.1cm~3.5cm。皿Aに高台のついたものである。口縁部は屈曲し、端部は巻き込む。b手法で調整し、39の口縁部外面には粗い施磨きを施す。38には螺旋暗文+1段放射暗文を施すが、39では放射暗文を2段に施し段間に連弧暗文を配する。

h. 皿C(33) 口径11.3cm~11.2cm、高さ2.5cm~2.1cmの小形の皿である。平坦あるいはわずかに丸味をおびた平らな底部と、外反する短い口縁部からなり、端部は外反する。内面を撫で、口縁部内外面を横撫でによって仕上げるが、横撫での範囲は狭く、底部にまで至らない。

i. 蓋A(23) わずかに丸味をおびた弓形の頂部に上部の平らな偏円形のつまみのつくものである。縁部を折り曲げて内側に突出させる。外面に密な施磨きを施し、内面には2重の螺旋暗文をつける。口径21.8cm、頂部の高さ3.0cm。

- j. 桶A(30・31) 小さな底部と内窩する口縁部からなり、口縁部はわずかに外反する。30では端部以下の外面を笠で削って仕上げるが、31では調整しない。外面全体を密に笠で磨く。口径12.9cm～11.9cm、高さ4.8cm～3.5cm。
- k. 梗C(34～37) 口径13.8cm～13.1cm、高さ4.6cm～3.4cm。丸い底部と外反する短い口縁部からなる。内面を撫で、口縁部内外面を横撫でで調整し、以下の外面は調整しない。
- l. 盆A(44) 口径24.3cm、高さ7.0cm。平らな底部と大きく聞く口縁部からなる。口縁部は外反し、端部上端が突出する。内面及び口縁部外面を横撫でで調整し、以下の外面は粗く笠で削って仕上げる。
- m. 高杯A(45・46) 杯部の破片のみである。浅い杯部に短い脚部のつくものであろう。杯縁部はわずかに外反し、端部は内側に突出する。45には螺旋暗文と1段の放射暗文を施す。口縁部内外面を横撫でし、以下の外面を笠で削る。外面を井状に4区割りに笠で磨く。口径29.6cm～26.8cm。
- n. 鉢A(40～43) 口径20.4cm～18.6cm、高さ8.0cm～5.8cm。平らな底部と内窩する口縁部からなり、口縁端部を巻き込む。内面を撫で、口縁部内外面を横撫でし、以下の外面を調整しないものが一般的であるが、43は口縁部下半の内面を刷毛目で調整し、41は口縁部以下の外面を笠削りする。40・41の外面全体には3区割りの密な笠磨きを施す。
- o. 鉢C(32) 逆三角形状の手づくねの小形の器で、口縁部はわずかに外反する。口縁部内外面を横撫でする。口径10.1cm、高さ4.2cm。
- p. 鉢D(47) 口径27.6cm、高さ15.3cm。肩部のまるく張った下ぼまりの体部と外反する短い口縁部からなる。底部に高台がつく。内面を撫で、口縁部内外面を横撫でし、体部外面を笠で削って調整する。底部外面を除く外面と口縁部内面を密に笠で磨き、体部内面には粗な笠磨きを施す。
- q. 鉢X(48～50) 底部にむかってゆるやかにすぼまる円筒形の体部の上端を外反させて口縁部としたものである。体部中ほどに一対の三角形折曲把手がつく。口縁端部は面をなし、端面は外傾する。内面を撫で、口縁部内外面を横撫でする。体部と底部の外面は調整せず、粘土紐接合痕跡を明瞭に残している。口径20.5cm、高さ14.6cm。50・51は内面を撫で、口縁部を横撫で調整するだけの小形の器である。模型上器でもあろうか。
- r. 瓢(67・68) 上すぼまりの円錐形体部の下半を1ヶ所方形に切りとつて焚口としたもので、焚口の周囲には高さ約5cmの粘土板を貼り巡らせて脂としている。内面を撫で、外面を刷毛目で調整する。肩の前面は刷毛目で調整するが、背面は撫でで調整する。約5個体あるが、完形に復原できるものはない。また、このうち脂が付着して使用したことの明らかなものは1個体で、他には脂が付着しない。底径約23cm、体部の高さ約27cm。
- s. 壺A(51～66) 丸い体部に外反する口縁部のつくものである。体部外面はすべて刷毛調整する。体部内面には、不調節のもの、撫でで調整するもの、刷毛で調整するものがある。口縁部の外面はすべて横撫でで調整するが、内面には刷毛で調整するものがある。法量によつて、A I～A Vの5種類に分類が可能である。このうち、A I・A IIにのみ、体部中ほどに一対の三角形折曲把手がつく。

須恵器　須恵器には、杯A・杯B・蓋A・蓋B・皿B・鉢A・壺A・壺B・瓶・甌がある。

- a. 杯A (73・74) 平らな底部に外傾する口縁部のつくもので、口縁部には端部が丸く直に開くものと、縁部が屈曲して外反し、端部内側の突出するものがある。底部外面は範切りのうちに撫でて仕上げている。
- b. 杯B (72) 平らな底にやや内凹ぎみの口縁部のつくものである。高台は貼り付け高台で、やや高く、外縁部が突出する。底部外面は範切りのうち撫でて仕上げる。底部外面に「女」形の焼成後の荒削がある。
- c. 蓋A (71) 扁平な宝珠つまみのつくもので、丸い頂部に垂直な短い縁部のつくものと、平坦な頂部に屈曲する縁部のつくものがある。頂部外面は範切りのうちに撫でて仕上げる。
- d. 蓋B いずれも縁部破片である。平坦な頂部に垂直な長い縁部のつくもので、縁端部内側が突出する。頂部外面を範削りで調整し、頂部外面には自然釉が付着する。
- e. 盆B (76) 平らな底部に外傾する短い口縁部のつくものである。口縁部は外傾し、端部は丸い。高台は付け高台で幅狭く、端部は平らである。
- f. 鉢A 鉄鉢形の土器でいずれも口縁部破片である。端部は平坦で内傾する。外面を範磨きしている。
- g. 壺A (77) わざかに外反する短い口縁部と無花果形の体部からなる。高台は反く、外へ張り出す。体部下半の外面を範削りし、肩部外面には自然釉が付着する。
- h. 壺D (76) 肩部の直線的に張った低い体部に外反する広口口頭のつくものである。口縁端部が上方に突出する。高台は断面が矩形で低い。
- i. 瓶(78~87) 肩部が丸く器高の低いものと、器高の高いものがある。85は肩部が角ばったもので、肩部に1条、体部中ほどには3条の沈線を施しており、体部下半以上には灰緑色の自然釉がべったりと付着している。86・87は肩部に一对の耳のつくものである。耳は欠失しており、形は不明である。

墨書き 井戸2から墨書き土器が3点出土している

- a. 「部」・「部」 須恵器瓶の底部外面と体部外面下半の2ヶ所に、底部を上にした方向で同一字を墨書きしたものである。
- b. 「□□」 上師器の杯または皿の底部内面に墨書きしたものであるが、破片でもあり、判読できない。
- c. 人面 土師器鉢の体部外面に眉・目・口を描いて人面としたものである。背面にも同様の人面を描いている。

土馬 1は、断面U字形の短い胴部に垂直な頸頭部と細い脚のつくもので、尾は斜上につきだす。胴部に馬具の表現を欠く。頸部に粘土を貼りつけて耳と頸部を作る。頸面には直径0.6cmの竹管を押しつけて耳をあらわすが、鼻孔はない。総高15.7cm、現存体長13.8cm。

3は、頸部の破片である。頸部に耳と頸部とを貼りつけ、頸面には直径0.5cmの竹管を押しつけ、目と鼻孔を表現している。

B. 土壌出土土器

6ヶ所の七箇から土師器と須恵器を得た。このうち須恵器はきわめて少なく、土師器が大部分を占める。各土壌出土土器は、器種、製作手法、年代を同じくしており、ここでは一括して

報告する。これらの上器群の年代として天平末年頃を与えることができる。

土師器 土焼出土の土師器には、杯A・皿A・皿C・椀C・高杯A・鉢A・鉢X・横瓶がある。井戸出土七器に比較して、器種の変化に乏しいこと、とくに壺A・壺がなく、すべて供膳形態に限られることが、土焼出土七器群の特徴である。また、皿C・椀C等の場合、同一器種の上器が上下に重なって出土した。遺存状況は良くなく、赤褐色を呈し、質のもろいのが多い。しかし、器面の遺存は良好で、手法の観察に耐え得る。使用痕跡は明確でなく、井戸出土土器と同様、未使用品であろう。

- a. 杯A II (101~104) 口縁部が屈曲し、端部を内側に巻き込むものである。a手法で作り、すべて底部外側に木葉模をとどめる。内面の底部に2重の螺旋暗文、口縁部に1段の放射暗文を施す。口径21.2cm~19.4cm、高さ4.0cm~3.5cm。
- b. 杯A III (105~109) 口縁部が屈曲し、端部を内側に巻き込む。すべてa手法で作り、105・107・109の底部外側に木葉模をとどめる。2重螺旋暗文+1段放射暗文を施す。口径17.8cm~17.0cm、高さ3.3cm~3.2cm。
- c. 皿A IV (117~120) 端部を内側に巻き込んだもので、口縁部の屈曲の強いものと弱いものとがある。a手法で作るが、底部外面には木葉模はない。2重螺旋暗文+1段放射暗文を施す。口径15.3cm~14.8cm、高さ2.9cm~2.8cm。
- d. 皿A I (131~133) 平らな底部と屈曲する口縁部からなり、端部は内側へ巻き込む。すべてa手法で作り、底部外面に木葉模をとどめる。螺旋暗文+1段放射暗文を施す。口径24.5cm~21.8cm、高さ3.0~2.5cm。
- e. 皿A II (110・111) 端部の薄く外反するものである。a手法で作り、2重螺旋暗文+1段放射暗文を施す。口径17.6cm~17.0cm、高さ3.0cm~2.9cm。
- f. 皿A III (112~116) 口縁部が屈曲し、端部を内側に巻き込んだものと、端部が薄く外反するものとがある。いずれもa手法で作るが、底部外面には木葉模がない。2重螺旋暗文+1段放射暗文を施すが、暗文のないものもある。口径15.5cm~14.7cm、高さ3.0cm~2.6cm。
- g. 椭C (134~136) 底部のわざかに丸い小形の皿である。内面を撫で、口縁部を横撫でで調整するが、以下の外面は調整しない。口径12.5cm~10.6cm、高さ2.6cm~2.4cm。
- h. 椭C (121~130) 口縁部の外反するもので、端部内側がわざかに凹むものがある。口縁部上半を横撫でし、以下の外面は調整しない。口径14.6cm~13.6cm、高さ4.6cm~3.9cm。
- i. 高杯A (140・141) 脚部破片である。140は脚の短いもので、鋸部を横撫でしたのち脚外面を笠で削って10角形に面取りしている。脚内面上半にはしおり目が残るが、以下は笠で鋸端部まで削る。141は脚の長いもので、鋸部を横撫でしたのち、脚部を笠で9角形に面取りする。棒芯を用いて脚部を成形したもので、脚部内面下半を鋸端部まで笠で削って仕上げる。鋸外面には4区割りの笠磨きを施す。
- j. 鉢A (137・138) 平らな底と内寄する口縁部からなり、端部は内側に巻き込む。端部以下の外面向て笠で削って調整し、外面全体に3区割りの笠磨きを施す。口径11.6cm、高さ5.0cm。
- k. 鉢X (139) 丸い体部と外反する口縁部からなる小形の器である。口縁部外面を横撫でし、以下の体部外面は調整しない。口径9.9cm、高さ5.9cm。
- l. 横瓶 (142) 須恵器の横瓶を模した小形の器である。口縁部は短く直立する。口径3.6

cm、長径、8.4cm、短径7.2cm。

須恵器 土壙からは杯B 1個体と甕の破片数点が出土したのみである。

a. 杯B (142) 平らな底面と直に開く口縁部からなり、口縁端部は外反する。高台は方形断面で、端面は外傾する。底部外面を笠切りのうちに掘りで仕上げる。口径19.8cm、高さ6.0cm。

土馬 2は井戸出土の土馬1と同様の土馬である。総高14.2cm 現存体長5.6cm。

4. まとめ

前川遺跡は、河川改良工事中に発見された遺跡であり、応急的な調査しか実施できなかったため、遺跡の性格については不明な点が多い。ここでは主に出土土器をまとめておきたい。

前述したように、井戸出土土器と土壙出土土器は形態・手法を同じくしている。これららの形態・手法はまた、平城宮跡6 AAB区で検出したSK820出土土器と共通している。これらから、前川遺跡出土土器の年代については、天平末年頃ということができる。

前川遺跡の土器群と平城宮跡土器SK820の土器群とを比較すると出土器種に差がみられる。すなわち、平城宮跡土器SK820では土師器17器種（杯A・B、甕A・C・D、皿A・B、蓋A・B、高杯A、壺A、鉢A、把手付有孔大形蓋、甕A～D）・須恵器19器種（杯A～D、瓶A、皿B・C、蓋A・B、鉢A、壺B・E・F・H、平瓶、淨瓶、甕A～D）がある。これに対し前川遺跡では土師器14器種・須恵器12器種であり、器種が少なくなっている。両者を比較して特徴的なものは土師器杯Bである。この土器はSK820土器にかぎらず平城宮内では普遍的に存在するが、前川遺跡では一点も出土しない。このように両遺跡を直接対比することには多少難点もあるが、前川遺跡出土土器群の性格の一端は判明しよう。

前川遺跡の位置は、遺存地割などから復原される九条大路の路面敷内にあたり、桜山遺構を坊内の居住地域に伴う遺構群であると考えることはできない。井戸・土壙などから多くの土器が出土するが、土壙では同一器種が重なって多数出土する傾向がみられた。これらの土器は、径1m内外、深さ0.4m内外の小規模なものが多く、また遺物の出土状況からみても、土器を廻棄した土壙とは考え難い。むしろ路面敷上に遺構が存在すると考えられる点や、遺跡が京の南端・羅城門に近く位置する点などから、祭事に関連した遺跡の性格を想定しておきたい。

前川遺跡の性格についてはなお不明な点が多く、今後の周辺地域の調査に期待するところが多い。また井戸中から大量の土器類を出土する遺跡も増加しつつあり、前川遺跡の性格の究明もさほど遠いことではなかろう。

(吉田忠二)

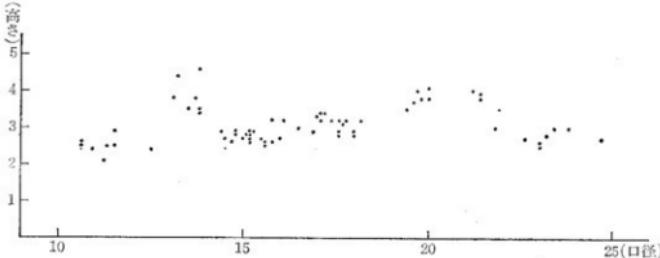


Fig. 13 前川遺跡土器法量図

III 遺存地割・地名による 平城京の復原調査

1. 目的

平城京条坊の復原図としては、早く嘉永5年(1852)に北浦定政の考定した「平城大内裏坪割圖」があり、また明治40年(1907)には閑野貞が、旧陸地測量部2万分の1地図を拡大した1万分の1図に復原条坊を記入した「平城京及附近塙田古今對比圖」がある。ともに『平城京及大内裏考』(東京帝国大学紀要王科第3冊)に付図として収められており、それらには文献史料にみえる古い地名や、小字名も記入されている。いずれも主として遺存する条坊大路の痕跡をもとに、条坊制に従って平城京全体を推定復原したものである。そのうち北浦定政のものはなお簡略で、外京も含まれていないが、閑野貞の復原図はかなり精密で、今日に至るまで平城京復原図の基本と認められ、広く利用されている。

しかしこの閑野の復原図も、なお縮尺の大きな地形図のない時期の作業であったため、小路に至るまでの細部を実地の地割と対照して現地に印した復原を行なうなどることは行なわれておらず、図上における計測推定復原にとどまっている部分が多い。しかしに、最近に至つて平城京城の開発は急速に進み、耕地の宅地化が無秩序に行なわれるのに対して、京の条坊の保存は若干の大路の復原を除いて全く顧みられず、また京内遺跡の調査も主要寺院以外はあまり行なわれていない。従つてこのままの状況が進めば、平城京は国費による買上げの実現した平城宮以外、街区については何らの調査も行なわれぬまま、ほとんど消滅してしまう恐れが大きくなってきた。そこでこのような平城京の危機に際して、一方では近時精密な地図や航空写真が作成されてきているのを利用して、京内およびその周辺に遺存している古い地割を明治初年の地籍図と対照しながら、綿密に現地にたどることによって、現地にもっとも密着した平城京の具体的復原図を作成し、併せて改めて字界と字名を調査し、これによって現時点において能う限り詳細正確な平城京を図上に復原記録して消え行く平城京に対処するとともに、ぜひ条坊の保存復原や京内遺跡の調査保存に役立たせたいと考えた。このような意図から、さきに奈良市によって設けられた平城京保存調査会の「平城京復原保存計画に関する調査」の一つとしてこの作業を分担することとし、昭和44・45年度に作業を行ない、その概要是47年に刊行された『平城京の復原保存計画に関する調査研究』のなかで報告したが、今次の朱雀大路発掘調査の予備調査としても、さらに調査考察を補充深化させるとともに、復原図の整備を期した次第である。

2. 方法と経過

方法としては、まず最初に奈良国立文化財研究所が昭和37年12月に撮影した航空写真から岡化した1000分の1地図、またなお当時岡化されていなかった部分については2000分の1に拡大された同じ航空写真と大和郡山市作成の1000分の1都市計画図、この三種を基礎図とし、それ

に奈良市役所（一部は大和郡山市）保管の旧大字地籍図（明治22年作成のものを基本とする）を用いて、一筆ごとの地割を改めて確認しながら記入し、その際地籍図と現在の地割が変化しているものは地籍図に従って旧に復し、併わせて小字名・小字界をも記入することとした。この作業を左京・右京・外京・北辺の京城内はもちろん、周辺の京北・京東・京南の各条里区についても必要な範囲で実施し、その結果に基づいて平城京条坊地割を復原したものを、まず8000分の1縮尺の「遺存地割による平城京復原図（未定稿）その1・2・3」（青写真図）としてまとめあげた（その1は45年2月作成、その2・3は45年10月作成）。

また別に復原と遺跡の光明に資するため平城京城に関する史料を文献・文書から広く蒐集してカードに要項を記入する作業を併行して進めることとした。こうした調査はすでに大井重二郎の『平城京と条坊制度の研究』でも試みられているが、改めて史料を博搜し、それによって大路・小路の判別、河川流路の変化とその時期などを検討し、以上の結果を「平城京関係史料分布図（未定稿）」（未刊）として集約した。

つづいて昭和47年には平城京保存調査会の中間報告を記した奈良市企画部企画課編『平城京の復原保存計画に関する調査研究』の付図として、以上の調査による条坊地割の復原結果を奈良市役所によって新たに作成された2500分の1奈良国際文化観光都市計画図に改めて記入し、これを1万分の1に縮小したものを「遺存地割による平城京の復原」と題して収めた。

今回の調査は以上のような平城京保存調査会による作業を継承して、さらに復原図を補充整備するとともに、その成果の上に立って朱雀大路調査に關しても考察を加え、さらに広く平城京の条坊制や京内遺跡についても保存的見地から検討を加えることとした。そこでこれまでの作業段階では未完であった奈良國立文化財研究所による平城京城の1000分の1地形図が、その後ほぼ京城全体にわたって完成したので、今回はそれを全面的に基本図として採用することとし、これに既往の調査に基づく条坊街路の遺存地割、および小字界・小字名などを改めて記入することとし、そのため奈良市役所・大和郡山市保管の地籍図についてさらに全面的に検証を加え、また史料の追加蒐集をも併わせ行なった。そして本報告書の付図としては、条坊街路の遺存地割を基本図に記入したものを8000分の1に縮小して収めることとし、これに小字名および蒐集した文献史料にみえる地名のうちから平城京の復原的考察に資するかとみられるものを抽出して付記し、また朱雀大路と二条大路の断面図を作成して加えた。そしてこうした作業の結果を検討しながら、平城京の復原と遺跡についての考察を進めた次第である。

3. 成果と考察

以上のような遺存地割・地名による平城京の復原調査によってえられた成果のうち、その主要な事項について以下概要を記し、併わせて若干の考察を付記することにするが、この調査研究はまだ基礎資料がようやくほぼ整った段階であり、以下の記述も中間報告の域を出ない。しかし今後の調査・保存にも関係するところ大きいと考えるので、この機会に概要を報告することとする。

1 まず遺存地割を地籍図に即しながら一筆ごとに精密な地図上に記入し、それに基づいて条坊街区を復原するという作業によって、平城京の全域がはじめて実際の土地に即して具体的に

復原できたことは有意義な成果と考えられ、それから学術研究上種々の問題が導き出されるることはもちろん、それとともに朱雀大路をはじめとする平城京条坊制の復原・保存に関しても貴重な基礎資料がえられたと思われる。ところで現存する地割が条坊区画の痕跡を示す場合の多いことは、復原図をみて明らかであるが、ことに大路・小路の道路敷に面するとみられる畦畔の場合は、それが策地の遺構と一致することが多い。このことは平城宮周辺や、羅城門・西隆寺などの発掘調査でもすでに確認されたことであるが、今回の朱雀大路の調査でも、策地そのものは検出されなかつたが、同様の関係は実証されたといえよう。

2 このようにして京城全体について条坊街区の設定状況を詳しく検討することができたが、その結果は付図に明示されているように、丘陵部の多い右京にも予想外に整然たる条坊街区の存在することが明らかになつた。とくに三条・四条は西京極まで、また二条・五条もその近くまで街区の痕跡が遺存地割に認められる。このような遺存地割から推定される平城京条坊の設定状況はまた別に文献史料にみえる京内条坊坪の表記の分布結果とも一致するから、平城京において實際どの程度の範囲に街区が設定されたかは、これによってほぼ知りえたとできよう。

3 このように遺存地割によって京全城を復原した場合、条坊街区の全く認められないのは右京西辺のごく一部であることが明らかとなつたが、条坊街区の認められる部分についても、条坊の大路・小路の道路敷が地割として明瞭に遺っている場合と、単に条坊坪の区画が1本の畦畔としてしか認められない場合とがあり、しかも両者はある程度地域的に分かれて存在しているようにみえる。

こうした地域的な差異はどうして生じたかは、河川の氾濫など後次的な要素をも考慮しながら慎重に検討を加えなければならないが、ことに朱雀大路の両側1坊分、すなわち左京・右京の各1坊は宮の南から南京極に至るまで、大路・小路の道路敷が非常にはっきりと遺っていて、条坊制の街区をほぼ完全に復原することができる点は注意を要する。平城宮の正面に当たるこの部分が他と異なってとくにこのような状況にあることを、平城が建設時における何らかの特別措置と考るべきかどうかは今後の平城京研究の課題の一つであろう。

4 道路敷と推定される地割によって大路・小路の幅員、というよりも両側溝を含めた策地人々間の距離を地図上で概測して知ることができるが、これは遺存地割による、しかも地図上の概測であるので、場合によっては±1mほどの偏差は認めなければならないだろうし、正確には発掘調査の結果をまたねばならないが、その概要是うかがいえよう。

a. 朱雀大路 朱雀門から羅城門まで道路敷の地割が遺っているので、それによってほぼ完全に復原できるが、ただ右京の七条一坊三坪から九条一坊一坪にかけてだけは、大路西側の線が前後と途切れ、その間だけやや西に張り出した畦畔の線が認められる。その部分以外、地割の明瞭に残る部分では、幅は等しく約90mで、延喜式の垣心々間28丈≈84mより広い。

b. 東一坊坊間大路・西一坊坊間大路 坊間に大路の通じているのは、やはり平安京と同じく東西一坊のみで、その道路敷はともに宮南から南京極まで明瞭に遺存している。その幅は約36mで、延喜式の10丈≈30mより広い。

c. 東一坊大路・西一坊大路 東一坊大路は八条の半ばまではほぼ道路敷が遺存しているが、西一坊大路は現在県道京良大和郡山延喜式として利用されているに拘らず、道路敷の地割は部分的にしか残っていない。しかしどもその軸は一坊坊間大路よりやや広く、約42mと概測で

き、延喜式の12丈 \approx 36mよりこれもやはり少しあいようである。

d. 西二坊大路・西三坊大路 二条あるいは三条に部分的にしか道路敷の地割が遺っていないが、ともに27~28mで、一般的の条の大路と同じ幅員であったらしく、延喜式も条大路と同じく8丈 \approx 24mとしている。

e. 西京極大路 西京極の線は付図に示すように壁かしか認められず、大路の痕跡もない。

f. 東二坊~東六坊大路 いかなる事情によるのか、いずれもほとんど道路敷地割が遺っていないので、確定的なことはいえないが、東三坊大路に関しては不退寺西方に幅約22mの道路敷地割が存する。この部分は発掘調査が行なわれ、東一坊大路東側溝とその東の築地が地割通りに検出されたが、道幅19m分を明らかにしたにとどまり、西側溝には発掘が及ばなかった。しかし西二坊・三坊大路と同じ幅をもつ可能性はある。東四坊大路は六条以南は京極大路となるが、幅約20mほどの道路敷かとみられる地割を断続的に認めうるに過ぎない。

g. 東京極大路 現在の道路は拡幅されているので、その西縁と東大寺転害門築地線との間の距離は正確にはわからないが、約40m前後であったと推測できる。延喜式は東京極大路は10丈 \approx 30mとする。

h. 一条北大路 西大寺の北に幅約20mの道路敷かとみられる地割が遺存するが、延喜式は北京極路を10丈 \approx 30mとする。ただし宮の北築地線にそって幅約56mの遺存地割が部分的に認められるが、この幅はつぎに述べる宮南面の二条大路の遺存地割幅と一致するので、いちおう道路敷として検討する要がある。

i. 一条南大路 西降寺の南方、および法華寺東方の遺存地割によると、他の条大路と等しく約28mと計測される。延喜式は北京極路と等しく10丈。

j. 二条条間大路 一条条間大路の存在は遺存地割からは確認できず、文献史料でも大路とも小路ともみえる。これに対して二条条間大路は西京極近くまで道路敷地割が遺存し、また法華寺の南邊などでも認められる。幅は約24mで、延喜式の10丈 \approx 30mよりこれも狭い。ただし東院南面では約34mとなっているが、これは発掘調査の結果、宮周囲に幅約10mの端地が存するため、地割として遺る築地心々間の距離が広くなっているのであろう。

k. 二条大路 宮の南面では幅約56mの地割が認められるが、発掘調査の結果によって端地・側溝などを除いた路面幅は約35mであることが知られた。しかしそれ以外の部分には他の条大路と等しい幅約28mの地割が存し、興福寺々域の北限でもその関係が指摘できそうである。なお延喜式では宮城南大路を17丈 \approx 51mとする。

l. 三条~八条大路 いずれも朱雀大路の東西に遺存する道路敷地割の示すところでは幅約28mで、延喜式は8丈 \approx 24m。なお外京の南京極に当たる部分の五条大路においても如上の事実が遺存地割によって確認できる。

m. 南京極大路 左京の部分に断続的に道路敷地割が遺存するが、それは幅約22mで、他の条大路より狭い。しかし他の条大路とは構造が異なる点を考慮する必要があろう。延喜式は南京極大路12丈 \approx 36m。

n. 小路 10m前後の幅の地割を示す場合が多い。市内会建設予定地(左京三条二坊)発掘調査では路面幅約5m、築地心々間約9mの小路遺構が検出された。延喜式は広さ4丈 \approx 12m。

5 以上のごとく、築地と築地の間の道路敷を示すと推定される遺存地割によって各条坊の大

路を復原し、これを延喜式に規定されている平安京の衆坊大路と比較すると、下記のようになる。各大路における幅員の相違状況など両京一致する点が多いが、幅員の数値は概ね平城京の方が広い。なおこれらの概測値の間にある関係があるようにもみられるが、それらを通して平城京街区がいかなる尺度によって設定されたかを検討するのは今後の課題であろう。

	平城京	平安京		平城京	平安京
一 条 北 大 路	約20m		朱 雀 大 路	約90m	28丈 約84m
一 条 条 間 大 路	?	10丈 約30m	一 坊 間 大 路	約36m	10丈 約30m
一 条 南 大 路	約28m		一 坊 大 路	約42m	12丈 約36m
二 条 条 間 大 路	約24m	10丈 約30m	他 の 坊 大 路	約28m	8丈 約24m
宮 城 南 二 条 大 路	約56m	17丈 約51m	京 極 大 路	約40m	10丈 約30m
三 条 ～ 八 条 大 路	約28m	8丈 約24m			
南 京 極 大 路	約22m	12丈 約36m			

6 つぎに衆坊大路の位置・幅員が推定できること、それに従って京城、および各衆坊の広さを地図によって概測することができる。まず朱雀大路において各条の間隔を計測すると、Fig. 14-[1]のごとく、宮北限の策地心より南京極大路南限までには4778m、これに宮城北大路かと推定される地割の幅を加え、また羅城門策地心までを計測すると4858mとなる。この数値は1条が平均約531mとなることを示しているが、各条の間隔についてみると、実際は1条、または半条の長さにかなり長短があり、ことに七条、とくにその南北条分は長く、八条が逆に短くなっていることが注意される。

7 同じように京の東西幅を二条大路で計測すると、朱雀門中心より東京極大路東縁(東大寺軒門策地心延長線)までが3739m同じく東四坊大路中心までが2128m、また朱雀門中心より西京極線では2157mで、左京・右京の4坊分を比較すると、右京が長く、1坊の平均距離は左京が532.0m、右京が539.2mとなる。Fig. 14-[2]は同じように各坊間距離を三条大路上で図上計測した数値であるが、右京の三坊・四坊がとくに広く、反対に左京四坊が狭くなっている、右京が左京より幅広くなる原因となっていることが知られる。平城京の衆坊計画やその寸法につ

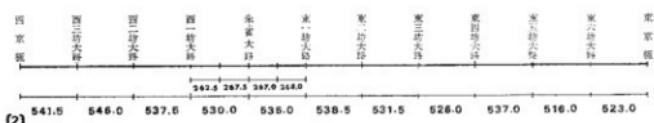
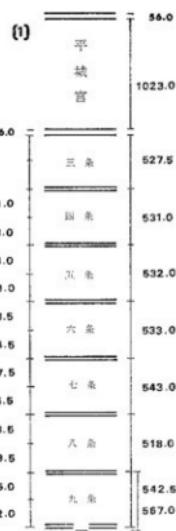


Fig. 14 衆・坊間距離の概測値

(1) 朱雀大路上における衆間距離の概測値

(2) 三条大路上における坊間距離の概測値

いては種々論ぜられ、外京の東西方向の寸法が短いのではないかという問題も提起されていて、この計測値もいちおうその傾向を示しているが、それらの問題も改めてこうした復原結果の上に立って慎重に検討する必要があろう。

8 また京城の条坊街区は正しい方格に従って計画されたと思われるが、詳細に検討すれば部分的に若干の歪みがあるようで、たとえば左京の東南隅付近は方格に合致せず、朱雀大路中心と東京塀間の距離が、さきに述べた朱雀門中心と東四坊大路中心間の距離より若干長くなっているようである。

9 つぎに外京は一条が存在せず、二条から五条までであったというのが関野貞の復原以後定説となっているが、付図に示したごとく、一部に条坊区画の痕跡らしい地割が認められる。しかし、文献史料ではやはり外京一条の存在を示す史料は発見されないので、このことから直ちに外京一条の存在を主張するのは尚早かも知れないが、東京極大路についてみると、それが一条南大路、すなわち東大寺軒轅門よりもさらに北に延びていたことが、天平勝宝8歳(756)東大寺四至圖によって知られるほか、現状でも地割に認められる。またその起点と考えられる奈良坂町の三叉路の地点は、ちょうど平城宮北限の東への延長線上に位置する。この事実は単に東京極大路だけの問題ではなく、外京も本来は一条から始まっていたのではないかという推測を強くさせる。

なお外京五坊の六条京極大路の南にも、1町(坪)分ほど条坊制地割の延長らしいものが存在し、それが京東条里と接觸している状況が知られる。

10 これに対して右京北辺坊の北端には大路の痕跡を示す地割がなく、すぐ京北条里に移行している。

11 遺存地割・地名を検討することによって、平城京当時、京の内外を流れていた河川の旧流路を復原することも可能である。

a. 平城京の東市は天平勝宝8歳(756)東市庄解や知恩院藏市図などによって、左京八条三坊の五・六・七・十・十一・十二の6坪に位置することが知られており、東堀河はその西辺、すなわち同じ八条三坊の二~四坪の東寄りをやや斜めに流れていた。しかし現存地割による限り、その位置には東堀河の痕跡を認め難い。東堀河に相当する佐保川は現在は五条大路付近から斜めに西南に流れ、朱雀大路と七条大路の交点からまっすぐ麗誠門に向って南流しているが、この流路は中世末以後のものらしく、それ以前の流路については、遺存地割・小字名・文献史料などによって、現在の流路の少し南を同じような方向に流れていた時期のあったことが推定できる。つぎに文献史料によって知られる佐保川の動向を参考として記しておく。

- ・左京三条三坊十二坪は字「石ヶ町」であるが、天文2年(1533)の文書には「字石カ町」の水田について「添上郡三条佐保川西從人道北」と記し、四至の東は岸とあるから、ここを佐保川が流れていた時期もある(東大寺文書)。
- ・右京六条二坊十五坪の東は仁和3年(887)には大路であったが、正暦5年(994)には河(佐保川)が流れ、嘉曆3年(1338)にも東は河とみえる(唐招提寺文書・東大寺文書)。
- ・左京七条二坊十二坪の西を建久6年(1195)に佐保河が流れていた(東京大学所蔵文書)。
- ・左京九条一坊十六坪の田地について、永仁6年(1298)の記録に「字辰市河西ニアリ」とある

〔西大寺田園目録〕。

- ・左京九条一坊十坪の東は保元元年(1156)9月の文書によると、小路であるが、寿永2年(1183)2月の文書には川と変わり、以後建久2年(1191)・建長6年(1254)の文書にも東は河と記されている〔久原文庫所蔵文書・東大寺文書〕。
- b. 西掘河の流路はほぼ現在の秋篠川に当たり、西二坊大路の1坪西を南流する。秋篠川がいまのように八坊大路にそって東折し、朱雀大路上で佐保川に合流するのは、慶長元年(1596)の郡山城外廻り摂掘營請によるもので、平城京当時はそのまま南流していたらしい。郡山城外濠はその旧流路を一部に利用したものの、さらにその南には「古川」の小字名が残っている。なお秋篠川は氾濫して宮の西南隅を流れたことがあり、そのことは地割の乱れと「谷田」という小字名から知られるが、発掘調査でも確認された。この流れに關係するものであろうか、その南右京三条一坊十二坪が「宇鴨池」・「宇鴨池田」とよばれていたことが、延久元年(1190)の文書〔東大寺文書〕などによって知られる。
- c. 東四坊大路が八条・九条において東京極路となっている部分の東側に接しては「牛池」・「古池」とよばれる南北に細長い池、「西谷」・「池側」・「瓦田」・「河原田」などの小字名や河川の流路であったとみられる地割が遺存している。これらの点から能登川と合流した岩井川は現在は七条大路を西流して朱雀大路上で佐保川と合流しているが、平城京当時は京外を南流していたのであろう。そして地藏院川に合流するか、あるいはさらに南下して広大寺池から流れと合して西流していたとみられる。地藏院川の南には河川の旧流路であることをはっきりと示す地割と「古川」の字名が残っている。なおこうした流路が自然のものでなく平城京設定に伴なう改造であったことは、東から西にのびる字「西山」「城殿山」の敵高地を断ち切って流れていたらしいことからも知られよう。
- さらに菩提川も大森町付近の古い地割や、南北に長い字「谷」や長池の存在から推して、これも同じように平城京造営時に東四坊大路の1坪ほど東を南下して岩井川に合するように掘開されたのではないかろうか。
- こうした京造営に伴なう河川流路のつけ替えは平安京の鷺川や長岡京の桂川でも行なわれたらしいが、その先例が平城京にあったことがこれらの事実によって明らかになったといえよう。
- d. 京の東南隅に当たる位置に現在五總池とよばれる池があり、その北に接する字「池ノ内」を含めてかなり大きな池であったらしい。この池の位置はちょうど長安城芙蓉園の曲江池の所在地に当たっていて、平城京当時から存したか否かが問題であるが、この池は日本書紀記にみえる越田池ではなかろうか。すなわち西大寺田園目録に「添上郡前一条三十三坪内二段_{ナシタシリ}」とみえるのは、いわゆる京南辺条里のうちで、その坪付と現存する小字名から推して、五總池に接する西南の地と推定され、また「宇北道代」は付近に「京道」という小字名の存することから、中ツ道に關係すると考えられる。従って「字コシタシリ」(越田尻)の地名から、この池を越田池としてよいのではなかろうか。なお弘仁元年(810)平城上皇が川口道をとって東国に向わんとして添上郡越田村から引き還したというのも、中ツ道を南下せんとしたのであろう。また日本書紀記によると、越田池の南、蓼原里には薬師如来木像を安置した蓼原堂があったというが、いま五總池の南には「堂ノ前」「瓦山」の小字名が残っている。
- e. やはり京内を流れる菰川ははじめ田村川とよばれ、西掘河とは対称の位置を南流するの

で、はじめ東堀河として掘開された可能性のある川であるが、文献史料では延暦2年(1212)に左京四条二坊六坪を流れていたのが初見である〔鈴井實聖氏藏東大寺文書〕。現在は八条大路の北で佐川に合流しているが、以南も八条の半ば辺りまで南流の地割らしきものが認められる。

12 その他遺存地割の状況からみて注意を要するとみられる地点を若干指摘しておく。

a. まず朱雀大路上では、七条条間路との交点において、東西から狐川と秋篠川の分流が流れてきて、南に対して凸字状の地割を形成している。6に述べたように、条間隔の乱れているのはここから南である。

b. 同じように羅城門の前面にも南京極路南線より大きく張り出した地割が認められる。またその東西、左京と右京の九条一坊五坪の西南隅および東南隅付近から、外廓線に向かって斜めの駐畔が東西対称的に延びている。

c. 朱雀大路を中心に対称の位置にある左京・右京の各六条一坊六坪、および五坪の地割が、同じようにやや特殊で、あるいは東西対称的な何らかの遺跡があるのかも知れない。なお平安京では京職が三条一坊三坪、鴻臚館が七条一坊三坪にそれぞれ左右京対称的位置する。

d. 左京九条三坊十二坪の南、南京極の線に南に突出した駐畔があり、そこから京南条里の起線、あるいは地蔵院川まで、幅約28mの縱長の地割がつづく。小字名は北から「上ツク田」「中ツク田」「下ツク田」および「渡戸」であるが、「中ツク田」の東西には「古川」「橋詰」があり、この地名が旧河道である可能性を示している。しかしこの地割はやや細まりながら、八条三坊十坪、すなわち東市の中まで断続的につづいており、fで述べる中ツ道との間隔が約1里(==5町)であるので、河道か否かの確認が必要である。

e. 左京南京極と京南条里の起線との間に京南辺条里とよんでいる特殊条里区があるが、その南北長は条里制の4坪(4町)余である。この最南列の坪は縱長で、1町に余る部分が横長の地割を形成している部分もあるが、その一つに「道代」の小字名があり、またその少し東には「大道ノ上」の小字名がある。この部分にそうした東西の大道が通じていたかどうかは、この特殊条里区と京南条里の起線の問題とともにさらに課題として検討を要する。

f. 五德池の西南に幅約22mの縦長の地割をもつ字「京道」があり、その南は「ハサマ」「橋本」「浮世橋」とつづく。これは中ツ道の遺存地割とみられ、その幅員は今回検出された下ツ道の幅に近い。

g. 平城京の東へ張出した東院地区の北端には、法華寺と内裏を結ぶ幅約30mの東西に延びる道路敷らしい地割があり、またその北1坪をへだても東西の道路痕跡らしいものが認められ、これらは左京一条二坊の条坊区画にはば合致する。またこれらに直交する南北の小路らしい地割があるが、それは少し西にずれるようである。いずれもこの地域の性格を考える上で検討を要する。

h. 秋篠川から西市推定地を横断して西にのびる幅約40m前後の地割があるが、これも注目される。

13 つぎに小字名、あるいは文献史料にみえる地名から推定される遺跡について、若干の点を指摘しておく。

a. 左京四条二坊九・十・十五・十六坪は字「田村川」であるが、長徳4年(998)諸國諸庄田地注文定〔東大寺要録〕では同十二坪と五条二坊九坪が「田村地」で、その一域に藤原仲麻呂

の田村第、および田村宮のあったことが推定される。また延喜2年(902)太政官符を勘案すれば、五条二坊九坪は園地、四条二坊十二・十一坪が田村宮・田村第であったらしい。なおつぎの14のe参照。

b. 左京三条四坊十一・十四坪は字『牛屋』で、付近に「宮前」「石町」「金池」などの地名がある。右大臣藤原是公は牛屋大臣とよばれていたので〔公卿補任〕、その私第址かともみられるが、是公が右大臣となったのは延暦元年(782)で、その翌年には田村第に住んでいたことが明らかなので、なお検討を要する。

c. 右京二条二坊の約7坪が字『大臣』で、永仁6年(1298)西大寺田園日録にもその十一・十四坪が「字大臣院」と記されていて、誰かの大臣の私第があつたらしい。公卿補任によると左大臣橘諸兄は西院大臣と号したらしく、同じ田園目録によって秋篠川を「サイ河」(西院川・道祖川か)とよんだことが知られるので、あるいは橘諸兄の庭が付近にあつたのかも知れない。

d. 右京三条一坊十三坪・同三条二坊四坪は字『齊音寺』という。そのうち四坪からは古瓦が出土するというが、齊音寺は藤原清河の家を寺とした済恩院の後身であろう。とすれば付近に藤原清河の邸があったことになるが、一説は店招提寺の北をその遺跡とするので、再考を要する。なお大字名として遺る「興福院」は内大臣藤原良輔の家を捨てて寺としたものとみられ、そのことは公卿補任が良輔を弘福院大臣とよんだと記していることから推定される。興福院の遺跡は左京四条二坊十坪付近にあるらしい。なおつぎの14のe参照。

e. 法華寺の東、一条南大路の南と北に「堂ノ前」「堂ノ後」の字名が遺っているが、延暦僧録や続日本紀に石上宅嗣が住宅を捨てて何間寺を建て、その東南隅に漢籍を藏めた芸亭院を造ったとみえるその遺跡を、この付近に推定する説がある。

f. 行基年譜によると菅原寺の西の間に長岡院があったという。西大寺田園日録によると、菅原寺の西、右京三条四坊九坪は「字法陀寺」という。なお公卿補任に左大臣藤原永手は長岡大臣と号したとみえる。

g. 延長3年(1251)西大寺檢注日録によると、右京一条北邊四坊三坪は「字本願ノ池シリ」というが、そこには称徳天皇山莊跡と伝えられる庭園遺跡があり、その西方に「字スケノ池」のあることが西大寺田園目録により知られるので、藤原武智麻呂が詩宴を開いた習宣別業もその付近かも知れない。

h. 西大寺田園日録によると、左京九条三坊四坪は「字辰市ノ南八島」、左京九条四坊二坪は「字ホツミ堂」というが、それぞれ日本畫真記にみえる服部堂と穗積寺の所在地と推定されている。

i. 左京九条六坊五・十一・十二坪にかけて字「榎葉井」が存し、その西に1坪ずれて「五ノ坪」がある。永承6年(1051)文書によると、左京五条六坊五坪は東大寺佐伯院領であり〔般野家藏東大寺文書〕、また文治2年(1186)文書では、その坪は「字佐伯院」とある〔大柄文書〕。この地については天平勝宝9歳(757)の左京職勘文〔跡心院文書〕に絵図があって、一般に五条六坊十一～十三坪と五条七坊四坪が佐伯院領で、五条六坊十四坪が井戸のある大安寺蘭で、同五坪に葛木寺があったとみている。しかしその井戸を「榎葉井」とし、また五坪が「字佐伯院」であったとすると、1坪西にずらせて五条六坊六・五・十二・十三坪を佐伯院領、「一坪を大安寺蘭、四坪を葛木寺とした方が矛盾がない。絵図にある南北道は少道で、東六坊大路とは記され

ていないし、葛木寺を四坪とみれば、その真南に字「葛木」が存することになる。

j. 右京西南隅の字「植櫻筋」は植櫻寺の遺称地とみられるが、寺址はその北の字「北田中」付近と推定されている。

14 その他の小字名に関して注意される点を列記しておく。

a. 平城宮の北力字「門外」の北、下ツ道延長線付近に「衛門戸」、左京三条三坊五・六坪に「衛門殿」の小字名が遺っている。

b. 左京三条二坊九坪に「大藏」、左京四条四坊十・十五坪に「下藏町」「上藏町」の小字名が遺っている。

c. 信招寺と薬師寺の間に「大納言」、その東南、右京六条一坊に「大保」(右大臣か)の小字名がある。

d. 左京三条一坊の字「ニブ」はその位置が平城宮壬生門の南に当たることから、「ミブ」の転化ではなかろうか。

e. 田村宮推定地の左京四条二坊十三坪の西辺は「朱雀田」とよばれ、宮南門との関係が想定されるが〔京都大学所蔵東大寺文書〕、右京四条二坊十四坪にも「字朱雀タイ」の地名が存した〔西大寺田園目録〕。付近に清恩院や弘福院があったと伝えられるので注目される。

f. 右京二条四坊十三坪は西大寺田園目録によると「字法世寺」であり、一帯は字「法専寺」という。付近から複弁八葉蓮花文軒丸瓦を出土する。

g. 正田に字「京内」があるが、その地は京城外に属する。

15 朱雀大路に関しては薬師寺墨草紙に左京六条一坊一坪の地の西は「朱雀」とみえるのみで、朱雀大路の称呼はあまり伝わらず、他は下ツ道として史料にみえる。すなわち永仁6年(1298)文書に右京六条一坊四坪南大路辻合の地の東は「下野道」とあり〔東大寺文書〕、同年の西大寺田園目録に左京七条一坊三坪の地について「下津道ノヒラヲサ西」とあり、さらに右京八条一坊三坪の地について「下津道之流」とある。なお左京五条一坊十二坪の地についての「東ノハシ下津道ノ東カケツイチ」という記載はそのままでは実情に即しない。

16 なお坪内の地割についても、詳細に検討すれば、宅地割の資料がえられるであろう。基本的に十字に四分した地割が比較的多い。また宅地の島地化、さらに田地化の時期についても文献史料によってある程度把握できる。

17 大字界・小字界は複雑になるので付図に表記できなかったが、これまた条坊区画を踏襲している場合が多く、条坊復原の資料として重要である。

4. 課題

以上は遺存地割・地名による平城京の復原調査の過程において着目された事項のうち主要なものを略記し、付図に対する若干の説明をも兼ねたものであるが、忽々の間における考祭であり、資料の蒐集検討も不十分であるため、なお遺漏が多く、あくまで中間報告の域を出ていない。しかし繰り返し述べたように、この作業によって平城京の全体像がかなり細部まで実地に即して具体的に明らかになったので、今後はこの結果を平城京の保存調査にできるだけ有効に活用して行くことが要望される。とくにこの調査は昭和37年撮影の航空写真を図化した地図

を基本とし、付図もその地図上に平城京の遺存地割を記入したため、それはあくまで昭和37年現在の状況を示したものであることを留意されたい。いま同じ結果を昭和44年12月撮影の航空写真を図化して作成された奈良国際文化観光都市計画図に転写してみると、その間における変貌、つまり開発に伴なう急速な平城京の破壊に驚かざるを得ない。ましてそれからすでに5年をへている現在では、間違はいっそう進み破壊も著しいとみられる。このような現状に対しては、まず今後は平城京を無秩序な開発に委ねることなく、こうした条坊制の具体的な復原結果を、外京つまり旧奈良市街を含めて、最大限に都市計画の街路計画に盛り込むことが必要であり、そうしたことの基礎資料を得るためにも、街区の状態を典型的に把握することを目的とした発掘調査を、せめて条坊の1坪分を単位に早急に行なうことが望まれる。幸い京内の調査は今回の朱雀大路はじめ市庁舎建設予定地などの発掘調査によってようやくその緒についた感があるが、今後こうした調査の積み重ねによって条坊街区の保存、京内遺跡の調査が進み、今回の調査を含めて、平城京保存調査会以来私たちの続けてきた作業がいっそう実りあるものとなることを望んでやまない。

(岸 俊男)

(付記) 今回の調査には狩野久はじめ、今泉陸雄・和田翠・鎌田元一・柴原永遠男が参加し、また平城京保存調査会の作業では上記のほか、鬼頭清明・横山拓実・千田稔・高橋誠一らの協力をえた。

付章 航空写真による朱雀大路の調査

平城京朱雀大路発掘調査と平行して、朱雀大路を中心とした航空写真を、アジア航測株式会社に委託し、パンクロフィルムと赤外フィルムを併用して撮影した。撮影範囲は、朱雀大路および左右京一坊分（東西約1.2km）と平城宮北辺から羅城門跡南方に至る間（南北長約7km）の約8.4平方キロで、撮影縮尺は約4000分1である。この結果、平城京条坊復原の資料を得るとともに、朱雀大路を中心とした平城京の現況を知る貴重な資料を得ることができた。

平城京条坊の復原研究に航空写真を利用しようとする試みは、昭和30年来、奈良国立文化財研究所が取り組んできている。現在までに、平城京全域にわたる集成写真や1000分の1という大梯尺地形図などが作成され、条坊の復原に不可欠な資料が数多く蓄積されており、これに伴って平城京条坊の具体像が復原されてきている。今回の調査では、赤外線写真を併用撮影した。赤外線写真では、パンクロ写真に較べて、被写体の判別が容易である。これは、被写体の特性が色調の差として強調して表われることによる。たとえば、パンクロ写真では全体に黒っぽく写る森林地帯も、赤外線写真では、針葉樹は黒く広葉樹は白く写るので判別できる。また水の多い部分は黒く写るので畑と水田の差や、その間を流れる細い水路も明瞭に認めることができる。さらに土壤中に含まれる水分の量によっても写真的濃淡が変化するため、地下の溝や川跡などを指摘できる可能性もある。ちなみにパンクロと赤外線写真との判別上の差異を比較するとTab.4 のようになる。このように赤外線写真では、水田と畑の区別、水路の追跡が明瞭であり、条坊・条里などの地割復原調査に相当大きな効力をもたらすものである。今回の調査で50枚近い赤外線写真を撮影したが、現在整理中でありその成果を充分に指摘できるまでに至っていない。しかし、一部では発掘地点付近で現在は廃絶している旧水路を確認することができており、今後整理の進行とともに更に大きな成果を上げることが期待できよう。

今回の航空写真撮影の目的には、前述した目的とともに、朱雀大路の現状を知ることも含まれる。最近、平城京は都市化の波をうけ、急速に開発が進んでおり、これに対処し、平城京条坊をいかに保存活用するかという計画の立案が必要である。この意味からも今回撮影した平城京の現況写真が大きな役割をはたすことが期待できよう。

（黒崎 直）

註1 奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告Ⅱ」1962年

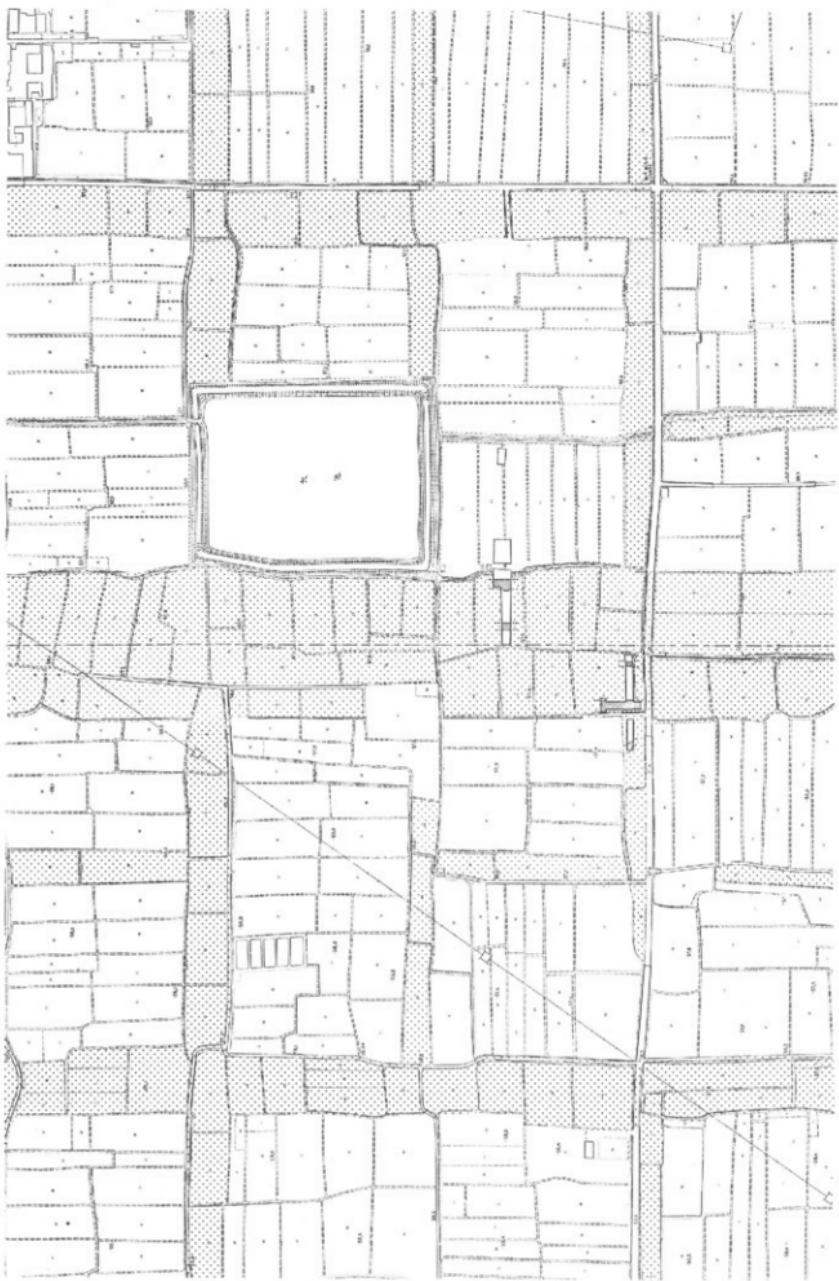
註2 西村謙二「国解写真測量」1969年

	パンクロ	赤外
針葉樹 広葉樹 その他	全体に黒く写る。 色調から判別することはむつかしい。 地形で区別する。	黒く写る 白く写る 独自の色調になる。 全体として判別しやすい。（クロマ効果）
畠	全体に灰色の色調（パターン） 耕地の境界、地形等で判別	含水率、耕作物によって濃度差が多様
水田	灰色または白、細い川、水路は地形から判別する。	全部黒く、境界は白くなる。
川	灰色または黒、時には全反射して白くなる	水部はすべて黒、谷川とか水路も黒線で表われ易見容易。
池	灰色または黒	全部黒、森林内にあっても発見容易。
河床	全体に白または灰色、砂れきの区別は困難	砂は白く、土は濃い灰色か黒、砂は灰色。
道路	白色、発見容易。	土、コンクリート、アスファルトで色調変わる。発見がにくい。熱練を要す。

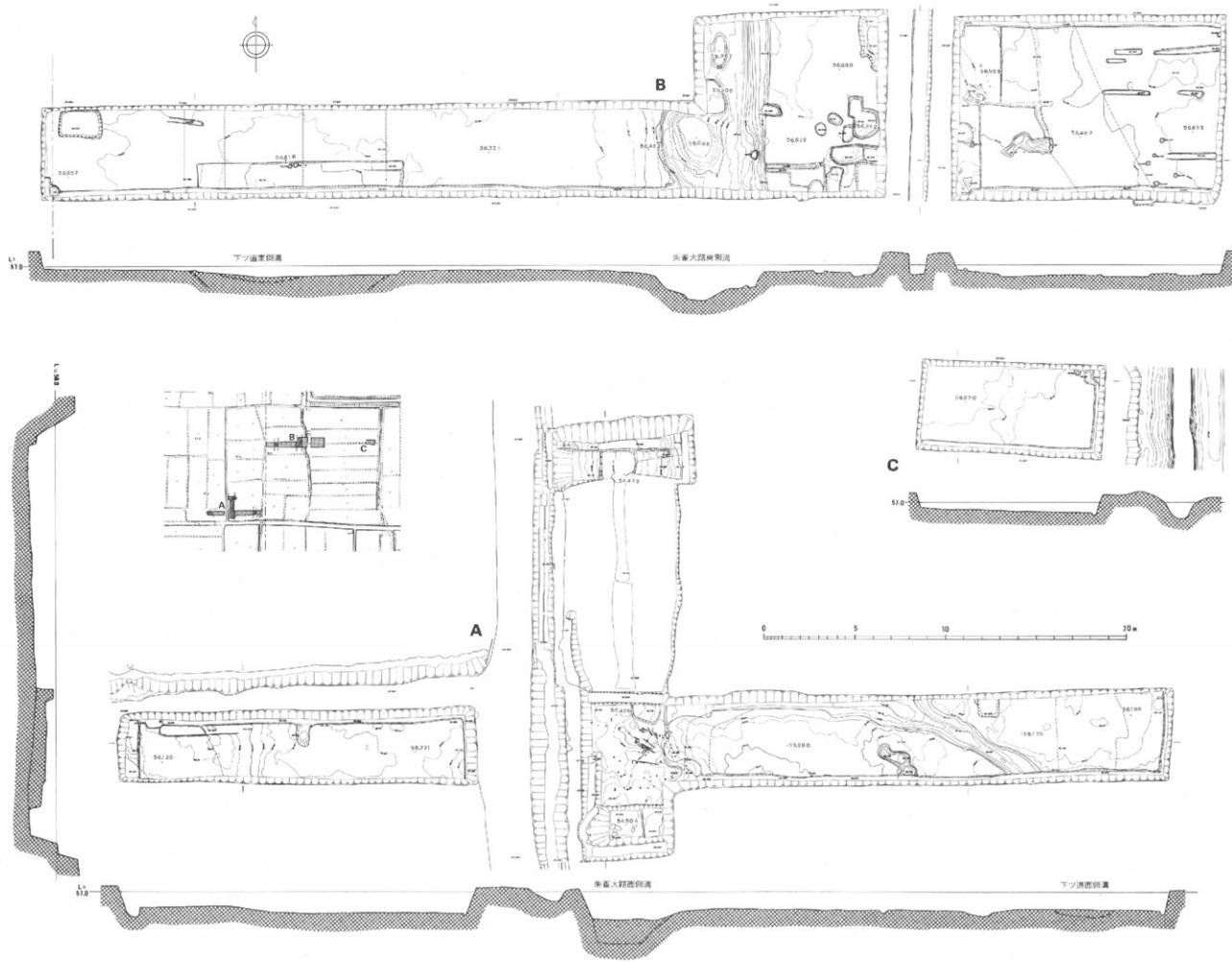
Tab. 4 パンクロ・赤外線写真判別比較表（註2による）

図面・図版

PLAN I



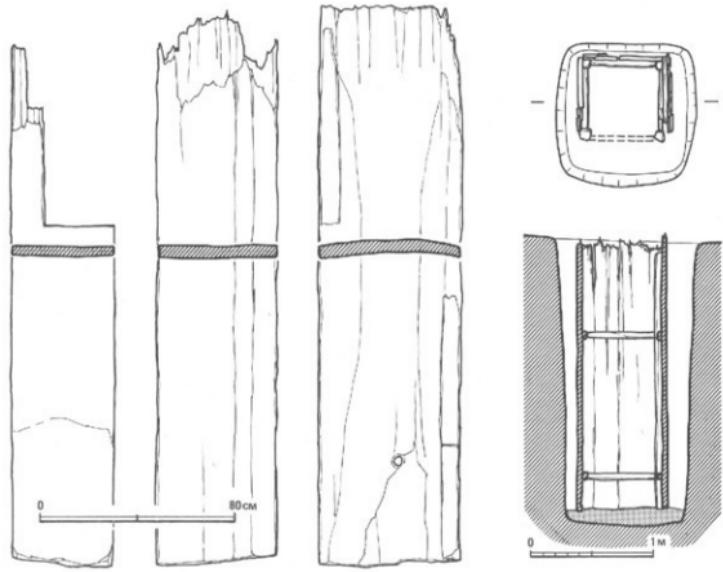
弁提区周辺地形図 1 : 3000



朱雀大路発掘調査遺構図



発掘遺構配置図 1 : 3300



井戸 2 實測図

二条大路

三条大路

坊間大路

朱雀大路

坊間大路



朱雀大路航空写真 - 2

1 : 4000

1974年3月撮影



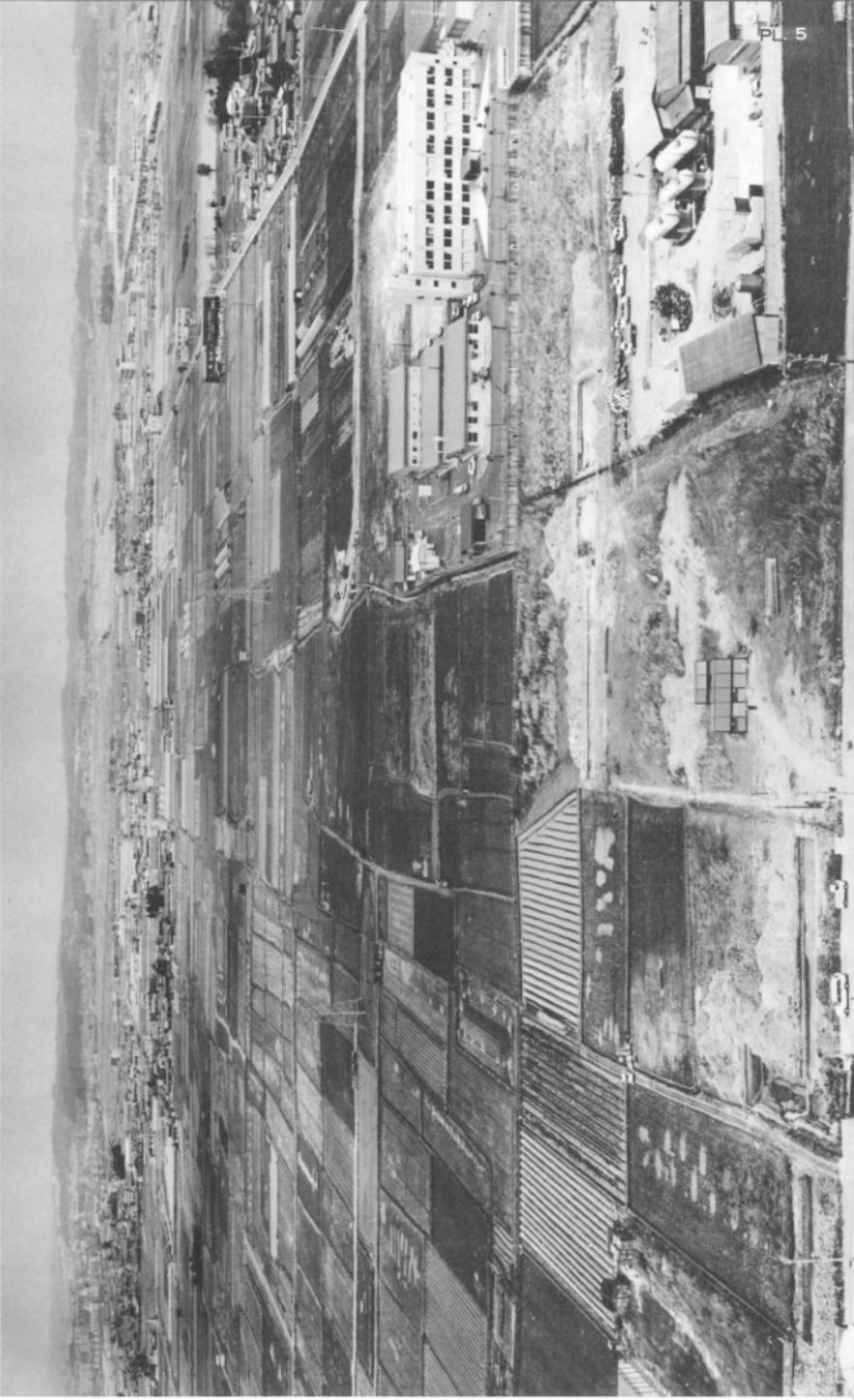
坊間大路

朱雀大路

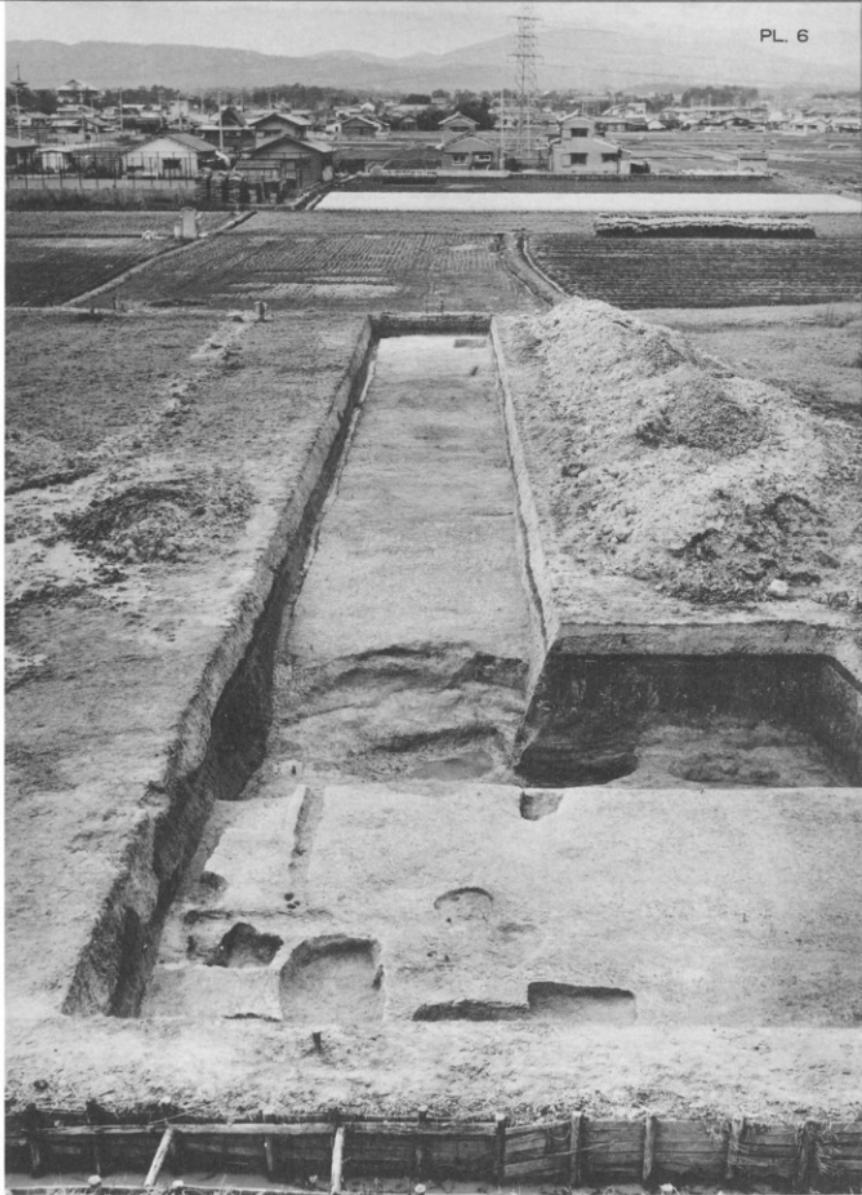
坊間大路



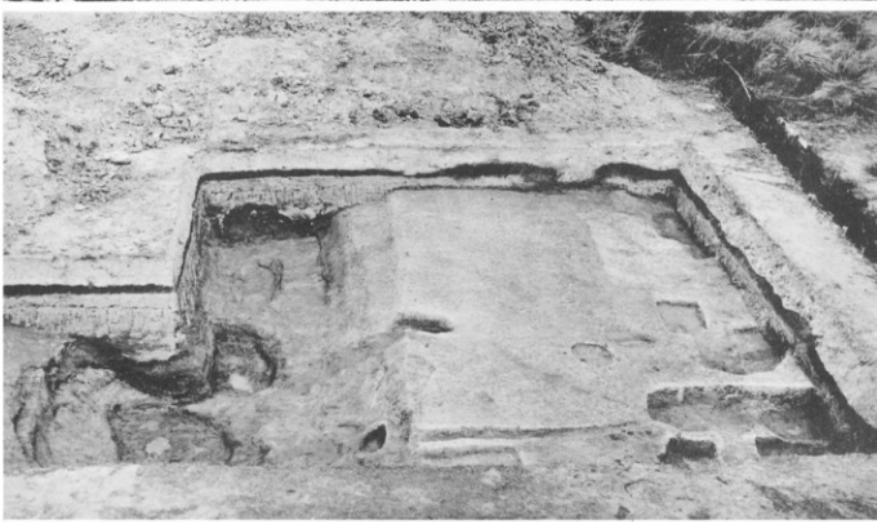
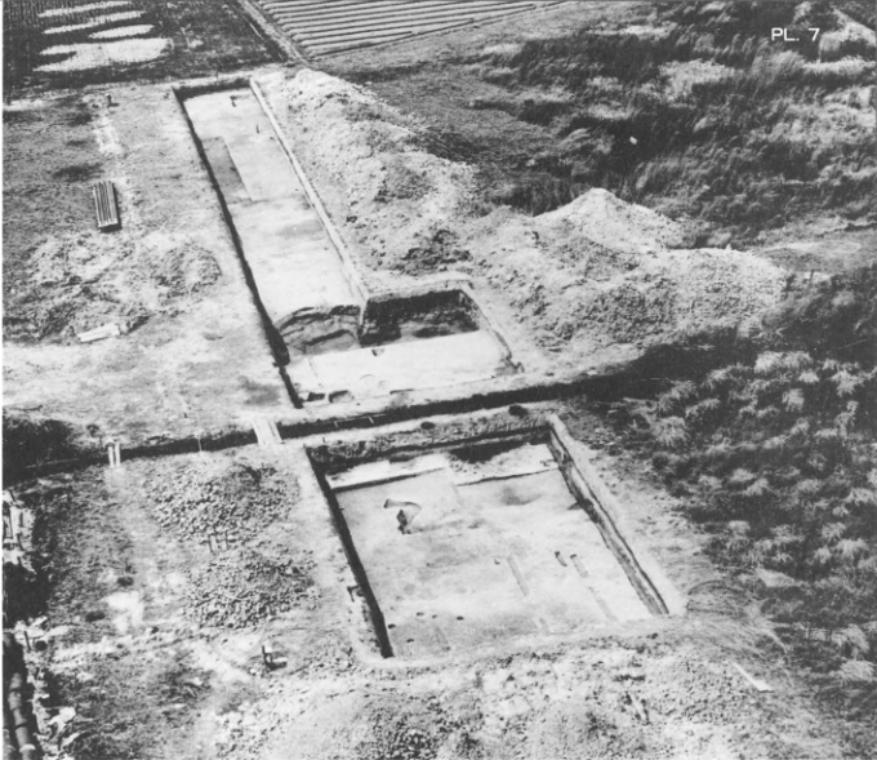
朱雀大路



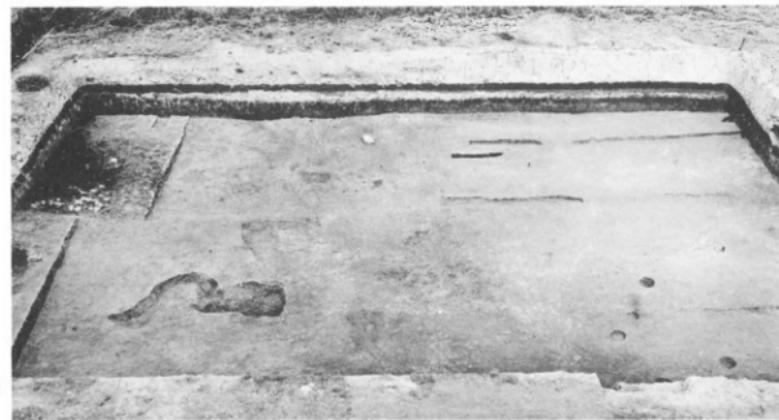
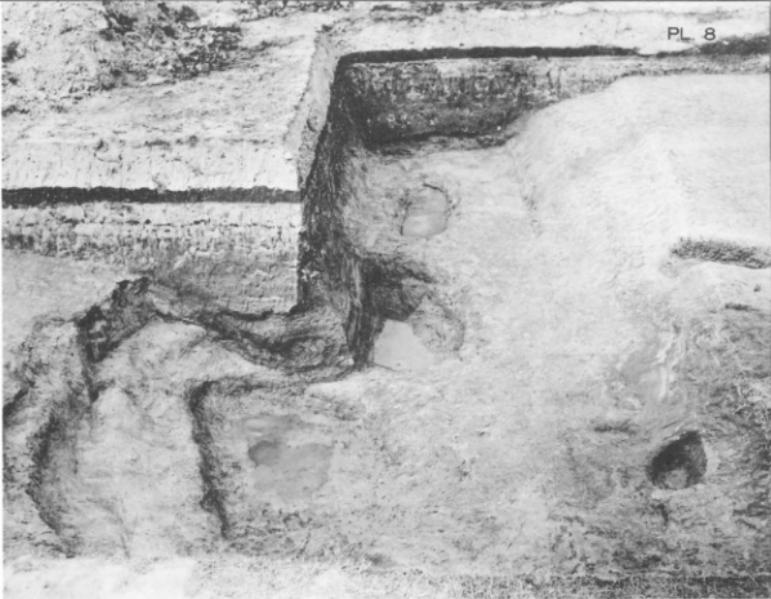
余堀区上空から平城宮跡を望む



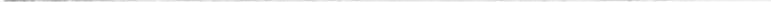
朱雀大路路面と東側溝



1 東発掘区全景 2 東側溝



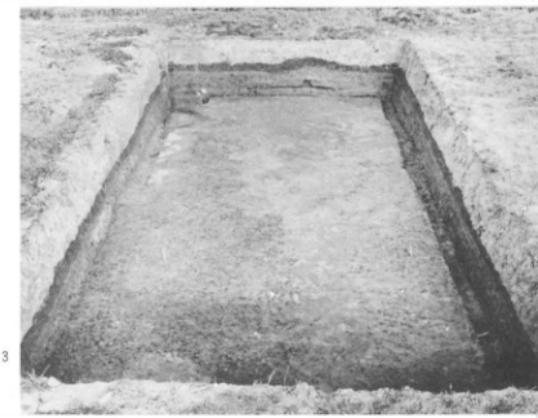
2



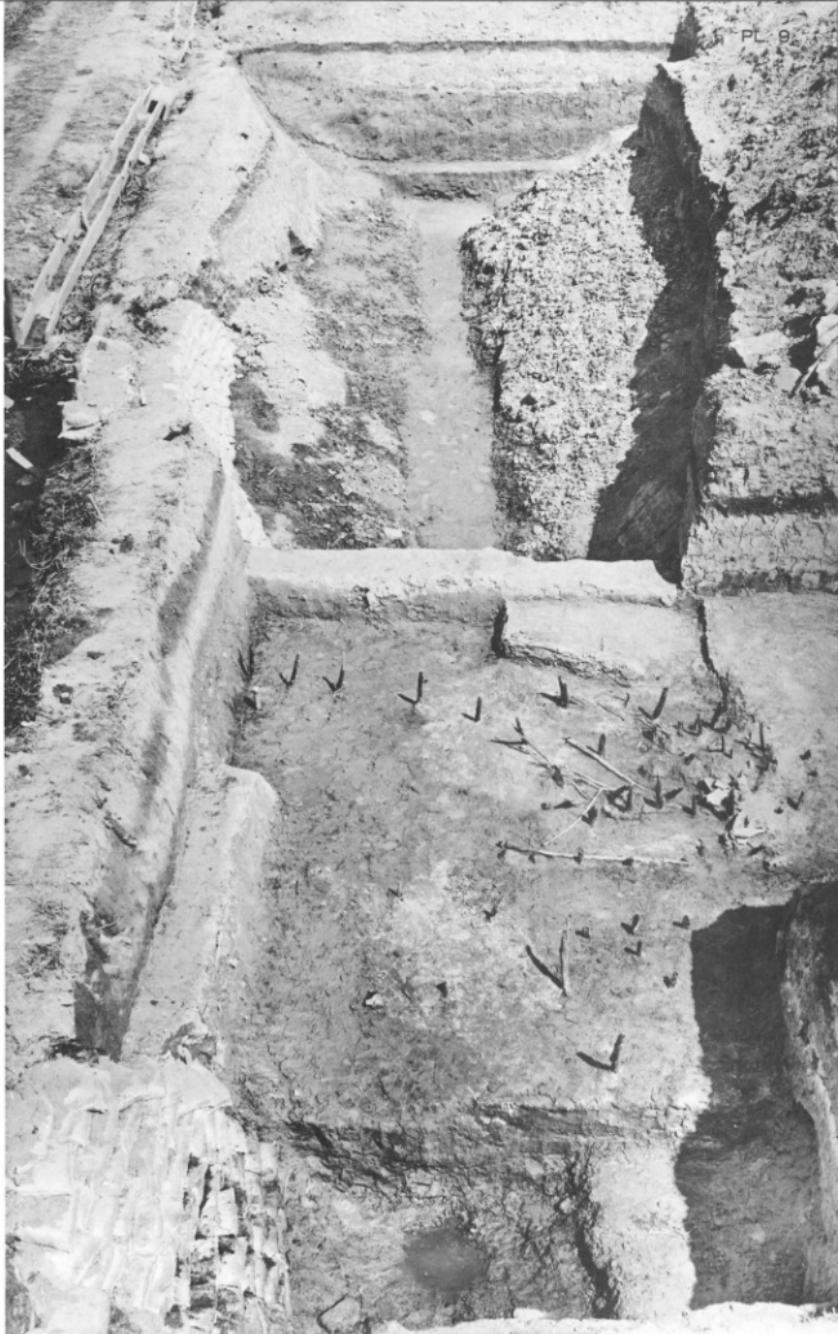
1 東側溝

2 左京六条一坊

3 同上東端



3



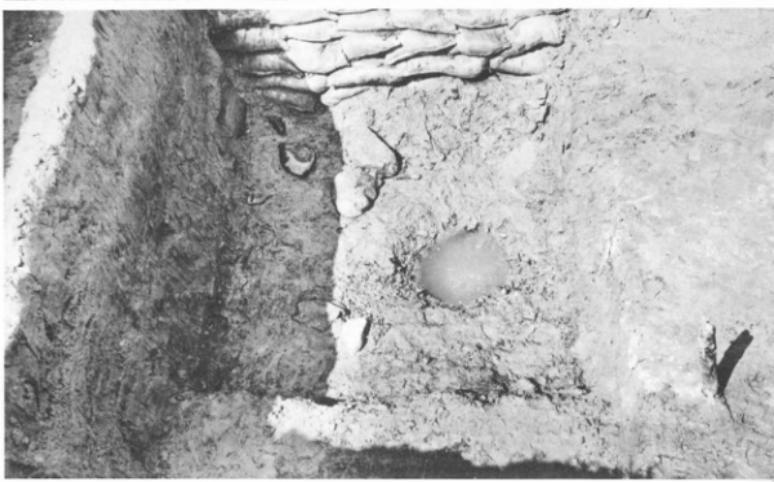
朱雀大路西侧沟



1 西側溝
北壁



2 西側溝
護岸狀況



3 西側溝
玉石の散乱



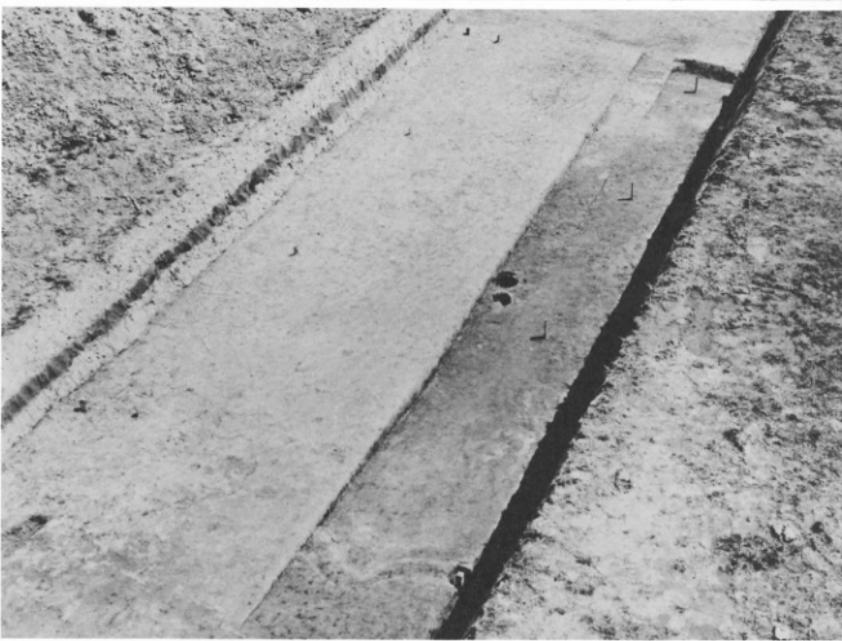
1 右京六条一坊



2 失雀大路路面



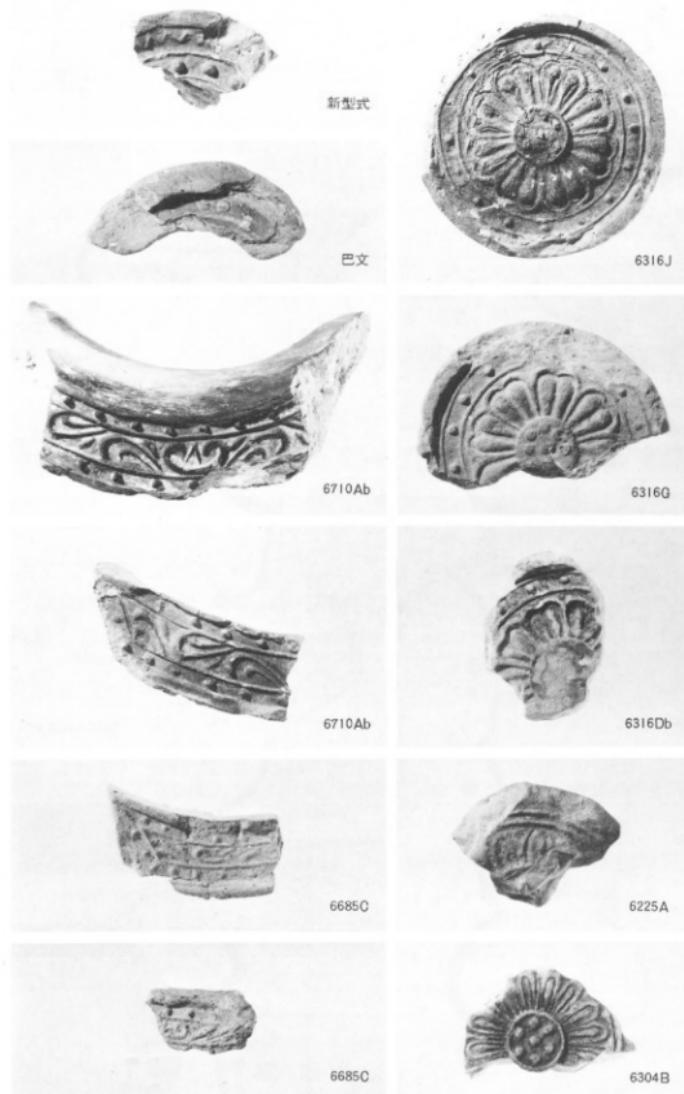
1 下ッ道
西侧溝

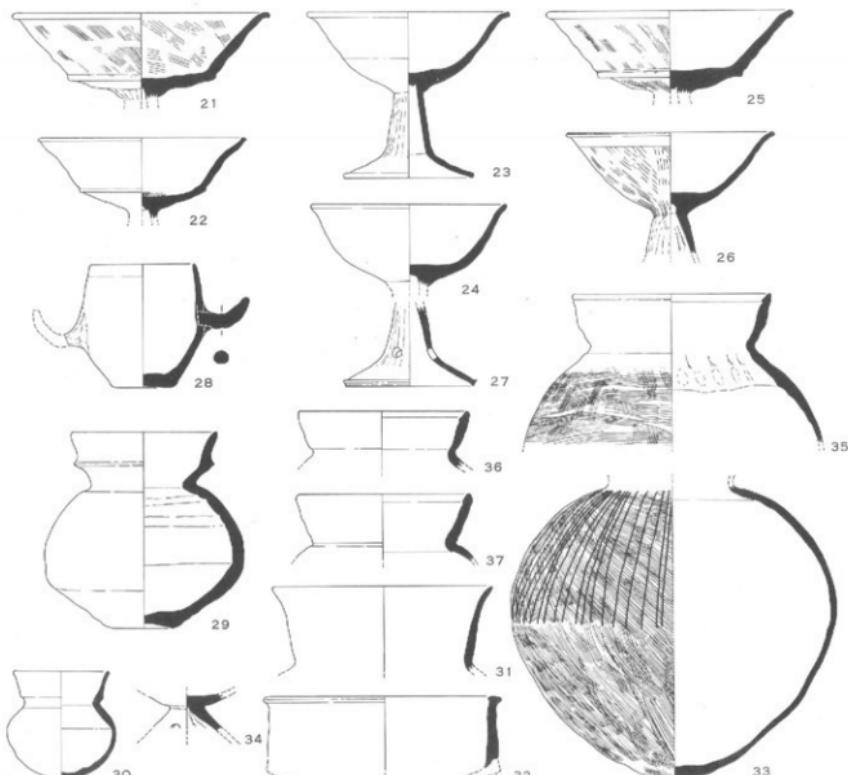
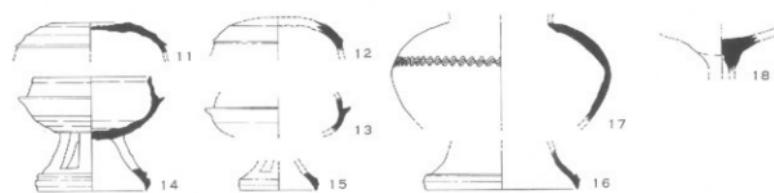
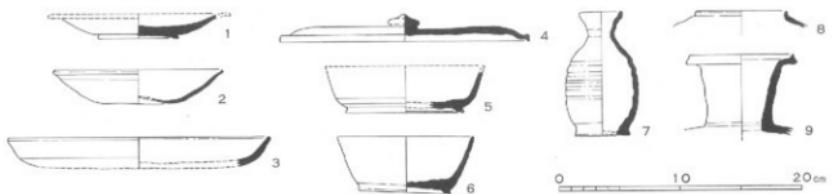


2 下ッ道
東側溝と
堀割り



3 同上断面





I ~ 9 大路西側溝出土土器 11~18 下ツ道側溝出土土器 21~37 古墳時代溝出土土器



9



7



1



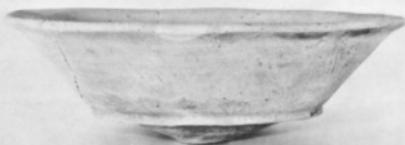
6



22



14



25



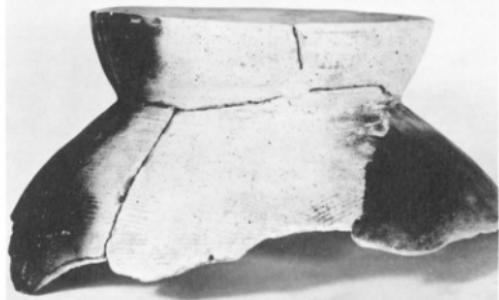
23



30



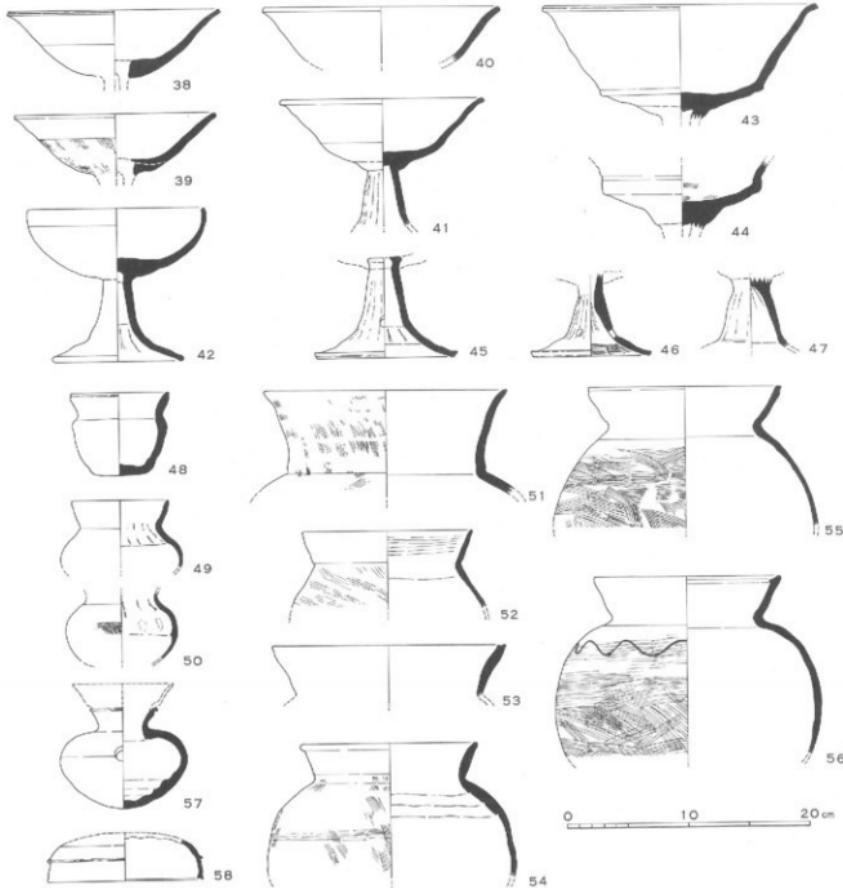
28



35



29



38~58 古墳時代溝出土土器



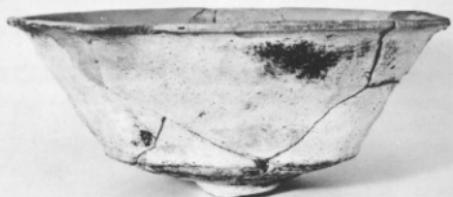
41



42



46



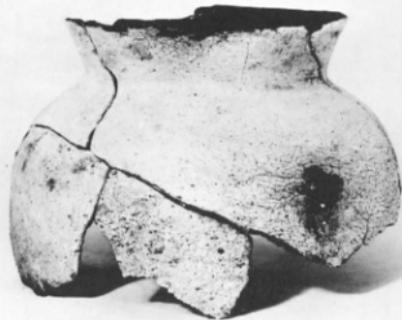
43



48



57



54



5



4



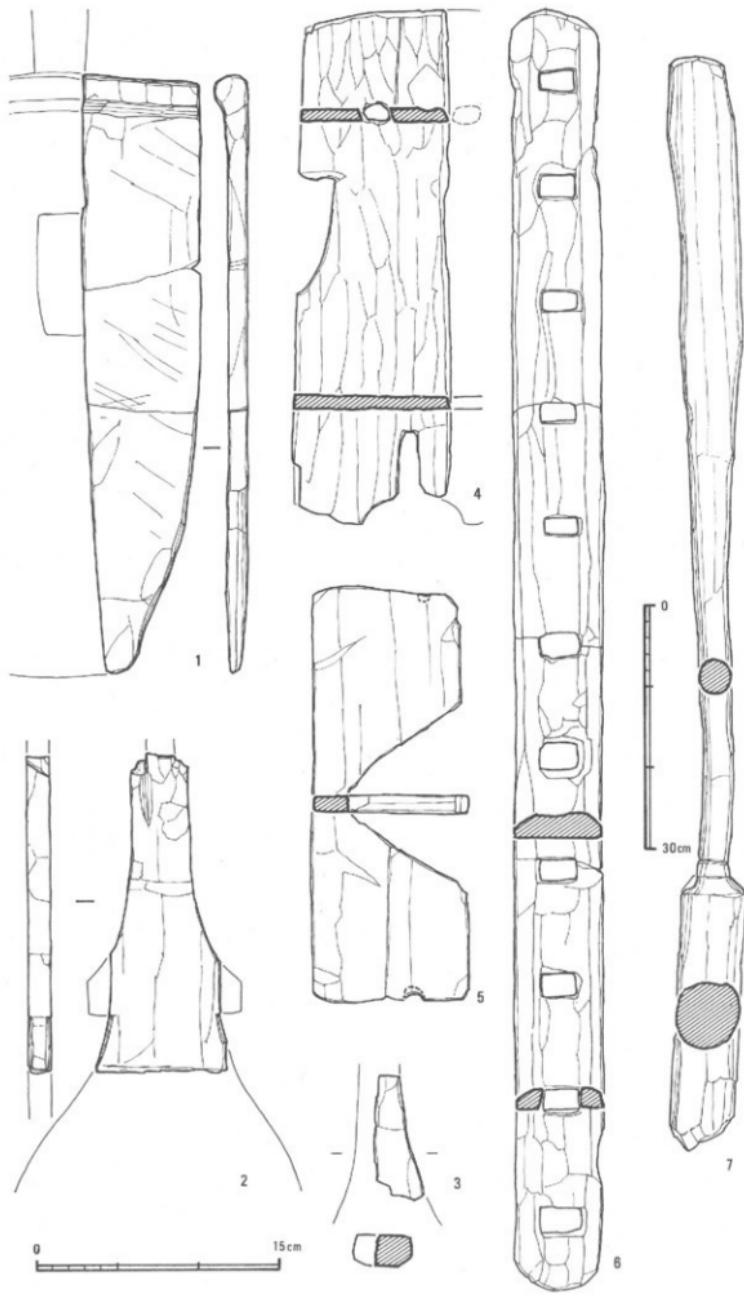
3



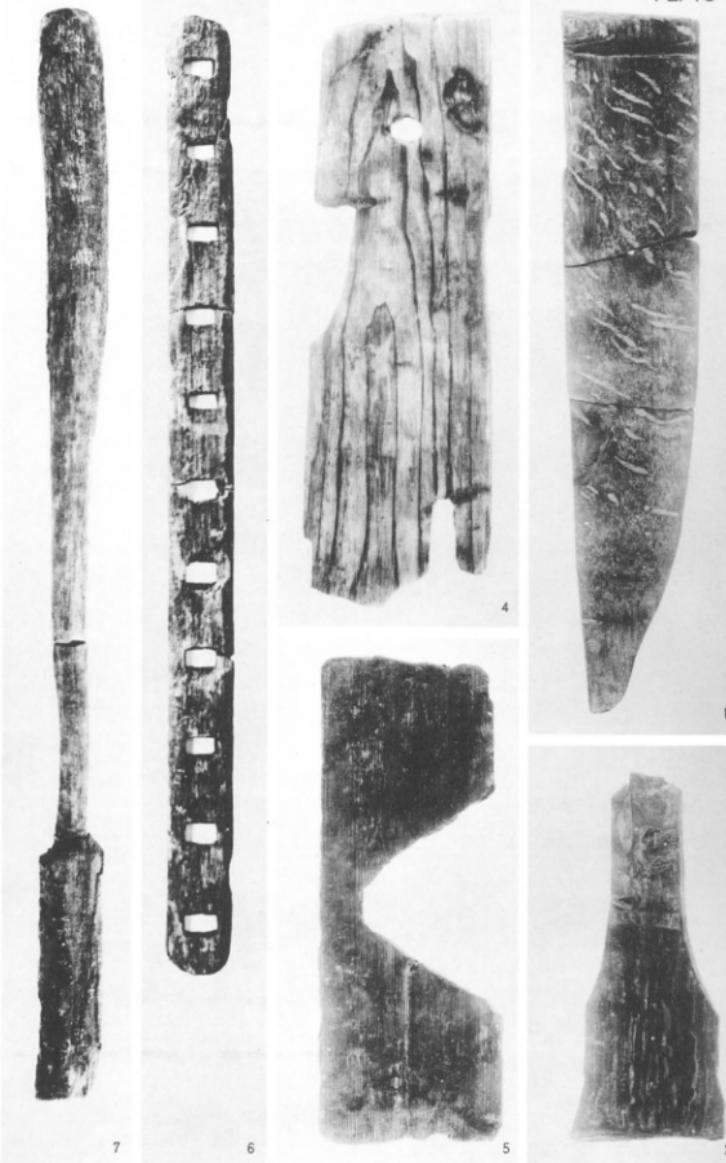
2



1



1 ~ 7 古墳時代出土木製品





2

奈良市柏木町付近航空写真

1 赤外写真

2 バンクロ写真

前川遺跡



1 全景



2 井戸



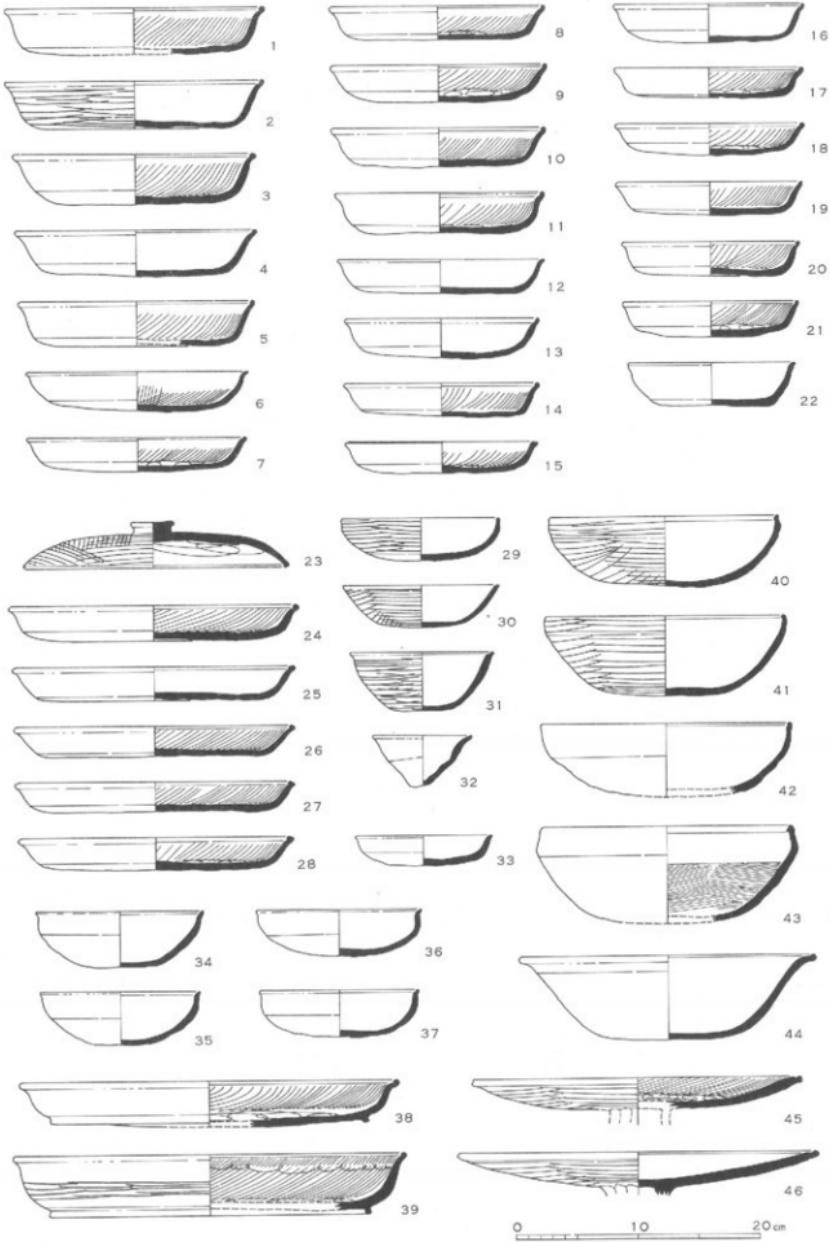
3 奥掘状況



1 井戸細部



2 土器出土状況



1・11・14・22・24・26・32・35・41・42・44・46 井戸1出土土器
2・10・12・13・15～21・23・25・27～31・33・34・36～40・43・45 井戸2出土土器



12



3



17



6



16



10



19



11



22



9



33



23



30



25



29



28



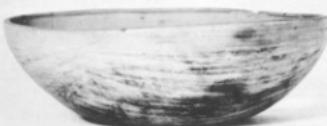
37



40



34



50



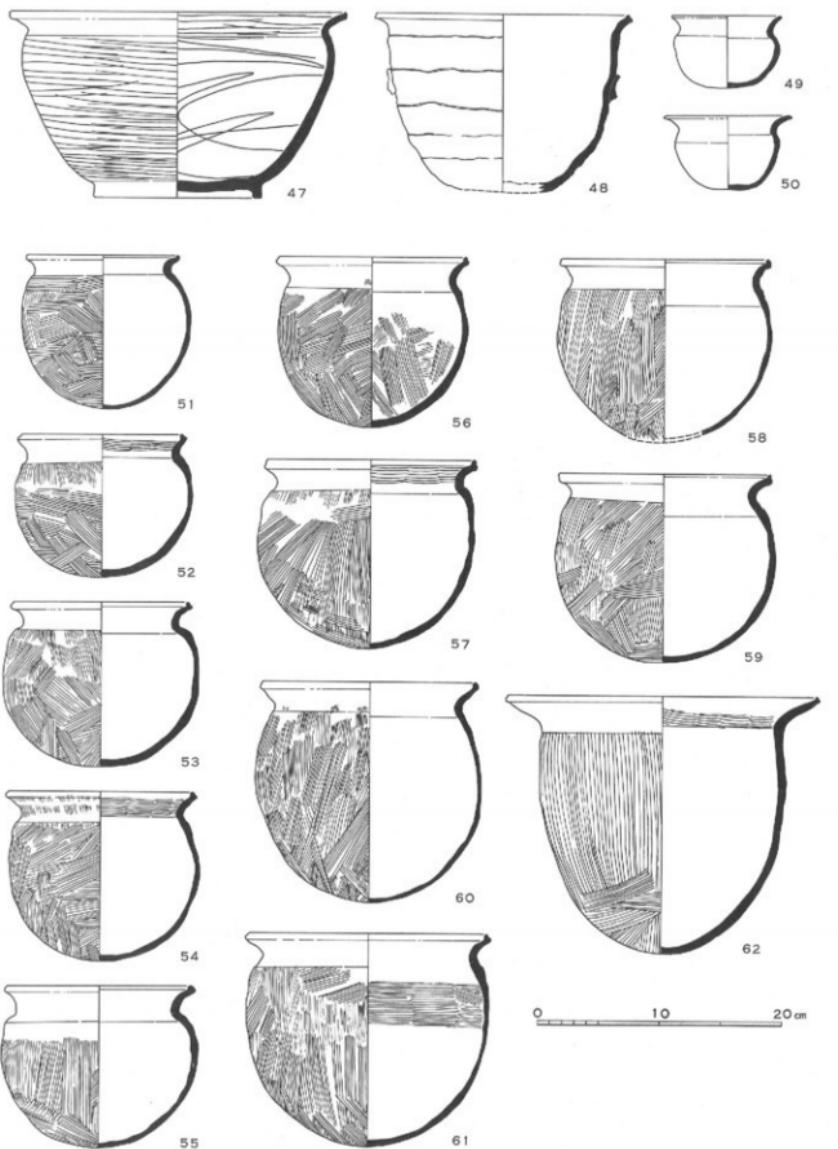
44



32



38



47・58・60・61 井戸1出土土器 48~57・59・62 井戸2出土土器



52



60



51



61



56



48



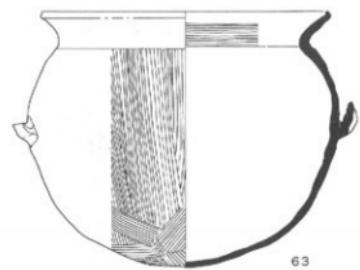
59



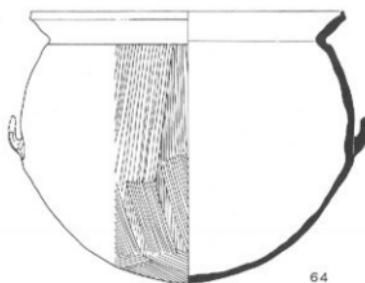
47



57



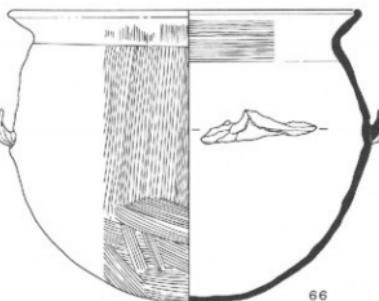
63



64

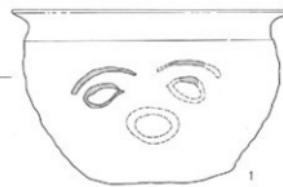


65

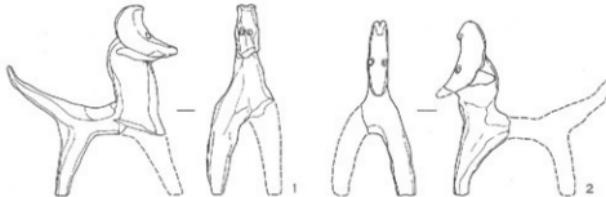


66

0 10 20 cm



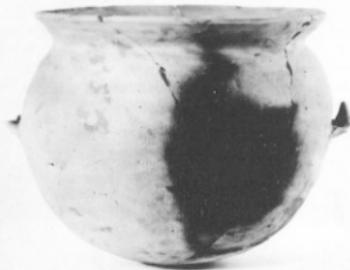
1



3

63・66 井戸1出土土器
1 井戸2出土墨書き土器64・65 井戸2出土土器
1・3 井戸2出土土馬

2 土城6出土土馬



63



64



66



65

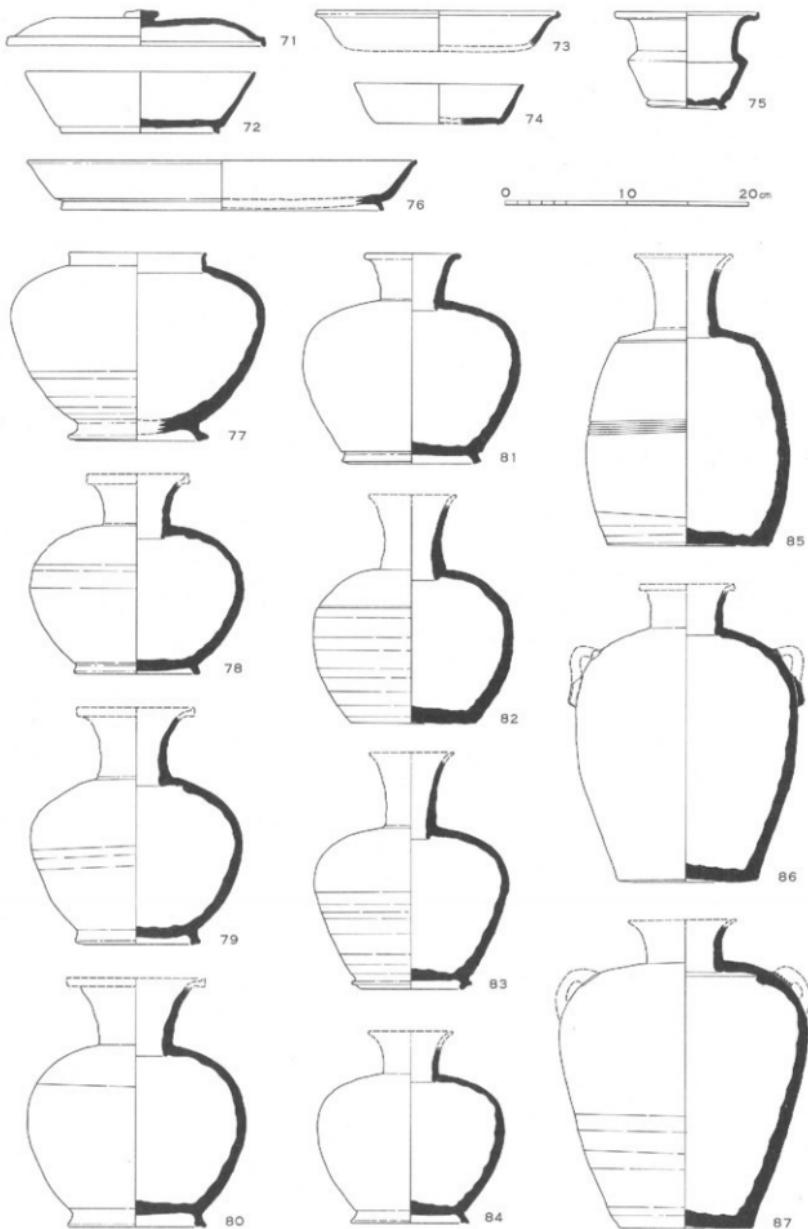


68



67





78・86 井戸 1 出土土器 71～77・79～85・87 井戸 2 出土土器



73



71



75



72



85



81



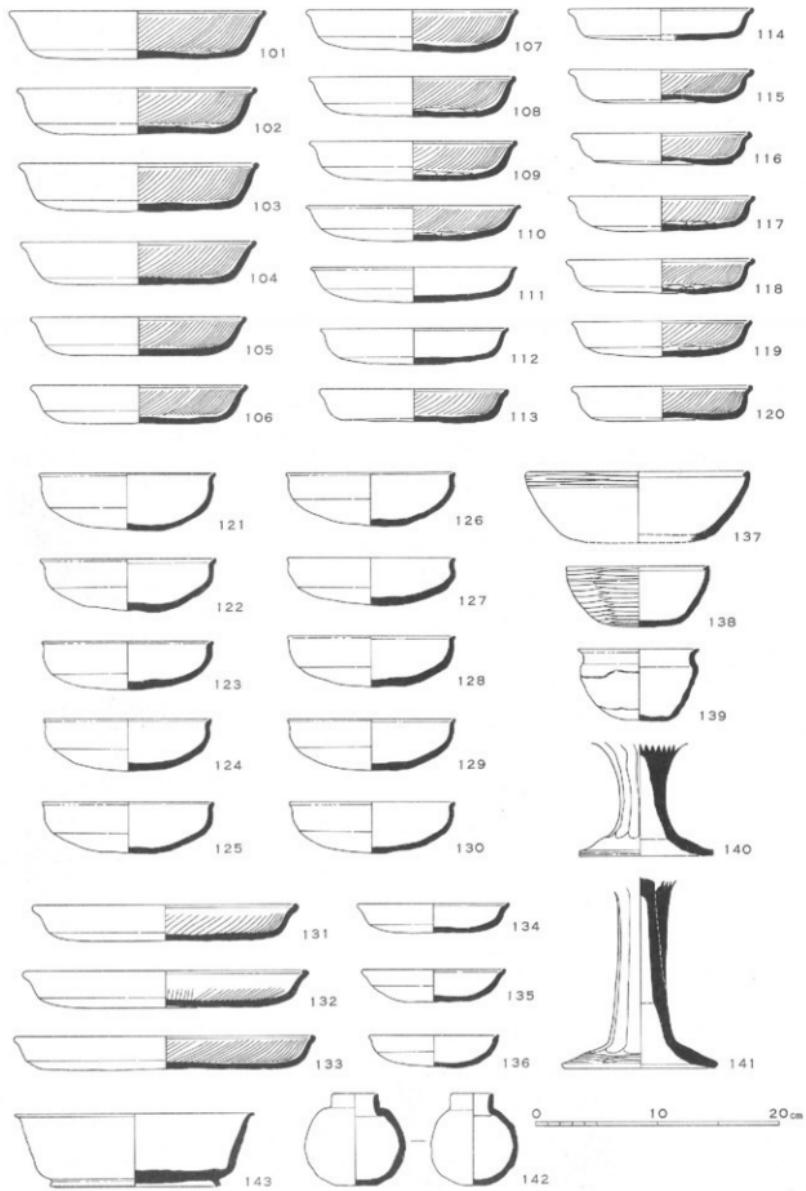
79



86

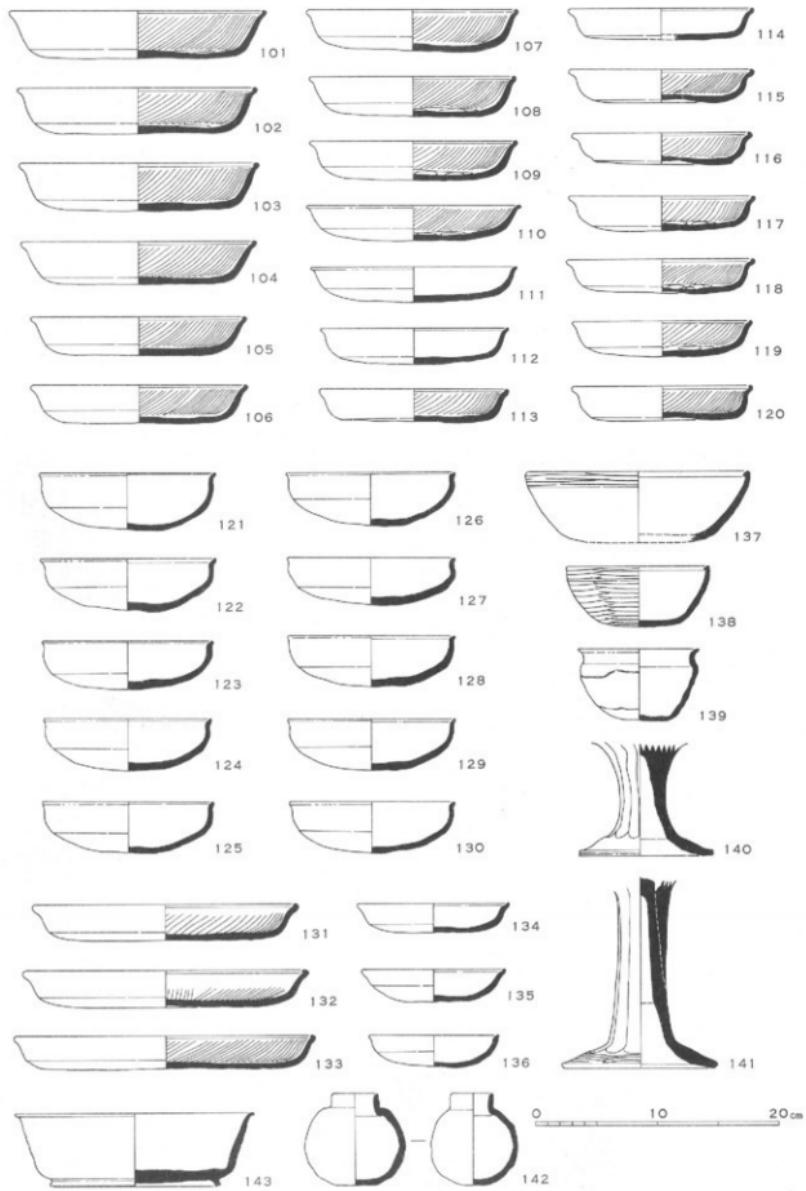


84



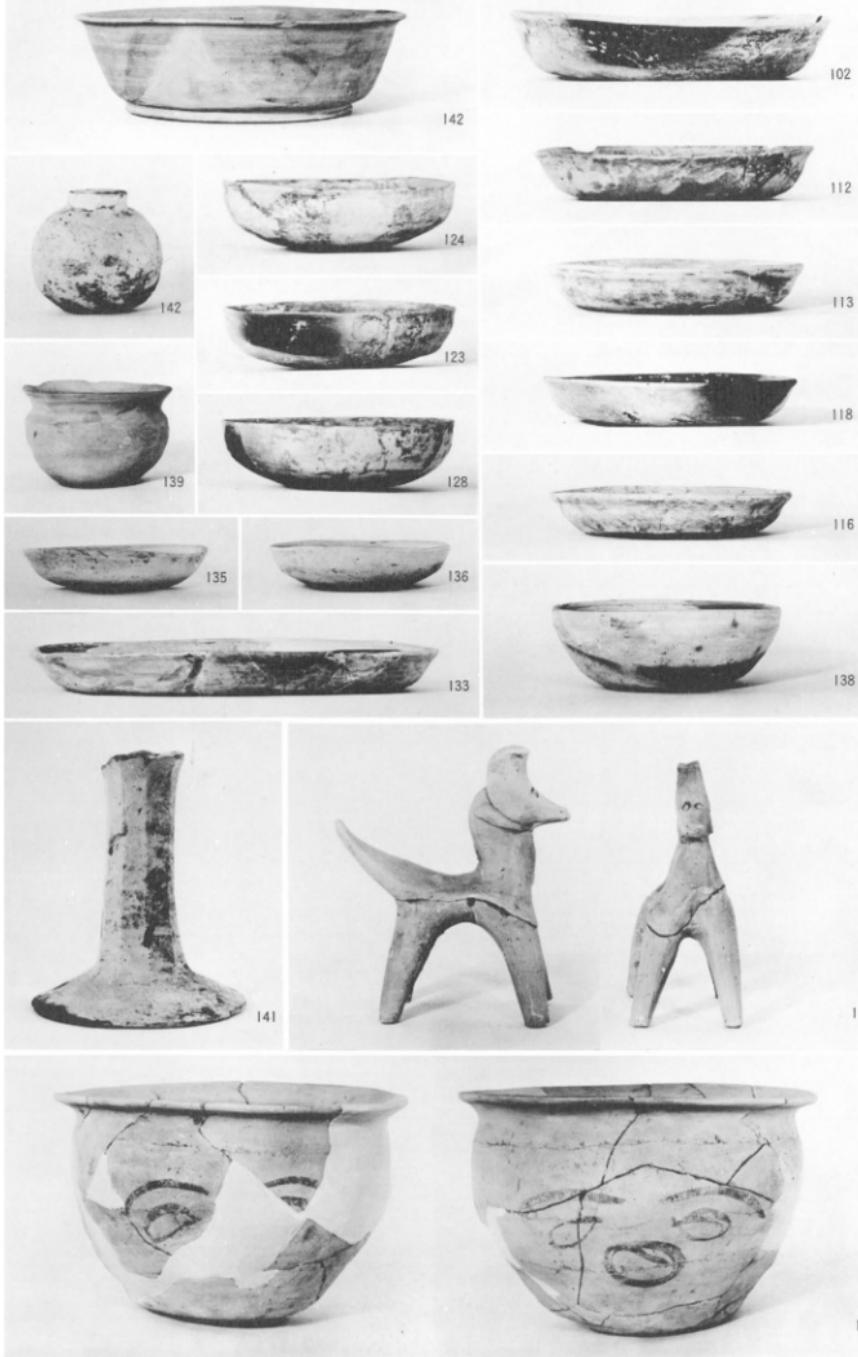
101~141・143 土城 I 出土土器

142 土城 5 出土土器



101—141·143 土城 I 出土土器 142 土城 5 出土土器

0 10 20 cm



平城京朱雀大路発掘調査報告

1974年3月

発行 奈良市

編集 奈良国立文化財研究所

印刷 共同精版印刷株式会社

